1工 3K-80

289
Y86
10㋐

吉田松陰 大陸・南進論

本義亮 著

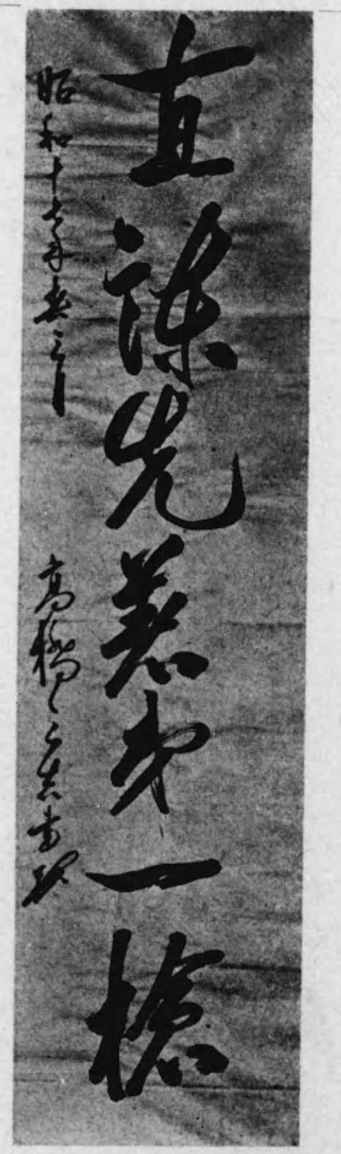
始

K3K-80
289
Y86
10

福本義亮著

高田松陰大陸・南進論

誠文堂新光社版



海軍大將　高橋三吉閣下題字

贈正四位　吉田松陰畫像

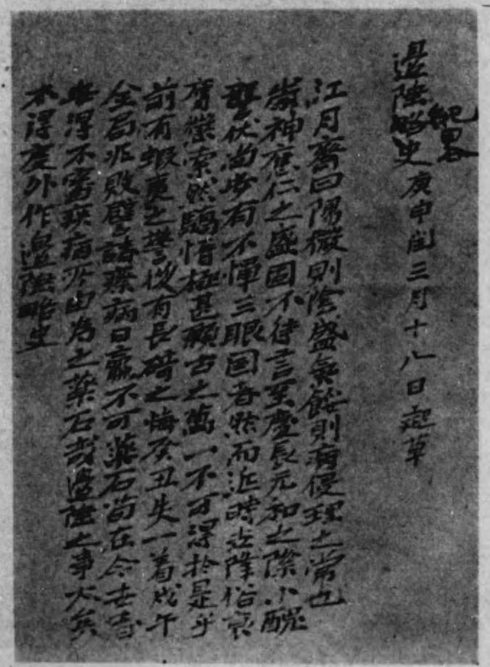
松下村塾

曰不升則昃。月不盈則虧。國不隆則替。故吾保國者。
不徒無失其所有。又有增其所無。今急脩武備。艦器
具礮器足則宜開塹暇夷。封建諸侯。亲間奪加模寇
加俠。都加諭。琉球朝覲。會同。比內諸侯。責朝鮮納質
奉貢如古盛時。北割滿洲之地。南收台灣呂宋諸嶋
漸示進取之勢。然後愛民養士。愼守邊圉。則可謂吾
保國矣。不然。坐于群夷爭聚之中。無能舉足搖手而
國不昏者其幾與。
孫武論兵。專以知彼知己為要。始之以計。曰。主孰有
道。將孰有能。天地孰得。法令孰行。兵衆孰強。士卒孰

吉田松陰著　幽囚錄

露光量違いの為重複撮影

贈位
久邊瑞略
正坂松陲
四玄門紀



松門　木戸孝允

943
111

はしがき

いまや先覺志士の教へを行ずべき神機が來た。

いまや先賢殉國士の遺業を奉じて、これが完遂を期すべき秋が來た。

藤田東湖は、香港の攻略を夢みてゐた。橋本左内は、日本の敵國は英・露である、然し先づ日露同盟を謀つて老獪なる英國を擊つべしとさへ主張してゐた。谷三山はその靖海芻言に於て、對米武備論を唱へてゐる。佐藤信淵は『混同秘策』で今日の東亞共榮圏樹立を豫言してゐる。西郷南洲や前原一誠等の征韓論も、またまさに洋化を急いだ開化期に於て、儼(げん)として興亞の大道を驀進せんといふのであつた。

そして松陰先生は『夷情深遠測(はか)るべからず』である『夷情を審にせずんば何ぞ夷を馭(ぎょ)せんや』であつて、決然海外に航し、單身敵地に入つて夷情を探査すべしとい

露光量違いの為重複撮影

943
111

はしがき

いまや先覺志士の教へを行ずべき神機が來た。

いまや先賢殉國士の遺業を奉じて、これが完遂を期すべき秋が來た。

藤田東湖は、香港の攻略を夢みてゐた。橋本左内は、日本の敵國は英・露である、然し先づ日露同盟を謀つて老獪なる英國を擊つべしとさへ主張してゐた。谷三山はその靖海芻言に於て、對米武備論を唱へてゐる。佐藤信淵は『混同秘策』で今日の東亞共榮圏樹立を豫言してゐる。西郷南洲や前原一誠等の征韓論も、またまさに洋化を急いだ開化期に於て、儼(げん)として興亞の大道を驀進せんといふのであつた。

そして松陰先生は『夷情深遠測(はか)るべからず』である『夷情を審にせずんば何ぞ夷を馭(ぎょ)せんや』であつて、決然海外に航し、單身敵地に入つて夷情を探査すべしとい

贈正四位　久坂玄瑞　邊(門)　紀略

松門　木戸孝允

ふのであつた。而かも、いまの大東亞共榮圈に、更に加ふるに、印度・阿弗利加・濠洲を以てし、日本の進展すべきこの國策完遂途上、將來の恐るべき敵國は米・露なりと斷じ敎へられ、一刻も早く高度國防國家を作れと叫んでをられる。この大陸・南進論が卽ち本著である。

○

予がこの大陸・南進論に筆を進めたのは、昭和十六年の眞夏であつた。

四月以來の日米交渉が、あまりにぐづついて憤懣に堪へなかつたからである。

謀略的な馬鹿げた懸け引きに、最早、堪忍にも自づと限度があると考へたからである。

米國はペルリ來航以來の傳統的威嚇政策の甘味を忘れず、昔ながらの恫喝脅迫を以て、一面威嚇、一面懷柔とで翻弄しつゝあつた時である。

然るに、これまた幕末以來事勿れ主義の叩頭國交に馴致されてゐた我が廟堂諸公は、優柔不斷で仲々見切りがつかず、交渉は徒に遷延されてゐるのみであつた。

それに國民までが、賴むべからざる宣傳外電に淡い希望を辿りつゝ、國交の好轉を夢みて、人心の緊張は失はれ、士氣は漸次衰へんとするかの樣にも見受けられた時であつた。

これは大變だ。これではいけない。これほど危險なことはない。坐ながらにして國家衰滅への轉落だ。

たとへ日米間に、よしや一時的小康を保つても、所詮戰はなければならぬ兩國の運命である。いづれは太平洋上で雌雄を決せなければならぬ兆候が既にきざしてゐる。これは時間の問題である。

唯賴むべきは不屈の武力であり、旺盛なる國民の氣力であり、一億一心の國家總力であると、焦心憤激に堪へざるものがあつた秋である。

○

日米交渉は相變らず陰雲に覆はれて、一體どうなることやら更に解らない。

公式非公式數回の交渉が重ねられても、一切これが內容を知ることは出來ない。

それに內閣は交迭する。來栖大使は渡米される。國民にはサッパリ何のことか解らない。

然るに米國は日本への經濟封鎖をドシ〳〵進めて、息の音を止めんとの態度を示しつゝ、一方には、A・B・C・Dの包圍陣を固めて、身動きさへ出來ない樣に仕向けて來た。それに重慶政府への援助は、軍事に經濟にあらむ限りを盡くして、日本の奔命疲勞を助長せんと陰謀してゐるのみならず、我が平和的好意を逆用して、我が人心の攪亂にも乘り出して、國內的崩壞をも策して來たのであつた。

そして遂にハル國務長官は、野村・來栖兩大使に書面を以て米國側の主張原則を示し、日本の回答を求むるといつた高慢不遜な脅迫威壓であつた。謂はゞ米國が逆に日本に最後通牒を與へるといつた暴戾さと急迫さとであつた。

○

それは、日本をして東亞の情態を滿洲事變以前に復舊せよといふのであつた。

米國の云ひ分は、何でも默してそのまゝ聽けといふのであつた。あまりにも非禮であり、無法であり、暴戾不遜であつた。これほど人を喰つた云ひ分はあるまい。これほど日本を馬鹿にした交渉はあるまい。

こんな無禮な脅し文句が、どうして聽けるものか。聽けば日本は國家としての生存權を失ひ、成長權をも失ふことになる。

この聽けないことが日米交渉の內容であつたことは、いかにも情ないことであつた。

○

我等はどうしても支那事變を完遂せねばならぬ。我等は何としても、經濟封鎖を打ち破らなければならぬ。我等は國邊を取捲く武力脅威を、敢然掃除しなければな

らぬ。

そして我等は東亞に於ける指導者として、その共存共榮圈内を守護するの大責任を果さなければならぬ。ましてや、米英桎梏下の諸民族を開放してやらなければならぬ。聖戰十年の眞意もまた、玆にあるわけである。

若し萬々一にも、これが不可能なれば、日本は東亞に國家として存立するの甲斐もなければ、日本國家として生存する價値も意義もないことになる。

○

かうした悲憤痛嘆の情に驅られつゝ、切齒扼腕、日米交渉の妖雲怪雨の去來を見守りつゝ、一氣呵成に筆を進めて、十一月の下旬に成稿したのが、卽ちこの『吉田松陰の大陸・南進論』である。

然るに十二月八日、橫暴反逆なる米英に對し　畏くも宣戰の　大詔は渙發せられて、遂に大東亞戰爭となつた。これほど胸のスットした快哉のことはなかつた。

而かも緒戰未だ一ヶ月をも經ぬ內に、我が無敵艦隊は、豫想だもしなかつた布哇空襲で米太平洋艦隊を全滅し、續いてグアム・ウェーク兩島を占領せるのみならず、廣袤七千哩の洋上に於て、敵根據地のすべてを擊破し、更に香港の攻落と共にシンガポールの運命は旦夕に迫り、東亞に於ける英國百年の權勢は忽ちにして崩壞拂拭せられ、戰火更に擴大してボルネオ及びラングーンに進み、新春二日には、米が難攻不落と賴みし牙城マニラも遂に陷落して、南洋の天地悉く我が勢權圈內に入り、太平洋上、日東旭光を仰ぐに至つたのである。そして東に近く米本土を望み、西南に印度・亞弗利加・濠洲を俯瞰するの態勢を整ふるに至つたのである。

今更ながら、御稜威の難有さに感泣すると共に、忠勇無比なる我が海・陸・空軍將兵の殉國奮戰に感謝しつゝ『吾れよくも皇國に生まれたり』の幸福さを、つくづく感ぜずにはゐられないのである。

○

翻つて松陰先生の大陸・南進論も、これを端的に要約すれば、我が肇國の大精神である日本帝國不動不易の國是國策としては

日・韓・滿・支、一心一體となり、その總力を以て南洋・印度・阿弗利加・濠洲に及ぶ、所謂大々東亞共榮圏の確立であつた。この聖業完遂のためには、所詮米・英・露と戰ふの外はあるまい。彼等の暴戾なる東亞侵略を排し、更に進みて肇國精神たる八紘一宇の大理想を世界に樹立せん。

と、されたものである。

皇紀二千六百一年で神嚴なる神機が我等を誘ふて來た。

昭和の現代に於て、幸にもその時運が到來した。有難い時機が來た。松陰先生刑死後八十餘年にして、この大和民族の大業が始めて緒についたのであつて、松陰先生始め幕末憂國先賢志士の雄志大略に聊か酬ゆることが出來たのである。

松陰先生も「よくでかした」と、定めし九泉の下、微笑を浮べて邦家の前途を祝福されてゐることであらう。

○

斯様なわけで、本著は日米交渉當時萎微せんと杞憂した人心に訴へんとしたものであつて、大東亞戰爭直前の執筆である。從つていまや赫々光輝ある大東亞建設途上にある昭和現代人に贈らんとするには、聊か既にその機を失したるやの感がする。

然し大東亞戰の前途は仲々容易なものではない。幾多時難が横たはつてゐる。今後國民的試練を要するものは山と積まれてゐる。而かも砲火東亞の天地を掩ひ、世界は新舊秩序の進取と頑守との二つの國家群に分れて來た。我等は更に強き決意を以て深謀雄略を樹て、不屈不撓の大志を以て愈々全世界に臨まなければならぬ。これには三十年や五十年の長期戰爭は當然覺悟せねばならぬことである。この秋に當り、かうした先賢英傑が遺してくれた雄渾なる壯圖、遠謀なる大策を偲びて、國民發展の基調を培養し強固にし、以て益々國運の進展を期し國家の隆昌を計らなけれ

ばなるまい。殊に松陰先生は對外發展の基調を人心の統合・國力の培養・國内體制の整備と軍備の擴充とに主點を求めてゐられる。されば、本著必ずしも、その機を失したりと云ふべきでもあるまい。

時局の進展に伴ひ、時難の加重に鑑み、大東亞聖戰完遂のため、肇國大精神具現のため、國民たるもの益々緊張して先賢英傑の遺した偉業を顧み、その遺著を研鑽し、以て萬遺策なきを期せねばなるまい。

○

さて世間では松陰先生を以て『教育の神』と謂ふ。

直門弟五十餘名のもののみでも、早きは幕末革新風雲の渦中にあつて、國家の危難に殉じ、護國の華と散つた幾多護國の英傑を輩出してゐる。生き殘つたものは、何れも黎明日本の柱石となつて、明治新日本の建設に心魂を捧げ盡くしてゐる。

その代表的なものとして、松門の三傑と云はれた久坂玄瑞・高杉晋作・入江九一があり、吉田稔丸を加へて松門の四天王とも云つてゐる。更に木戸孝允・前原一誠等の二參議があり、伊藤博文・山縣有朋・品川彌二郎・山田顯義・野村靖・宍戸璣等の明治六大臣が出てゐる。

その他贈位されたるものや、或は明治政府の高位顯官となつたものは、相當多數に上つてゐる。教育者として、これほど現實的な教育效果を顯はしたものはあるまい。勤皇殉國教育神と賞揚するのも當然のことである。

○

また松陰先生の學問を實學と云ふ。

言へば必ず立つて行ふの知行一致の蹇々匪躬の實踐學問であつた。學問の窮理もさることながら、かうした實踐學問は、當時の俊毫青年をして血を湧かせ、肉躍らしむるの時事問題への、眞劍な對策論議となつたのも當然のことである。

而かも、時は恰も弘化・嘉永・安政・萬延・文久へと走つて、米・英・佛・露の

外敵は刻々と我が邊海に迫つて、和親開國に藉口しての脅迫的通商の强要時代であつた。一歩誤まれば開國どころか國家破滅の外はない。實に累卵の危急存亡の時代であつた。從つて松陰先生の默念坐視され樣筈はなかつた。松下村塾の教育が火花を發せないでをらう筈がない。曰く、我が國是國策如何。曰く、我が大和民族の使命果して如何。曰く、外夷對策如何。曰く米國攻め來れば如何にかせん——等。鐵火の如き眞劍さを以て論じ合つてゐた時代であつた。而かも、これ等の所論は直ちに立つて行ふといふのが村塾學徒同志の目標であつた。

茲に村塾の學問が國內政治問題の論爭となり、海外發展の大陸・南進論となり、世界制覇の國策問題をも生み出したのであつた。

○

然るに松陰先生のかうした方面の政治論や外交政策や民族的使命論の如きは、今日迄あまり研究發表されなかつたのであつて、松陰先生の研究と云へば、曰く、あの至誠殉國の烈々たる憂國の松陰精神。曰く、松下村塾の魂の個性教育。曰く、あの透徹したる日本精神の權化。といつた方面のみであつて、曰く、教育神としての松陰先生そのものであつた。然り、これまさに當然のことである。

○

さりながら、いま八十年後の現時の日本の眞姿を靜かに念視するがよい。前にも謂つたやうに、愈々大東亞戰爭となつて緒戰以來天佑的な一大偉功を奏して、いまや日本は世界の歷史を一轉せしめんとしてゐる。卽ち日本は正しく大陸に進出して、鮮・滿・支一環となつて新東亞の新建設に乘り出してゐる。更に佛印・泰とも和親同盟を結んで、遠くは南洋に進出し、更に太平洋を橫斷して、米の太平洋、英蘭の南洋を一手に收め、大東亞共榮圈の建設に、まつしぐらに心魂力を捧げてゐる。世界に向つて東亞の新秩序を興隆し、併せて諸民族の開放と資源の開發とに力め、世界人類の福祉を增進せんために、あらゆる努力を續けてゐる。これ等を一言にして

云へば、今日の日本は東洋一隅の島國民として、一方には大陸の國民となし、また一方に於ては、大洋の國民となしたわけである。國民は大和民族ではあるが、その舞臺、その使命は大陸に向つて、また大洋に向つて、今は更に全世界に向つて、三千年來培ひ來つた肇國の大精神を植ゑ付けなければならぬ時代となつたのである。

○

松陰先生は、この世界の皇道仁義化といふ肇國精神の第一歩の植ゑ付け場所を、曰く、大陸・南進に求めてゐられたのである。そしてこれを日本人の聖血に求め、これを我が民族の雄略史に求めてゐられる。茲に松陰先生の眞個日本的な雄渾なる大志があり、深遠なる哲理があり、崇高なる理想があり、千古不易の國策がある。

三千年來、大和民族が歩いて來つた一つの神聖運命を果すべき時代が來る。これが開國進取であると觀念されてゐた。それには第一に國内體制を整備し、人心の歸一統合であるとして、先づ日本人をして肇國當時の日本人の聖血にかへさしめなければならぬと考へられてゐた。

更に我が上世の歴史を視ると、大陸からも大洋からも、日本を中心として寄り集り來る國である。世界の隅から隅まで、あらゆるものが、この大和島根を根幹として、つどゐ群り來つて、世界の興隆をなすべきものであると考へてゐられたのである。卽ち現時の日本が大東亞の中心指導勢力となつて、新秩序を建設する。換言すれば、大陸よりも大洋よりも、更に全世界の國々よりも集り來つて、日本に依存する。日本は世界に向つて皇道仁義の恩澤を施し、彼等民族の幸福に貢献するといつた理念のもとに、當時の國是國策の樹立に當られたのであつた。

○

實際、松陰先生は

上世の聖皇(歴代の天皇)威武は殊方(外國)を攝め、恩は異類(諸民族)を撫(愛撫)でたまひ、英圖雄略、萬世に炳燿(かゞやく)す。しかして、その(聖皇をさす)己を虛しくし、

物を納れ（容れ）、人の長を採りて己の短を補ひ、彼の有を遷（我が國に）して我の無を贍し、曠懷偉度（廣く大なる御思召）は蓋亦後世の虛しく師とし法るべき所ならむ。

と、云つてをられる。これを現代的に靜かに考へてみるがよい。皇國の雄略史はまさに大東亞共榮圏確立が大和民族の天賦の使命である。而かも、これは武力のみでは達せられない。仁政を施し、異民族をして皇恩に浴せしむることだ。米英百年の搾取壓殺政策を一拭して、皇道仁義で愛撫しなければならぬと云つてをられる。そしてそれには、日本のみの利益を考へてはならぬ。己を虛しくして、彼等の民生を幸福にしてやらなければならない。それには物資の交流を盛んにして有無相通で、彼我共存共榮の福利を考へなければならぬ。かうしたことは皆我が上古列聖の爲し給うた御思召であると云つてをられる。

そして『平生の志、磨せず、折れず、古史を讀む毎に益慷慨す。是れ炳燿として師法とすべし』と結んでをられる。この『古史を讀むで師法とすべし』である。大東亞戰爭の輝かしき渦中にあつて、世界皇道化といふ雄々しき大和民族大使命完遂の途上に於ても、尙靜かにこの『古史を讀む』の餘裕ある崇高なる精神に於て、江湖の諸彥が敢て本著を讀破さるるなれば、本著執筆前後の日時や事機の如きは、別に問題とするにも及ぶまい。

昭和十七壬午正月マニラ攻落後三日、惜春山莊窓外飛雪紛々たるの時

椿水　福本義亮

吉田松陰の大陸・南進論

目次

松下村塾の參謀長　久坂玄瑞……三
防長年少第一流……三
涙でつゝまれた玄瑞の生涯……九
玄瑞の最期……一三
鎮西旅行の壯途に上る……三一
宮部鼎藏、松陰先生への就學を勸む……三六
玄瑞、松陰先生の門に入る……四三
松陰先生、大陸・南進國策を授けらる……五七

伊藤公と日韓合併……七二
伊藤公の生ひ立ち……七二
松陰先生の門に入る……七三
村塾時代の伊藤公……七七
韓國統監伊藤公の奉告……八二
松陰先生と朝鮮問題……八五
外夷謀略への對策……九四
言へば直に立つて行へ……九四
十年間の諸國遊學……九六
米艦、浦賀に入る……一〇二
烈々たる憂國の對策……一一〇
將及私言……一一五

急務條議……一二四
海戰策・急務策・急務則……一三七
海外雄飛の策謀……一四七
長崎に於ける露艦搭乘事件……一四七
米使斬るべし……一五六
下田に於ける米艦搭乘事件……一六一
雨の瑞泉寺……一六四
恨みは深し廿七夜記……一七一
嚴たり大陸・南進論……一七九
傳馬町獄に於ける象山との訣別……一七九
幽囚錄の由來……一八四
やむにやまれぬ憂憤、大陸・南進謀略……一八七

譯註　幽囚錄……一九七
海外進展の基調は國本の培養と國內體制の整備にあり……二六四
恐るべきは米・露なり……二六四
國本の培養と獄舍問答……二七一
國內體制の急速なる整備……二八四
外敵來襲時の國民指導……二八八
松陰先生對外思想の淵源……三〇〇
松陰先生の時代別と其師範……三〇一
山田宇右衞門賴毅、世界の大勢を說く……三〇九
山田亦介また外夷の東漸を說く……三一八
鎭西旅行時に於ける海外事情の研究……三二三
東北亡命遊と蝦夷問題……三三一
嚴たり、皇國雄略……三三八
松下村塾學徒の海外雄飛策謀……三四三
久坂玄瑞、黑龍江行を謀る……三五〇
高杉晉作の上海行……三五五
天野御民の蝦夷開拓論……三六六
竹島開拓問題と桂小五郎……三六九
亞米利加行計畫の松浦松洞……三七四
振ひ立つた松門同志の海外雄略……三七七

——（目次終）——

吉田松陰の大陸・南進論

福本義亮著

松下村塾の參謀長久坂玄瑞

防長年少第一流

奇兵隊總督高杉晋作と共に松下村塾の雙璧と稱せられた久坂玄瑞が、松陰先生の門に教を請うたのは、安政三年五月、彼れが十七歳の春であつた。

松陰先生は安政二年の暮、一年有餘の野山獄囚生活を免ぜられて、既に實家杉氏の宅に歸つてゐられたが、未だ謹愼中の身柄であつたから、杉家東隅の三疊半の一室に幽囚屏居されてゐたのであつた。然し先生の學德を慕うて、私に來り學ぶ門生達が日々增して來たので、安政三年の夏頃よりは半ば公然と、いはゆる松下村塾の殉國教育に乘り出さんとしてゐられた時であつた。

當時、松陰先生は『禁錮の身、一室を掃つて退處し、飯に赴き厠に上るに非ずんば、敢て跬步（半步）を移さず』と、恰も古聖賢が『その獨りを愼む』といつた謹嚴さを示してゐられる。そして幽囚室の壁の右側には『三餘讀書』左側には『七生滅賊』の双幅を懸けて、その間に悠々坐

臥せられ、靜思錬念、變轉極まりなき時世の推移を觀望されてゐたのであつた。しかしあのやむにやまれぬ至誠殉國の熱情は愈々燃え上つて、かの楠氏七生說を作つて七生報國の信念を披瀝せられ、又近親子弟のためには『武敎全書』を講述して武士道精神を鼓吹せられ、更にその九月には『松下村塾記』を作つて、尊皇攘夷の殉國敎育の理念を闡明された時であつて、松陰先生はまさに二十七歲であつた。

久坂は幼名を秀三郎といひ、名は誠又は通武、後に義助と改め、字は玄瑞又は實甫、秋湖と號し、江月齋ともいつてゐた。松陰先生とは十一ちがひの天保十一年、萩城下平安湖八軒屋に生まれ、寺社組醫師久坂良廸の二男であつた。幼時吉松塾（吉松總右衞門、名は淳三、松蔭又は十八峯外史と號す、高杉晋作も亦幼時此の塾に學ぶ）に通ひ、また藩校明倫館にも學び、夙に神童の稱があつた。

後年、松陰先生は彼れを評して『實甫は吾社の領袖なり』と賞せられ、また『防長年少、第一流の才氣ある者』ともいつてゐられ、更に『才あり氣あり、駸々進取、僕輩のよく裁成する所にあらず』とまでも稱揚してゐられるほどの有爲の青年であつた。曾つて高杉晋作と併評されて

余嘗て同志中の年少多才なるものを歷撰し、日下（久坂）玄瑞を以て第一流となせり、已にして高杉暢夫（晋作）を獲たり、暢夫は有識の士なり、而れども學問蚤からず、又頗る意に任せて自ら用ふるの癖あり、余嘗て玄瑞を擧げて、以て暢夫を抑ふ、暢夫心甚だ服せざりき、未だ幾もならずして、暢夫の學業暴かに長じ、議論益々卓く、同志皆爲めに衽を斂む、余事を議する毎に、多く暢夫を引きて之を斷ずるに、其言往々にして易るべからず、こゝに於てか、玄瑞も亦尤もかれを推して曰く『暢夫の識や及ぶべからず』と、暢夫反つて更に玄瑞の才を推して當世無比と爲す、二人愕然として相得たり、余或とき旁より、これを贊して曰く『玄瑞の才はこれを氣に原づけ、而して暢夫の識はこれを氣に發す、二人にして相得たれば、吾れ寧んぞ憾みあらんや。』

と謂つてゐられる。實に松陰先生の人物を看破さるゝ、その眼光が烱々として鋭く光つてゐる兩雄をして切瑳琢磨、各々その長ずる才氣によつて完成せしめんとされてゐる。その慈愛の指導精神が、よく看得さるゝではあるまいか。

しかも松門同志としてのこの二人の關係をみるに、久坂はいつも高杉を稱揚して『高杉の機略縱横の才智にはとても及ぶ所でない』と謂つて居り、高杉も亦久坂を思慕して

僕は貴兄在江戸の節と雖も、格別ついしようも不レ申、御賞擧も餘り不二申上一候得共、心中には僕はとても及ばぬ、賴むべき人と思ひ、兄弟の盟をも致度と、しよせん思居候得共、是迄遂に口外不レ仕居候、僕も一人の兄弟も無二御座一常に心細く思ひ居候くらゐに御座候、夫故此節も讀書などに倦み候節は、天下の事を案じ、或は御國の事は如何になつたかと思ひ候節、貴兄の顏が目前に看ゆる樣に御座候、何卒愚鈍の心膽御推察奉願候。（久坂宛・高杉の書翰）

と謂つて、兄弟盃までもせんと久坂に賴つてゐる。從つて久坂が元治元年七月京師の變動に際し、割腹して死んだ時にも、高杉はいたくこれを痛哭して『殘念なことをした、あの人は闃外の任を托する人物ではない、廟堂の器であつて彼を政府に据へれば實に堂々たる大政治家である』と謂つて、慟泣した後に

埋二骨皇城一宿志酬。　骨を皇城に埋む、宿志、酬ひらる
精忠苦節足二千秋一。　精忠の苦節、千秋に足る
欽君卓立同盟裏。　欽ぶ、君、卓立す、同盟の裏
不レ負青年第一流。　負ず、青年第一流

と一詩を賦して彼を弔ふてゐる。また以て同友同志間に於ける久坂の信望地位をも知ることが出來る。

元來、久坂と高杉とはその性情が異つてゐる如く、その言動もちがつてゐた。從つて議論も往往相背馳するやうなこともあつたやうである。もと〳〵久坂は精神家で深思壯重であり、叡智才略に富んだ帷幄參謀格の人物であり、才氣の鋭い人であつた。之に反して、高杉は磊落不羈、氣を以て人に勝つといつた謀略實戰家であつた。これを端的にいふなれば、高杉は機智才略を縱横に振つた英雄型の偉人であり、久坂は遠謀深慮、沈毅重厚であつて、哲人型の英傑であつた。英雄は一時豪華であつても、とかく永遠の寂寞を免がれないものであるが、哲人は一時に寂寞であつても永久に莊嚴である。

また同門の渡邊蒿藏翁（前名天野精三郎）が兩者を評して『高杉にはどうも危なげでついて行かれなかつたが、久坂には自然に頭が下つて、命までもなげ出す氣分がした』といはれたことがある。これが當時に於ける知友同志の概評であつたやうである。また同志の天野御民（前名冷泉雅二郎）の如きも久坂の人と爲りを記して

人と爲り公明誠實、大軀にして而かも溫容、音吐鐘の如し、その事を爲さんとするや、先づ衆を合し慇懃事の本末を詳說し、胸襟を披いて徐ろにその方略を議す、人皆其赤心に感じ肝膽を碎いて可否を論じ、衆推して盟主となす。

と謂つてゐる。まさに彼れは溫容にして衆心を收む肝膽照應の人物であつて、これが玄瑞の天性であつた。

曾て同門の吉田稔丸（吉田榮太郎、名は秀實、字は無逸、池田屋の變に斃る、時年二四、贈從四位）と共に京都に同居して國事に奔走してゐたことがある。其時、稔丸の父清內が浪華に來たので、玄瑞は稔丸に父に會ひに行くやうにと勸めたのであつた。しかし稔丸は國事が多忙なれば父を顧みる閑がない。それにまた金もないといつて、容易に應ずる氣配もなかつた。玄瑞は、彼れを諭して『忠孝はもと一致、公事を口にして父母を忘るゝはこれ血氣の忠、決して眞正有志の所爲ではない。いま多事なりと雖も、京坂僅に十里、澱舟一夜で達することが出來る。金のことなれば既に余に於て用意がある。足下速に浪華に行つて父母を省せよ』といひきかしたので、松陰先生さへも『無逸は陰頑、人の駑駘を受けず』とまで言つてゐられるほどの稔丸も、さすがに號泣して久坂の誠意情愛に感激感謝しつゝ、急いで浪華に下つたといふ逸話がいまに殘つてゐる。

かやうなわけで、松陰先生も彼の秀才有爲の靑年たることを見定められて、その敎養指導にも一段と心魂を打ち込まれたのであつた。玄瑞が松陰先生の妹文子を娶つた時にも吾妹婿日下實甫、年未だ弱冠ならず、志壯氣銳、之を運ぶに才を以てし、吾嘗て推すに吾藩年少第一流を以てす。

と謂つて、妹の將來も實に多幸多福のものであらうと喜んでゐられるのであつて、早くも松下村塾の後繼者を以て目せられたほどの人物であつた。

涙でつゝまれた玄瑞の生涯

玄瑞ほど薄倖なものはなかつた。彼れほど不運な寂しい人生を送つたものは稀である。早くも嘉永六年八月、玄瑞十四歲の時に、慈愛の母と死別したのであつた。

母の富子は萩在生雲村大谷忠左衞門の子女であつたが、封建時代の家柄格式をやかましくいふこの時代の結婚としては、たとへ大谷は豪農であつても身分は低い方であり、久坂は裕福なら

さるも寺社組醫師のことであるから、家格の釣りあひ上、仲井惣左衞門恒宛の養女となつて、久坂家に入嫁したものである。

そして夫良廸は信順公（藩主清德公の第三子）の侍醫として多くは江戸詰勤務にあり、たま〳〵萩に歸つても指月の城中や渡り口別邸に、伺候泊番所勤が常であつたがために、富子は家庭の諸事萬端を女手一つに引き受けて、家政のすべてを切り盛りして行かなければならぬのであつた。從つて玄瑞が幼時の訓育は、この慈愛の母の手引き躾と共に、父代りたる兄玄機の教養によつたものである。

家を外に勤務する父なき家庭の母親が、如何に子女の心に響き映り行くものであらうか。慈愛の魂にひきよせられる子供の心は、いつも母の心に宿つてゐることであらう。その玄瑞の魂の宿りの心の泉の源たる慈母と、早くも十四の少年で死別したのであつた。玄瑞も定めし熱き涙にかきくれつゝ、そゞろに人生の悲哀を感じたことであらう。

母なき家庭の寂しき中に、思ひ出の數々をかさねつゝ、その年は暮れて、安政元年二月の末つ方であつた。兄の玄機がまたふとした病より、三十五といふ働き盛りを、あたら散り去つたのであつた。

この玄機（名は眞、又は靜、天籟と號す、贈正五位）人と爲り慷慨氣節あり、常に夷狄の專横を憤り、夙に蘭書兵學の飜譯に力めて兵制を樹て、國防强化の急務を說いてゐたのである。また靑木周弼（寺社組醫師、月橋と號す、贈從四位）等と共に逸早く藩內に種痘を實施して民生を福したのであつた。僧月性（周防遠崎妙圓寺住職、名は實相、字は知圓、號は清狂・煙溪、松陰先生と親交あり、安政五年歿四二）とは特に親交があり、月性が長劍を振つて慷慨悲壯、劍舞をやれば、玄機は音吐朗朗、扼腕高吟を試みると謂つた間柄であつた。これだけでもその人物を知ることが出來る。

慈愛の母に死別した涙も、かはくひまなき半歲の後に、またも父代りとして愛と嚴との薰陶敎養を受けた。たゞ獨りの兄を失つた玄瑞の心情は、そもどんなものであつたらうか。定めし玄瑞も悲痛哀嘆、天を仰ぎ地に伏して泣哭したことであらう。後年『讀亡兄遺稿』と題して

白駭紅粉綠四圍。　白駭（白髮の老年をさす）紅粉（べにおしろいの婦人）綠（黑髮の青年）四圍（此等の人々の押しかけて醫術の繁昌すること）

遺編半讀臥書帷。　遺編半讀、書帷に臥す

數聲啼血三更月。　數聲の啼血、三更の月
起問子規歸不レ歸。　起つて問ふ、子規、歸へるや歸へらざるやと

と往事を回顧しつゝ、千々に碎くる思ひに一詩を賦してゐる。三更の月影に杜鵑一聲、血に啼き渡るを聞いては、天王山の一角に勤皇義戰の長兵を叱咤した玄瑞も、さすがに『子規歸不歸』と、胸も張り裂けんばかりであつたことであらう。

人生の行路ほど計り知れないものはない。人の運命ほどつれないものはない。半歲の間に母と死別し、兄に先き立たれた薄倖な玄瑞は、また〳〵その三月四日、急に父の良廸に逝かれて、いまや彼れは全く轗軻孤獨の身の上となつたのである。菩提寺保福寺に野邊の送りをすました玄瑞が、春風寒き墓畔に停立して去り得なかつたといふのも、實に無理ならぬことであつたらう。涙の泉も枯れ果てゝ、只茫然と天を仰ひで、人生の味氣なさを悲嘆した十五の少年玄瑞が、髣髴として眼前にさ迷ふかの感がする。後年、彼れが松下村塾時代に『仲元拜二父母兄墓一』と題して、悲痛慟哭一詩を賦し

秋雨慘憺寺門暮。　秋雨慘憺たり、寺門の暮

墓樹煙凝香一炷。　墓樹、煙ば凝つて、香一炷
年少不幸喪二父兄一。　年少不幸、父兄を喪ひ
無レ奈人生草上露。　奈するなし、人生、草上の露
吾衣慈母嘗織縫。　吾が衣、慈母、嘗て織縫（着物を縫ふこと）
吾卷父兄半點註。　吾が卷（書物）、父兄、半ば點註
看レ花對レ月都有レ感。　花を看、月に對し、都て感あり
獨吊二形影一仰レ天顧。　獨の形影を吊ひ、天を仰ひて顧ぶ
子欲レ養兮親不レ止。　子養はんと欲し、親止まらず
寒風暴矣動二老樹一。　寒風暴なるかな、老樹を動かし
遂無二鷄豚及二存時一。　遂に鷄豚、存時に及ぶなし（親の存命中美味を給する能はず）
深愧烏雛能反哺。　深く愧づ、烏雛、能く反哺す（長じて親の恩をかへすこと）
紹述唯須レ慰二追慕一。　紹述、唯、須らく追慕を慰むべし
墜葉蕭索雨無レ聲。　墜葉蕭索、雨、聲なく

孤子和レ涙掃二墳墓一。　孤子、涙に和して、墳墓を掃ふ

と、父母兄を思ふ切々たる人間の至情が強く迫つて來る。轉々人生の悲哀が、ひし〳〵と胸奥に襲うて來る。泣かずには讀まれない人生の悲痛詩である。嗚呼、この着物は母上の縫つて下さつたものである。この書卷は慈父や兄上が點註を施し敎へて下さつたものである。あゝ難有い、あゝ懷しい、あゝ悲しいと思つた時には、さすがの玄瑞も定めし泣き崩れたことであらう。月花に對しても玄瑞の心はいつも父母兄の在りし世に走つてゐた。『子養はんと欲し親とどまらずして鷄豚の如き美味も存時に及ばずして差し上げることが出來ない』と、玄瑞は地に伏して泣ひてゐる。『烏でさへ反哺の孝養をする、それに人間でありながら孝養の一つもなし得ないとは、これほど殘念なことはない、寒風老樹を動かすとは實に情けない』と、涙にかきくれながら『雨に血涙を和して墳墓を掃ふ』と吟じてゐる。この玄瑞の亂れに亂れし思慕の切情を思へば、誰れ人も泣かされずにはゐられまい。

それであるから、玄瑞は、後年、國事に奔走、あの兵馬倥偬の間に於ても、いつも家鄕の妻文子（松陰先生の妹）に宛てゝ『月に一度六ケ敷候はゞ、三月に一度は保福寺墓參御賴みまゐらせ候』とか、或は『まい〳〵保福寺にも御參詣のよし安心いたし候、過去帳の事、生雲へ申遣しおんむかへなさるべく候』などと、親の墓參を妻に促しつゝ、あの腥風うづ卷く勤皇陣營の戰雲中よりも、兩親の冥福を祈りつゝ、在りし世の父母兄に心のあらむ限りを捧げ盡してゐるのである。

いまや、玄瑞は十五歲にして、早や既に親もなければ兄弟もない。全くの獨り身となつて、天涯孤獨の寄る邊なき人生を、只獨りで踏み出さなければならぬ不運薄倖の身柄となつたのである。そこで兄玄機の盟友であつた僧月性をたよつて、彼れに就て書讀を學び、また天下志士たるの素養をも仕込まれたのであるが、月性は更に松陰先生に親しく就學するやうにと勸め、また口羽憂庵（通稱德祐、名は貞順、字は希魏、號は杞山、寺社組醫師、安政六年歿二六、玄機の盟友）とも交を結んで、その薫陶を受くるやうにと慫慂したのであつた。

尤も、これには兄玄機の盟友中村道太郎（名は清旭、號は白水山人、松門、野山十一烈士、贈正四位）が、當時好生館で醫學修業中であつた年少秀三郎（玄瑞の幼名）の境遇を見るにみかねて、先づ土屋矢之助（名は根、字は松如、號は蕭海、松門、贈正五位）に引き合せ、これより月性等に因緣を結ば

せたものゝやうであつて

明早朝鹽屋町疊屋土谷彌之助と申候者方迄御出被レ下候様奉二願上一候、遠崎月性上人出萩に付、少々得二面晤一度趣有レ之候、必々御差繰御出可レ被レ下候、今日は御舍兄様御忌日かと相考申候云々。（安政二年三月二十六日）

と、中村は土谷の宅に秀三郎を呼びよせて、土谷に懇々依頼すると共に月性への引き合せをも頼んでゐる。實に當時に於ける同志間の懇篤な心情には只々感激させられるの外はない。しかも一度かうした心を結んだ上は、お互ひに手をとつて君國のために荊棘の道を踏破して行つたものである。

それであるから、玄瑞が後年江戸遊學の際、口羽は『玄瑞生年十九、氣力も有レ之、藩中少年の才子に御座候、何卒御心易く御附會被レ下度候』と、立見直八（佐倉藩儒者）に紹介して、藤森天山や羽倉簡堂などにも引き合せて呉れろと頼んでゐる。また月性は『天下形勢迫々變革御憂慮奉レ察候、之子弊藩醫員久坂玄瑞と申候、讀書憂國之一慷慨男子に御座候御接見可レ被レ下候』と謂つて、藤森天山に紹介までもしてゐるのである。

これより愈々玄瑞は松下村塾に入門して松陰先生の七生殉國の魂を打ち込まれ、また口羽等同志と共に朝夕切瑳勉勵、大に學德を積み、識見を博め、松陰先生の滿幅の信頼を受けて、遂に村塾の參謀長格となり、且つは村塾の後繼者とも目せらるゝに至つたのである。

しかも玄瑞ほど不幸なものはない。父なき後の親ともいふべき僧月性は、安政五年五月多難な邦家の前途を憂ひつゝ四十二歳を一期として花と散り去り他界したのであつた。兄に代つて指導を受けんとしてゐた口羽杷山は、安政六年八月あたら青春の二十六歳を以て、これまた長逝したのであつた。當時、松陰先生は『口羽病死何共悲慟に堪不レ申、清狂も死ぬ、口羽も死ぬ、兩人皆有レ一無二之士なり』とまでいつて、痛嘆されてゐられるほどの刎頸の同志であつた。

玄瑞は頼りの綱のすべてを切りはなされて、最早氣も狂はんばかりであつたことであらう。これがこの人生かと思つた時には、さすがの玄瑞自らも死を求めんとさへ考へたことではあるまいか。唯に月性・憂庵の死のみではなかつた。また〳〵現世の悲哀痛苦が玄瑞の身上に襲ひ來つたのであつた。かうした安政六年の夏も去つて、虫の音も悲しきその十月廿七日には、恩師松陰先生が江戸傳馬町獄刑場で、千歳不滅の聖血を濺がれたのであつた。あのやむにやまれぬ大和魂を

骨塚原（小塚ヶ原）の原頭に埋められたのであつた。

それであるから、玄瑞も後年、清狂遺稿に跋した時に『上人は常に自分を愛して下さつた、自分も上人を亡兄の様に思つてゐた』といつて、涙の筆を執つてゐる。また江戸客中に於ても、爐冷燈青、耿々不寐ざるまゝに一詩を賦して、月性を弔ふてゐる。

東藩欠寅恭。　東藩（幕府をさす）寅恭（つゝしみ恭ふこと）を欠く
孰知天子尊。　孰れか、天子の尊を知る
公常憤且慨。　公（月性）常に憤り且慨き
筆誅順逆存。　筆誅、順逆、存す
侃々不毫假。　侃々（剛直なこと）毫假（少しも假籍せぬこと）せず
何忘喪其元。　何んぞ、その元を喪ふことを忘れんや
匡救非容易。　匡救、容易に非ず
大義戒後昆。　大義、後昆（後世の人）を戒しむ
公豈桑林客。　公、豈に、桑林（桑門といふに同じく僧侶のこと）の客ならむや
丹心戀帝闕。　丹心、帝闕（皇居卽ち朝廷のこと）を戀ふ
予讀黃菊詠。　予、黃菊の詠（詩）を讀む
字々血淚痕。　字々、血淚の痕

註　（一）孟子滕文公章句下に『曾士不忘喪其元』とあり。
（二）月性曾詠菊曰『遙對南山泣短籬。菊花感慨少人知。千秋郁々天家號。卽是淵明以上枝』

また口羽憂庵に對しては、その杷山遺稿を編した時に

憶昨疎燈細雨時。　憶ふ、昨、疎燈細雨の時
相歡相痛兩心知。　相歡び、相痛み、兩心は知る
秋風此夕腸堪斷。　秋風、此の夕、腸、斷ずるに堪えんや
吹上殘篇讀後詩。　吹き上ぐ、殘篇、後詩を讀む

と感慨胸に迫つて泣く〳〵筆を進めてをり、また『哭杷山君』と題して

遠駕蛟龍上九旻。　遠く蛟龍に駕して、九旻に上る

墳前灑レ涙薦二秋蘋一。　墳前、涙を灑ぎ、秋蘋（秋の野のもの）を薦む
夕陽哀咽寒蟬暮。　夕陽哀咽、寒蟬の暮
細雨飄零黄葉晨。　細雨飄零、黄葉の晨
嘗擲二微軀一甘二後樂一。　嘗て微軀を擲つて、後樂に甘んじ
要與二明主一布二維新一。　明主と與に維新を布かんとす
我心欝結解難得。　我心、欝結（こつ〳〵と結びとけざること）解け得難く
猶見英靈髣髴臻。　猶見る、英靈、髣髴として臻るを

と血涙に咽んでゐる。かうした悲痛哀愁の念が終生離れ得なかつたのである。それのみならず松陰先生に對しては

僕年十五、闔族盡く死し、天涯孤獨の身となつたので、父兄に代るべき碩人鴻士を求めて、師事せんと欲し、亡兄の盟友たる月性上人に付て、始めて書を讀み、また略天下の形勢を知るに至つた。上人は常に先生（松陰）及び口羽憂庵のことを說いて、交誼を求めよと勸めて下さつたのである。然るに月性はいま他界し、先生は禁錮の身となつてゐられる。只口羽君とは朝夕相往來して、時事を論じ心腸を吐露し、互に手を取つて悲憤歔欷することもある。然るに昨年來兩親を失ひ、いまや骨肉なく實に慘憺の至りである。近來肉は落脫し骨は突出して、その顦顇せる狀を見ては、これを悲しまざるを得ざると共に、これについてもまた先生を思はざるを得ざるのである。（與三二十一回先生一書、和譯）

と謂つて潸然と泣いてゐる。これほど玄瑞が年少不幸事の自叙傳はあるまい。これを讀んでは松陰先生さへも血涙を搾つて泣いてゐられる。口羽も定めし聲を出して泣いたことであらう。

先き立つ涙に思ひ返せば、兄の言葉に殘された月性は死ぬ、心に契つた憂庵は死ぬ、そしていまはた魂の恩師、妻の兄たる松陰先生は刑死される、嗚呼久坂ほど薄倖なものはない、彼れほど不運なものはない。彼れほど人生行路で泣されたものはあるまい。松陰先生の刑死が松下村塾同志に傳へられた時に、玄瑞は天を仰いで、『いくら泣いても仕方がない、いくら悲しんでも仕方がない、泣くよりも悲しむよりも、これから先師の遺訓を讀んで發奮しよう、また自ら慰めよう』と謂つてゐる。この言葉こそ、仕方がないその中に、泣いて泣いて悲しみあぐんだ英雄慟哭の血涙と、はてしない切々思慕の熱情とが籠つてゐる。

さて松陰先生刑死後における玄瑞は果してどうであつたらうか。

村塾同志の中心となつて、先師の遺志精神を繼承し、同志を村塾に會して、先師の遺書を論述し、或は孟子輪講などをやつて、同志の血盟結束に力めてゐたのであつた。しかし、時世は彼れをして、空しく悠閑と村塾同志の指導のみを許しては置かなかつたのである。時代の風雲は星馳の如く變轉極まりなく、しかも國家内外の狀勢は刻々と急迫するのみであつた。

遂に文久元年に入つてからは、蹶然意を決して尊攘の魁たらんと、國事活動への第一線に乘り出し、薩州の樺山三圓や水戸の岩間金平等の水薩有志と共に、長薩水の三藩聯盟を策して、幕末回天の偉業完遂に進まんとしたのであるが、あたら大志を抱きながら維新變革の結果を見定め得ずして、空しく京洛の地に悲哀の最期を遂げたのである。或は攘夷の急先鋒たらんとして同志糾合の上、光明寺黨を組織して馬關攘夷戰に參劃せんとしたのが後の奇兵隊であつて、玄瑞はいつもかうした緣の下の力持ちに一生を終つて行つたのである。

またかの和宮御降嫁に對しては、かねてより玄瑞はいたく悲憤慨嘆してゐたのであつた。これを阻止せんがために藩の重臣周布政之助を通じて藩世子君に建白したこともある。或は東海道途中でみづから要駕脱走せんとさへ考へてゐたやうでもあつた。しかしこれもまた失敗に終つて、遂に江戸へと御降嫁になつたのである。顧へば彼れが大義盡忠の捨身の活動も、事多くは素志と違ひ、すべてが失敗に終つたのである。失敗に歸せざるまでもその結果を見遂げ得ずして、憐れにも悲痛慨嘆、同情に堪へない。元治元年七月十九日、禁門之變に於ける鷹司邸での戰傷自刄の最期で、その短い生涯は終幕を告げたのである。

玄瑞の最期

文久三年八月十四日、外夷御親征のため大和行幸の鳳勅が發せられたが、京都守護職松平容保は攘夷親征を以て幕府征伐の先驅となし、同十七日夜半に至つて、突然廟議一變し、三條公等の參内を停め、長藩兵は堺町御門等宮城九門の守衛を解かれたのである。かくして三條公等七卿は長州への下向となり、大和行幸は延期となつたのである。

十八日夜、玄瑞等は七卿を伴うて大佛に退き、途すがら妙法院の塀にもたれて、矢立の筆を取り出し

世は刈蔦と亂れつゝ、紅さす日もいとくらく、蟬の小河に霧たちて、隔の雲となりにけり、うらいたましや、靈きはる、大裡に朝夕殿居せし、實美朝臣季とも卿、壬生・澤・四條・東久世・その外錦小路どの、いまうき草のさだめなき、たひにしあれば駒さへも、すゝみかねては嘶つゝ、ふりしく雨の絶間なく、なみだにそでのぬれはてゝ、これよりうみやまあさぢがはら、つゆしもをいてあしがちる、難波のうらにたくしほの、からきうき世はものかはと、ゆかむとすれば東山、みねの秋風身にしみて、朝な夕なにきゝなれし、妙法院の鐘の音も、なんと今宵はあはれなる、いつしかくらき雲霧を、はらひつくしてもゝしきの、みやこの月をしめて給ふらむ。

と、七卿落今様舞曲一首を賦し、血涙に咽びつゝ必死再擧、以て寃枉を雪がんと堅く心に誓つたのであつた。

爾來、藩公父子の寃罪を雪がんと、百方奔走死力を盡したのであるが、更にその甲斐もないのみならず、却つて君側の姦に阻まれて、長藩主忠誠の赤心は雲上に通ずる由もない。そこで、元治元年七月に至つて、遂に益田右衞門介・福原越後・國司信濃の三家老は、三條公等七卿竝に藩主父子の寃を訴へ宥免を請はんがために、兵を率ゐて京師に迫り、十八日男山石清水八幡神社の本營に於て長藩諸部隊長の大評議を開いて、決死進軍の可否を衆議に求むることになつたのである。

灼熱の夏の日も老松に覆はれた社殿にはあまり通らない。向ひの樹林中には蟬が鳴いてゐる。益田・國司・福原の三家老を始め、久坂・入江・來島・眞木等の諸將は連坐して進軍か退陣かと大評議を始めたのであつた。

三家老は互に憂愁の色を深めつゝ、昨日來朝廷への哀訴嘆願も更にその甲斐なく、吾等の忠誠は天座咫尺に通ずる由もない。それに會津兵はいまや逆襲の用意さへも整へてゐる。最早かくなる上は決死開戰、君側の姦を除いて尊攘の大義を樹てるの外はないと、悲憤のいろが互ひの面上に漂うて來た。

來島又兵衞は、怒髮冠を衝くの憤情を示しつゝ、松平は幕威を假つて朝廷を壓迫してゐる、われ等の忠誠が通じないとするならば、もはや武力解決で君側を清めるの外はない、いまとなつて兎角の議論を聞かされては、この又兵衞の腹の蟲がおさまらないと、さすが鬼大將と云はれた來島だけの氣概を示してゐる。

いままで默然と靜かに諸士の議論に聞き入つてゐた玄瑞は、滿面に憂色を帶びつゝ、徐ろに口

を切り出したのであつた。

戰爭はいつでも出來る。然し武力解決は萬策盡きての最後でなければならない。われ等は赤誠を披瀝して出來得る限り朝廷への哀訴を試みなければならぬ。また諸藩の同情をも集め、諸方との接衝にも力めなければならぬ。昨年來の經緯についての憤怒は來島翁と少しも變りはない。しかし、怒に任せて兵を進むるは智謀の士の採るべきところではない。

それに味方の戰備が果して十分であらうか、それをも篤と考へなければなるまい。殊に愈々兵を進むとすれば禁門に向つての發砲も萬止むないことであらう。禁闕への發砲……玆に大義名分の重大さをも考へなければならぬ……

それにいま世子君は大軍を率ゐて、後援のために近く浪華に御着きであると聞き及んでゐる。此際一時忍んで浪華に退き、十二分の戰備を整へ、威武堂々再び京洛の地に臨むなれば、會津の兵も恐らく兵火を交ゆることなくして退き解決をみることであらう。

と、堂々一座を壓したのであつた。側で久坂の言に聞き入つてゐた入江九一も、さすがに村塾時代よりの盟友だけあつて

さすがに遠謀智略の久坂ぢや。

進むのみが智將でもなければ、また忠誠といふものでもない。

兵火十字の砲烟裡に屍を曝らすはもとより覺悟である。しかしいまの狀勢では實に心もとないのである。

と、久坂の主張に贊成する。

來島は憤怒の情抑へ難く

醫者の息子の久坂などに戰爭のことがわかるものではない、東寺の五重の塔上より俺が指揮する。この又兵衞の鐵扇をみるがよい。

と、眞向より進軍を迫つて來る。

そこで玄瑞は、眞木和泉に向つて

眞木殿はよしや他藩のお方であつても實に長藩の寶であり、殊に吾等同志の最年長者である。御意見如何。

と、問ひかくれば眞木は、暗愁に顏をくもらせつゝ

長藩と運命を共にし、諸士と生死を同じうするのが、余の素懷であり、また欣幸とするところである。諸士と共に決死一戰の覺悟で御座る。

と、悲憤の中にも壯重に答へたのであつた。

久坂は直に面を正し形を改めて、最早かくなる上は決死一戰、卽時進軍、會津兵を粉碎して鐵火十字の眞中に大義を樹つるの外はない。

と、嚴然として衆座を顧みれば、入江も

議論は議論ぢや、決死は國を出る時よりの覺悟である。

と、直に眞木も久坂も入江も寺島も山崎寶寺の陣營に歸つて、京洛への進軍用意を整へたのであつた。

十九日夜半、福原は伏見街道より兵を進め、稻荷街道で大垣兵と戰ひ、嵯峨の屯營ではその兵力を兩分し、一は國司信濃之を率ゐ、桂小五郎が參謀となり、中立賣門に向ひ筑前兵を風靡して將に突入せんとせる時、會津・薩摩の合擊に遇つて遂に敗戰となつた。一つは來島又兵衞、之を率ひて蛤御門に向ひ、尖兵既に禁門內に入るものもあつたが、隊將來島又兵衞が戰死したので、

これ亦敗戰の止むなきに至つたのである。

山崎の義軍は、久坂玄瑞・眞木和泉、これを統率して總勢五百餘人、桂川を渡り松原通を烏丸に出で、四條通を柳馬場北に押上り、鷹司邸の裏門より繰り込み、鷹司老公世子に嘆訴せんとしたのであるが、果し得なかつたのである。しかるに早くも會津兵は邸內を圍み、鐵火相見えて奮戰突擊、折しも砲彈鷹司邸の屋上を貫き猛火となつて來た。火焰は天に冲し銃丸は烈しく飛來する。玄瑞は不幸敵彈に脛を打ちぬかれたのであつた。遂に遁れ難きを知り、入江に後事を託して退却せしめ、玄瑞は奧の間より三方を取り出し、胴卷よりかねて用意の軍用金を出して之に載せ

「長藩同志多人數、邸內を騷亂せしめたるの罪を謝し、些少ながら御家中人で分與されたし」との一札を書き殘し、折しも階上より下り來れる寺島忠三郎を顧みつゝ、共に座につき微笑を交はし、差しちがつて自刄最期を遂げたのであつた。時に久坂は二十五歲、寺島はまさに二十三歲であつた。

顧へば玄瑞は最初から無謀の進軍であると考へてゐた。所詮勝ち目のない戰であると感念を定めてゐた。しかし同志衆議一決とあれば成敗を天運に任せて、喜んで君に殉んじ同志に殉ぜんと

決心したのであつた。

彼れは徒に死を急いだわけではない、血盟同志への義理を重んじたためであつた。彼れは空しく犬死をしたものではない、長州武士の氣概を滿天下に誇示したのである。そして幕府方を畏服せしめ、更に長藩同志の奮起を促したのであつた。そして倒幕勤皇の先途として、天下の同志に殉國聖血を示し、勤皇旗擧げに一大衝動を與へたのであつた。

さはさりながら、彼れの心情を思へば、あの遠謀の策略も空しく容れられずして、目前に敗戰の非命を感念しながらも、同志に殉じ君國に殉じて行つたその魏然崇高たる聖血は、恰も楠氏が智謀容れられずして、君命とあればたゞ賢しこまんと言つて、一族郎黨悉く湊川に護國の鬼神と化した、それと何等の變りのあるものではない。かうした彼れの心情を汲めば、悲痛哀哭、湧然として同情の念禁じ得ざるものがある。しかも飽迄、彼れの一生は哀痛綿々、悲風慘雨の中にあたら人生の華たる二十五歳を一期として、京洛の櫻と共に散り去り行つたところであつて、人生これより上の悲痛哀愁の極みはあるまい。

鎮西旅行の壯途に上る

これよりさき、兩親と死別し、一人の兄に先き立たれた玄瑞は、何に一つとして心を慰むるものはなかつた。月に花に、見るにつけ聞くにつけ、思のたねとならぬものはなかつた。しかし蛟龍は久しく池中に伏してはをらない。父や兄の盟友を賴よつて讀書に修學に勤苦專念、大いに智見を研磨錬成して、立志勇躍の念勃々たるものがあつた。

十六の年もかうした悲哀裡の學習に暮れて、安政三年の三月、彼れ十七歳の春、蹶然意を決して九州旅行への壯途に上つたのであつた。

男子蓬桑志。　男子、蓬桑（大志遠遊のこと）の志

飄然出二瀾城一。　飄然、覇城（巴城のこと）を出づ

雲烟三月好。　雲烟、三月好し

書劍九州行。　書劍、九州の行

月落林花暗。　月落ち、林花は暗く

鞭風帶二馬聲一。　鞭風、馬聲を帶ぶ
江戸吟眼裡。　江戸、吟眼の裡
隨處託二予評一。　隨處、予の評に託す

と、この一詩を殘して三月の初めに巴城を出發したのであつた。三月と云へば既に山河は春めき渡り『雲烟三月好』であり、『月落林花暗』であつたことであらう。この故山の春色を後にして男子蓬桑の大志を抱き『隨處託予評』の大抱負を以て、旅裝に上つた玄瑞の壯快なる意氣や思ふべきである。尙今回の鎭西旅行については、明倫館時代の盟友半井春軒とも同行の約があつたやうである。しかし半井は止むなき事情のためにこれを中止したものと見へて

別二半井氏一　有レ故不レ逮

林塘風暖杏桃辰。　林塘、風は暖かし、杏桃の辰
到處山川各得レ眞。　到る處、山川各々眞を得
休レ憾西遊終不レ果。　憾むを休よ、西遊終に果さゞるを

歸來爲說九州春。　歸來、爲に說かん、九州の春

と、半井にも一詩を殘してゐる。歸來必ず君のために鎭西の春を說くべしといつてゐる玄瑞は、いかにも情義の濃かな人情家であつたことが思ひやられる。

萩を出て山路を秋吉臺にとり『春色也佳秋吉臺』と沿道の春色に迎へられつゝ

留レ袖春風獨上レ程。　袖に留む、春風、獨り程（旅程）に上る
青山綠水已清明。　青山綠水、已に清明
千里行途無二人伴一。　千里の行途、人の伴ふなく
唯有二櫻花慰二客情一。　唯、櫻花の客情を慰むる有り

と、綠に煙る青山綠水、白雲棚曳く山櫻など口占しつゝ、清末に出でて、馬關に着いたのであつた。

十七歳の青年玄瑞の初めての旅程である。しかも彼れが心に留めた哀痛の傷みは仲々慰むるに由もなかつたとはいへ、沿道の山河風光は定めし彼れが心を慰めたことであらう。馬關大都の風情は定めし珍らしく映じたことであらう。それにもまして雲山十里の巴城の空に思ひは歸つたこ

とでもあつたらう。

舟發二赤馬關一。

鷗影漁歌春幾灣。　鷗影漁歌、春、幾灣
水波暖處海雲閑。　水波暖き處、海雲は閑なり
輕帆一片東風便。　輕帆一片、東風の便
回レ首防長鄕國山。　首を回せば、防長鄕國の山

と一詩を賦してゐる。何はともあれ『回首防長鄕國山』といつてゐる玄瑞の、この鄕愁の一念が、まさに當時の心境であつたらう。

九州に入つた玄瑞は、先づ中津に走つて恒遠醒窓を訪ねてゐる。この醒窓は玄瑞が父なき後の父とも兄ともたよつてゐた僧月性の師匠である。從つて月性が引き合せたものではあらうが、かうした處にも孤獨となつた玄瑞の心情が思ひやられる。悲慘な人生を辿り行つた玄瑞の心境がまたも强く思ひやられる。

玄瑞は巴城出發以來の旅寢の物語もしたことであらう。馬關あたりの風物なども語り合つたことであらう。家庭の幾哀痛悲慘事をも報じたことであらう。それにもまして男子蓬桑の大志を告げて、醒窓の敎へを求めたことであらう。彼れは旅程途上の作詩を示して、その斧正を願つてゐる。

訪二恒遠醒窓一。

封侯不レ羨羨二韓家一。　封侯を羨まず、韓家（韓退之の文名）を羨む
流水江山不レ厭レ賒。　流水江山、賒なるを厭はず
吾器斗筲深有レ愧。　吾器、斗筲（器量の狹少なること）深く愧づ有り
君詩蛟鳳少二人遮一。　君の詩、蛟鳳（蛟龍鳳凰の如き立派なものであつて、他人の評を許さない）人の遮るなし
布帆雲壘周洋浪。　布帆雲壘す、周洋（周防灘）の浪
苔砌雪翻轟谷花。　苔砌（苔むすいしだゝみ）雪に翻る、轟谷の花

樓上新晴春更好。　樓上の新晴、春更に好く
一聯未レ就手徒叉。　一聯未た就らず、手徒に叉く

と一詩を賦してゐる。萬戸侯に封ぜらるゝよりも、憂國詩文人たる韓退之が自分の希望である。巴城を辭去して、流水江山はる〳〵此所に來り、かねて私淑してゐた醒窓に、面語の機を得たことは此の上ない幸だ、しかしさて自分は才器斗筲で、深く愧ぢ入るのであるが、君の詩文は蛟龍鳳凰の如き立派なものであつて、到底他人の云爲を許さないところであると謂つて、親しく醒窓の教へを求めてゐるのである。

玄瑞はこれより、當時文名の高かつた大分稗田の村上佛山を訪ふてゐる。そして『更仰崔巍拔然出。佛山雲散雲後蒼』と稱揚してゐる。序に耶馬溪の見物などして、道を轉じ久留米に出で、和田逸平を訪ね、柳川を經て熊本に到り、遂に宮部鼎藏とも親しく面晤することが出來たのであつた。

宮部、松陰先生への就學を勸む

玄瑞は宮部鼎藏と親しく面晤することが出來た。

この宮部は、增實と云ひ、田城又は尖庵とも號してゐた。肥後益城郡田城村の人であつて、世世醫を家業としてゐたのであるが、鼎藏は之を好まず、伯父增美に就いて山鹿流の兵學を修め、遂にその養子となつたのである。嘉永頃よりは横井小楠と共に青年志士の領袖となり、嘉永三年十二月松陰先生九州歷遊の際、會見して以來といふのは刎頸の交を結ぶに至つたものであつて、當時松陰先生は廿一歲、宮部は卅一歲であつた。

松陰先生が嘉永四年江戸遊學の時、宮部も共に山鹿素水の塾に入門し、松陰先生は『宮部鼎藏は毅然たる武士、僕常に以て及ばずと爲す、每々往來し、資益あるを覺ゆ』といつてゐられるほどの人物である。松陰先生は彼れと房相漫遊や東北亡命遊など共にせられ、また嘉永六年長崎露艦搭乘事件の時にも、途中往復、熊本に立ちよつて宮部等同志十數名とも會見國事を談じてゐられるのである。續いて、先生は宮部と野口直之允とを伴ふて一時萩にかへられ、十一月には相携へて京都に上り、相前後して江戸に入つてゐられる。翌年正月米使ペルリの再び來航するや、松陰先生は、宮部と共にこれを斬らんと考へられたこともあるが、その益なくして害の生ぜんこと

を慮つて、これを中止されたことさへもある。松陰先生が下田米艦搭乘事件の際にも、彼れは實に懇篤至らざるなき友情を示してゐるのである。

當時宮部は藩老米田是容（長岡監物）に時務策を獻じ大に感賞を得たのであるが、藩吏に阻まれて實現するに至らなかつたのである。その後一時歸國して靜に時世の推移を觀望してゐたのであるが、文久二年の暮から、また〳〵土屋蕭海や出羽の清川八郎、薩摩の有馬新七等と議して、京都に上り大に國事に奔走し、遂に元治元年長藩主雪冤運動を起さんとして、吉田稔丸等と池田屋に密議中、新撰組に襲はれて自刄したのが、六月五日の夜であつて、時に年四十五であつた。

かうした長藩や殊に松陰先生と深い因緣關係を持つてゐた宮部鼎藏は、安政二年六月、弟大助（春藏、名は增正、禁門之變長藩に參加し、眞木和泉と共に天王山に自刄す、時年二六、贈正五位）と門人の丸山運介等が水前寺で、永原・山田等と亂鬪し、刑に處せられたその事件に連坐して、遂に山鹿流兵學師範を召上げられたので、坪井の屋敷を引き拂つて鄕里七瀧村に引き込み、鬱々たる日々を送りつゝ、專心讀書研鑽にいそしんでゐたのである。玄瑞が彼を訪問したのは恰度其時であつた。

玄瑞は初對面の挨拶を終へて、徐ろに時事を論じ、日々急迫する國難を悲憤して、鼎藏の再起を求めたものゝやうである。鼎藏も時世日に非なるが上に、いまの幽囚に等しき身境に思ひ合せて悲痛慨嘆、二人の議論は相當白熱化したやうであつた。玄瑞は一詩を賦して

熊基訪二宮部鼎藏一、賦贈

來訪熊城奇士廬。　來訪す、熊城、奇士の廬
海防大議竟何如。　海防大議す、竟に何如
語盡辭迫無二復餘一。　語盡き、辭迫り、復た餘す無し
草莽更存林則徐。　草莽更に存す、林則徐
旌旆徒連吾弛備。　旌旆徒に連り、吾備（武備）を弛めば
瀾濤忽起彼伺虛。　瀾濤忽ち起り、彼れ虛を伺はん
藤公之廟應非遠。　藤公の廟（加藤淸正）應に遠にあらず
請見當年威武舒。　請ふ見よ、當年、威武の舒なるを（朝鮮征伐をさす）

熊城偶叩偉人家。　熊城（熊本）偶（たまくたに）叩く、偉人の家。
國勢不レ伸堪二嘆嗟一。　國勢伸びず、嘆嗟に堪えん
廟算模稜蘇味道。　廟算模稜（もりやう）（國策方針の明ならざること、模糊といふに同じ）蘇味道（そみだう）（二）（の如く）
布衣慷慨賈長沙。　布衣（無位の人、草莽の臣といふに同じ）慷慨、賈長沙（三）（の如し）
無二如蠻虜來縱レ毒。　如（も）（若）し、蠻虜の來つて毒を縱（ほしいまま）にするなくんば
乃使二英雄心若レ麻。　乃ち英雄の心をして麻の若（如）くならしめん
說起藤公當日事。　說き起す、藤公（加藤清正、朝鮮征伐のこと）當日のこと
長矛排レ浪伐二蛟蛇一。　長矛（矛は槍で、大軍を率ひての意）浪を排し、蛟蛇を伐つ

註　（一）林則徐　清の政治家、字は元撫、一字は少穆、竣村老人と號す。累進して廣東總督となりし時、英夷の害を除かんため英人の阿片を燒棄し、遂に阿片戰爭（へんぱんきう）を惹起し、南京條約を締結するに至る。道光二十七年歿、年六十有六、文忠と謚す。

（二）蘇味道　唐の政治家、蘇李と云ひまた模稜子と號す、九歳にして既に文名顯（あら）はる。武后の朝、鳳閣舍人檢校侍郎となる。後張易元の事に坐し眉州に貶（へん）せらる。文集も亦多し。

（三）賈長沙　漢代洛陽の人、世に賈生と稱す。年二十にして博士となる。議にあひ長沙王の大傅に貶せらる。治安策・過秦論の二文最も世に知らる。

と實に冲天の意氣を示してゐる。悲憤慷慨の切情が躍つてゐる。十七歳青年玄瑞は、いまや全く堂々たる立派な國士であつた。

かうした國事論議の中に、談、偶々松陰先生のことに及んで來た。宮部としては長藩青年國士久坂玄瑞を目前に控へては、刎頸の盟友松陰先生を思ひ出さない筈はない。それに松陰先生と聞かされては、また玄瑞の心を引きよせないことはない。宮部は言を極めて、松陰先生の人物や學問を賞揚し、殊に至誠憂國のあの烈々熱火の如き殉國精神に接し、是非その敎を請ふやうにと、赤心をこめて玄瑞を勸誘したのであつた。

玄瑞も萩にゐる頃より、既に先輩同友より松陰先生の名を聞き、その人と爲りも略（ほぼ）承知してゐて、心ひそかに思慕してゐたのであるが、未だ親しく面晤するの機會がなかつたのである。しかるにいま宮部の言を聞いて欽慕堪へざるものがあると共に、同鄕同志でありながら、いままで松

陰先生との接觸のなかつたことを恥ぢもし、また殘念にも思つたやうである。玆に於て玄瑞は斷然松陰先生への入門を決意したのであつた。

偉人は偉人を知り、忠臣は忠臣を知る。松陰先生への入門就學を決心した玄瑞は、一路歸國への心が矢の如く焦り出して來た。三月二十一日、松橋から天草に渡らんとしてゐたのも風雨のためとあつて之を中止し、直に長崎へと走つたのである。當時、長崎と云へば西歐文物叢淵の地であつて、苟くも志あるものは何れも思ひこがれてゐた場所柄である。玄瑞も定めし燦然たる風物に眩惑魅了されたことでもあらう。

路到二長崎一意氣豪。　路は長崎に到り、意氣豪なり
青山斷處是鯨濤。　青山斷ずる處、是れ鯨濤
慨然放レ眼枕二孤劍一。　慨然、眼を放つて、孤劍に枕すれば
橫レ海蠻船百尺高。　海に橫ふ、蠻船、百尺高し
滿港烟波百尺檣。　滿港の烟波、百尺の檣
燦然如レ畫映二斜陽一。　燦然畫の如く、斜陽に映す

箋毫錦繡舶來日。　箋毫、錦繡、舶來の日
市上吹薰蘭麝香。　市上吹き薰る、蘭麝香

と、當時の感慨を述べてゐる。しかし玄瑞には最早長崎に淹留するの氣持ちはない。匆々大村を經て、箱崎八幡に詣で『鎌倉太郎眞英傑。斷然斬レ使三尺鉞……嚴然照々廟顏字。敵國降伏千古揭』と、蒙古來襲の古事を忍びつゝ長篇一詩を殘して、小倉より馬關に渡り、四月の初めつかた巴城の故山に歸つて來たのである。

玄瑞、松陰先生の門に入る

玄瑞は四月の上旬に萩に歸つて來た。

かねて中村道太郎や土屋蕭海等の慫慂もあり、いまはまた宮部の添書もある。何時でも松陰先生に面唔が出來るわけである。しかし松陰先生は當時なほ杉家幽囚室に居られて、外間との應接は勿論他人との文書の往復さへも愼んでゐられた。玄瑞は一日も早く先生に面談し衷情を披瀝して親しく敎を請はんと思つてはゐるものゝ、囚居謹愼中の先生を眞正面より訪問するのは、あまり

に非禮で無作法と遠慮勝ちのやうであつた。しかし玄瑞が思慕の情は最早一刻もためらうことは出來ないので、五月に入るや遂に斷然意を決して、左の一文を草し先生に呈して、愈々松陰先生入門への一歩を強く踏み出したのであつた。

義卿吉田君案下に呈し奉る　（原漢文）

久坂誠玄瑞再拜、謹で二十一回猛士義卿吉田君座前に白す。今玆、春、鎭西に遊び肥後に入り宮部生を訪ふ。談、吾兄のことに及ぶ。生吾兄を賞讃し娓々（ほめること）已まず、誠、欽慕一日に非らず、且つ其言を聞き欽慕益々堪ゆべからず、乃ち短簡を修して鄙衷を陳述せんとする所である。誠、吾兄を識らず、吾兄固より誠を識らず、半面の識なきに短簡を送る。自ら其鶻突（鷹の如く突進すること）を免かれざるを知る。

其面を識らずと雖も、兄の慷慨氣節、天下豪傑の士たるを識る。然らば則ち識らずと謂ふべからずである。吾兄獨り誠を識らず、誠、鈍駑闒昧、言ふに足らざる者、而し皇國の土に居り、皇國の粟を食む、吾は則ち皇國の民なりである。

夫れ方今、皇國の狀勢は如何、綱紀日に弛み、士風日に頽る、而して洋夷日に跳梁し、屢互市を乞ふ、其意必ず我釁（すき）を伺ひ其欲望を伸さんとするのである。然るに廟議は暫らく互市を許し、其間に兵備を嚴にすべしとなしてゐる。若し互市を許するなれば天下の人心は其無事に狎れ、益々般樂（たのしむこと）怠傲となり、遂に兵備を嚴にすることが出來ないといふことを知らない。

昔、弘安之役、元使が屢々來た、我は其書辭不禮の故を以て、遂に其使者を斬つた。そこで元の將兵十萬が來寇したが、吾は精兵を以て之に當り、彼れは一敗生還者僅に三人であつた。これより元は我が邊疆を窺はなかつたのである。嗚呼我國は男子國の稱がある。いまの時勢に對しては、弘安之役の如くならしめなければなるまい。彼れ互市を請へば、國法禁止であると答へればそれでよい。彼れが強いて之を求むるなれば、其使者を斬れば宜しい。さすれば天下の人人は必ず來寇すべきにつき般樂してはならない。怠傲してはならないと云ふであらう。さすれば綱紀は必ず伸張し、士風は必ず振興することになる。云々

と、燃ゆる欽慕の至情を訴へ、また、大いに洋夷の跳梁を憤つて天下國家を論じてゐる。

當時に於ける玄瑞の學問識見といふものは果してどうであつたらうか。十七歳の青年玄瑞とはいへ、家庭にあつては夙に憂國慨世の兄玄機より義烈氣魄の感化を受け、その漸く長ずるに及んでは、明倫館や吉松塾で學修を授かり、父兄の歿後は中村、土屋・口羽、月性等尊攘烈士の思想的指導薫陶をうけて、はや既に立派な一人前の國士であつた。それに九州旅行で、諸處の儒者や志士等とも會遇して、學問に詩文に時事の意見交換に、かねての學修識見は愈々光を放つて、彼れ自身としても相當の信念が出來たと自覺してゐたやうであつた。されば、今回の松陰先生入門に當つても、讀書學問のことはさておき、直に皇國の狀勢を說き、外夷跳梁の横暴を論じて、皇國民の精神や如何、外夷懲伐の謀策や如何と、烈々熱火の如き悲憤慷慨、時難を論破してゐる。そして、皇國の地に生まれ、皇國の粟を食む皇國民としては、いまの皇國狀勢は實に視るに忍びざるところである。綱紀は日に弛み士風は日に頽れ、洋夷は日々跳梁して通商互市を强求してゐる。しかるに兵備は整はず人心は太平に狎れて、如何ともすることが出來ないとは、實に慨嘆の極みである。元使斬殺、蒙古來襲、生還僅に三人の古事を知るものもないかと、切々憂憤、時難を論じて滔々數百言に及んでゐる。この烈々鐵火の如き慷慨悲憤、恰も勃々欝然たる國士大家の論調氣構へで、松陰先生の心底に飛び込み攻め寄せてゐるのである。

元來、松陰先生は玄瑞のことについては、かねてより僚友中村道太郎や土屋蕭海・僧月性などより、その人物を聞き及び知つてゐられたのみならず『太華の子山縣半藏、父の說を主張す、醫學生久坂玄瑞、蘭學生氏家音能等日々往いて半藏を窘らす』とか、また、『明倫館別に蘭學所あり、醫生半井春軒・久坂玄瑞年少にして苦學する』などとも言つてゐられるか如く、日頃より天才兒少年玄瑞の存在については相當の注目を拂つてゐられたやうであつた。

しかるに松陰先生は、いま玄瑞の此の一文を手にして、悅び且つは驚かられたやうである。これが十七青年の名文卓論であらうか、聞きしにまさる有爲秀逸の青年玄瑞であると思はれたやうである。しかしその議論、その論調、如何にも大家然と構へての老成尊大振りを示してゐることは、好ましからざる傾向である。いまにおいて彼れの尊大精神に一大痛棒を加へ、眞の心魂を打ち込んで鍛へ直し、村塾尊攘の天才兒にしなければならぬと感念されたものゝやうである。茲に松陰先生の人物看破の眼光が透徹して居り、殉國教育者としての眞價があり、個性教育の神たるの所以もあり、弟子の難有さもまたこゝにある。

そこで、松陰先生は種々思案の上、六月二日の夜附で、玄瑞のこの文章の欄外に

僕、家居（杉家幽囚屏居）以來、誓つて世間と相通じないやうにしてゐる。いま貴書を得たが、答へざれば（返事をしなければ）來狀の意に負くといふものであり、答ふれば前誓を破るといふことになる。而るが故に、一應この書は返還して前誓を守ることにする。しかし氣がすまないから別に一文を錄して來意に酬ゆることにする。自分の意中を諒して非禮を許してもらいたい。

尙決してこのことを他言されては困る。

僕の恩師山田治心氣翁が、いつも令兄玄機のことを言ひ聞かしてをられた。中村道太も屢々令兄のことを云つてゐた。そこで自分も一度會見したいと思つてゐたが、遂に長逝されて會へなかつたことは殘念で只涙の落つるのみである。

而るに近頃また〳〵人のいふには、玄機の弟玄瑞と云ふものがあり、奇士であるとのことであつた。處が自分は牢獄中の人間であつて、固より會見することは出來ず、久しく絕望してゐたのであるが、いま此の書を得たのである。玄機を知らんと欲して、それは遂に出來なかつたのであつたが、玄瑞はをりながらも相見ゆることが出來ない。乃ちその文を讀んであきらめて居る。僕、狂妄、言ふに足らざるものではあるが、面識こそなけれ、兄を知ることは旣に久しいことである。

と、懇篤なる心情を述べ盡して、なほ次の一文を返酬的に贈つてゐられる。

君の文章は議論浮泛であつて思慮粗淺である。至誠中よりするの言ではない。世の慷慨を裝ひ、氣節を扮ひて、名利を要むる者と何ぞ異らんやである。僕深く此の種の文を惡み、最も此の種の人を惡む、僕請ふ粗ぼ之れを言はん、兄幸に精思せよ。

凡そ國勢を論ずる者は、上（上古）は則ち神功、下は則ち豐公（豐太閤）にして可なりである。時宗（北條）は季世に生まれ、急變を慮つて、一着偶これに中つたまでゞある。固より一時の英傑ではあるが、これを以て國勢を論ずるには足らない。使（米露の使者）を斬るのこと、これを癸丑（嘉永六年）に施すは則ち可なり。それを甲寅（安政元年）に施すは則ち晩し。（安政元年神奈川條約締結以前にやるべきであつて、締結後には無益）乙卯（安政二年）を過ぎて今日に至りては、則ち晩きの又晩きである。大抵事機の去來するは影の如く響の如しである。往昔の死例を執りて、以て今日の活變を制せんと欲す。實に難きかなである。謂ふ所の思慮の粗淺とは是

れである。

天下爲すべからざるの地なく、爲すべからざるの身なし、但だ事を論ずるには、當に己れの地位、己れの身分より見を起すべきである。乃ち着實が大事である。故に身將軍の地にをらば、當に將軍より起すべし、身大名の地に居らば、當に大名より起すべし、百姓は百姓より起し、乞食は乞食より起す、豈に地を離れ身を離れて、之を論ぜんやである。今吾兄は醫者である、故に醫者より起すべきである。寅二（松陰先生）は囚徒なり、故に囚徒より起すべし。必ずや利害心に絶ち、死生念に忘れ、國のみ、君のみ、父のみ、家と身とを忘れ、然る後、家族之に化し、朋友之に化し、鄕黨之に化し、上は君に孚とせられ、下は民に信ぜらる。こゝに於てか、將軍爲すべきなり、大名爲すべきなり、百姓乞食も爲すべきである。乃ち醫者囚徒に至るまで、爲すべからざる者あるなしである。是れを論ぜずして、傲然天下の大計を以て言と爲す、口焦げ脣爛るとも、吾れ其稗益あるを知らずである。謂ふ所の議論の浮泛とは是れである。

且つ兄が身の任とする所は、弓馬なるか、刀槍なるか、舟船なるか、銃砲なるか、抑々將たらんか、使たらんか、神功の時に遇はゞ、能く武内（宿禰）たらんか、豐公の時に遇はゞ、能く孝高（黑田如水）たらんか、清正（加藤）たらんか、家族朋友鄕黨の、兄に從つて節せんと欲する者、計、幾人ありや、兄の爲めに力を出さんと欲する者、計、幾人ありや、兄を助けて財を輸さんと欲する者、計、幾人ありや、聖賢の貴ぶ所は、議論にあらずして、事業に在り、多言を費すことなく、積誠之を蓄へよ。（原漢文）

と、人間といふものは自分の地位、自分の身分といふものをよく考へて意見をたつべきものである。そこに着實さがあつて、上には誠と認められ、下々には信を受け客れられるものである。醫生でありながら、徒らなる大言壯語は謹しむべきであると、松陰先生は頭から手ひどくこきおろしてゐられる。いはゞ初度の修簡交渉は落第で、入門拒絶狀の樣にも受けとれないことはない。しかし松陰先生は心中ひそかに、はつと思はれたことであらう。

聞きしにまさる玄瑞だ、鋭氣絶倫、議論文章共に堂々、見上げたものだ、立派なものだ、村塾の柱として育てなければならない、多難な君國の幹に育て上げねばならない、しかし彼れは餘りに氣負うてゐる、自負が過ぎてゐる、老成大家然となりすましてゐる、これではいけない、これでは將來の發展性が乏しい、初めから叩き延べて打ち替へなければならぬと感念されてゐたので

あつた。そこで、先生は殊更に強く深く彼れの心魄も碎けよとばかりに眞向頭上より振りかざして一太刀あびせかけられたのである。

しかしこれで失望落膽するやうな玄瑞ではなかつた。そのまゝ引きさがるやうな玄瑞ではなかつた。太刀風におびへて默するやうな彼れではなかつた。しかもこの青年師弟の電擊一瞬の間に於いて、既に互の魂のすれ合ふ閃きが、微に通ふてゐたのであつた。

この松陰先生の答書を手にした玄瑞は、憤激の情に驅られつゝ『再與吉田義卿一書』なるものを作つて、重ねて先生に攻め寄つてゐるのである。

國勢を論ずる上に於いて、神功や豐臣秀吉の朝鮮征伐論には承服出來るとするも、北條時宗が元使を斬つたことを以て、國勢を論ずるに足らずとなすの論には、どうして贊することが出來ない。

いまや吾國は國力衰へ、國勢振はず退勢を示してゐる。外夷は巨艦大礮を以て邊疆を窺ひ、益益進勢を取つてゐる。我れ一歩退けば彼れ一歩を進むといつた狀勢であつて、外夷は一歩日進、我が國は一歩日退である。かうなつては退守の姿勢が大切である。嚴然たる退守があれば一歩進むことが出來、一歩進めば外夷は退いて守るの外はない。我が退守を以て彼の進攻に當るべきである。

神功の三韓、豐臣の朝鮮役に於ける、波濤萬里、偉勳を海外に建てたる所以のものは、守る所ありて、しかる後に攻むるところがあつたわけである。然るに方今は國力衰へ、神功時代のやうに國の氣力といふものがない。秀吉時代のやうに國力が振はない。それに外夷は朝鮮のやうな弱いものではない。全く昔と今とは國勢が異つてゐるのである。

現に兵器裝備の如き甚だ劣等であつて、外夷の大砲數里に及ぶが如きものではない。艦船の如きも、外夷の城廓の如きものには遠く及ばないのである。海外に出兵せんとしてもそれは到底不可能なことである。然らば神功・秀吉の盛擧は昔であつたから出來たことであつて、いまはこれを施すことが出來ない。さすれば今日に於いてはたゞ北條時宗斬使の大和魂によるの外はないのである。

時宗が元使を斬つた時に、天下の人々は皆早く武備を嚴にせよ、必ず來襲すべしと謂つた。しかし、その寇來するや、これを殲滅したではないか。若し方今その如くするなれば、衰へたる

意氣は必ず振起し、阻まれたる國力は必ず伸張する。そこで、我が退勢嚴然として、餘りあるがために外夷は進攻することが出來ず、我より進取することが出來るのである。所謂守勢を以て攻勢にかゆる是れである。

更に斬使のことは、嘉永六年米使來邦の時に施すべきであつて、いまは最早時機を失つたといふ議論である。しかしさう云つて袖手傍觀坐視してゐたなれば、成敗の結果はどうなることであらうか、鄙語にも『兎を見て犬を顧ふとも未だ必ずしも晩きではない、羊を亡くして牢を補ふもまた未だ必ずしも遲しとはしない』といつてゐる。さすれば豈已に時機を失せりといふわけでもあるまい。虜使を寸斷して威武を外夷に示す、これ我に守あり、しかる後に攻むることになつて、外夷がどうして進攻することが出來やうか。

若し然らずんば、力愈々沮み、氣愈々蹙まり、遂にその言は諛舌、その服は左衽（外夷の言語となり外夷の服裝となり外夷に屈服すること）となることは押して知るべきである。一指の寒弗（しもやけの類が）は手足に及び、手足の寒弗はやがて全身に及ぶといつてゐる。寒弗は四體に及ばざる內に癒すべきであつて、天下の禍もまたかくの如く除くべきである。諛舌せず左衽せざる前に解決すべく、袖手傍觀することが出來ないのである、因循維持してはならぬのである。

しかるが故に、速に斬使を爲す、已に是れ天下の大計である。然らば時宗を以て國勢を論ずるに足らずといふことが出來やうか。

夫れ誠（玄瑞）の任ずる所は醫であつて、弓馬刀槍ではない。舟船銃砲でないことも勿論である。將でもなければ使ひでもない。醫生の身分を以て天下の大計を言ふ、甚だ僭越なることは十分に承知してゐる。しかし一朝用兵、劍槊相摩し、砲礮互發の時に當つては、圭刀を採つて戰場に臨み、天下國家のために死すべく、決して一身の死を顧むる考へはない。

答書を手にして、居常怏々として憤激に堪へず、憤情の餘り心に發する所を紙に書した、しかし他人に語るは無益なれば敢て之れはしないのである。唯義卿の人と爲り、豪傑の士たるが故に、竊に之を書き送つたのである。しかるに義卿は責むるに、慷慨を裝ひ氣節を拯するものとした、その不遜の言ひ分、どうして、屈服することが出來やうか。

醫にして天下の大計をいへば、人は必ず信じない、信ぜざれば則ち口焦脣爛、その天下に裨益なしとするも致し方はない。いま義卿の罵詈妄言、實に甚しである。誠（玄瑞）は義卿のこの

言あるを獨り怪んでゐる。若し果してこの言の如くんば、曩日宮部生の賞讃する所、誠の義卿を以て豪傑の士となす所、何れもそれは誤りであらう、紙に臨み憤激に堪へず案を擊つ。

と、玄瑞は憤怒やるかたなく、逆に松陰先生を罵倒せんとの意氣を示し、紙に臨み案を叩いて、吾れ誤認せりとまで云つて、重ねて詰めよせかけてゐる。

しかし事こゝに至るについては、松陰先生には深い思案のあつたことであつて、この間の機微については既に前にも記述しておいた通りであるが、六月三日附で玄瑞を紹介した土屋蕭海に宛て、左の通り謂つてゐられる。

坂生（玄瑞）志氣不レ凡、何卒大成致せかしと存、力を極めて致二辯駁一候間、是にて一激して大擧來冦之勢あらば、僕が本望不レ過レ之候、若面從腹誹之人ならば僕が辯駁は人を知らずして言を失ふといふべし、此意兄以爲二何如…

と、松陰先生は自己の眞情をそのまゝ打ち明けてゐられる。それだけ辯駁も不遜であり、妄言であり、手嚴しいものであつた。さすがの玄瑞にもこの師の難有い心情は解らなかつた。この深思密略を看破することは出來なかつた。玄瑞は『醫者が天下國家を論ずるのは空言徒勞だ、それよりも地位身分に應じた事をするがよい』といはれては、腹の虫がおさまらない。『何に義卿あまり馬鹿にするな』と、飛び付き喰ひ下つてゐる玄瑞の志氣に、却つて松陰先生は見所ありと喜んでゐられる。あゝ有爲の青年だと感心してゐられる。松陰先生の門生指導には、その個性々々に相應したかうしたやり方仕組が往々見受けられるのである。實に難有い、尊い、有情な師ではあるまいか。

松陰先生、大陸・南進國策を授けらる

そこで松陰先生は『玄瑞マアさう怒るな、憤るな、早速返書を出すわけであつたが、お前の熱の冷めるのを待つてゐた。この問題の議論も最早一ケ月餘りにもなつてゐる。お前も少しは思案のついたことであらう』といつて、松陰先生は徐ろに眞情を披瀝し、自己の信念肺肝を吐露して、諄々と玄瑞に時勢を論じ國策を授けられ、國家の大事を以て任ぜんとするものゝ覺悟決心をもいひきかし促してゐられる…凡そ英傑の士が天下の大業をなさんとするには、先づその志を大にしその略を雄にし（大志雄略）、時勢を察し事機を審にし、先後緩急に應じて、先づ國内體制を

整へ、然る後に外夷に對處すべきである。いま幕府が既に米露と修交和親の條約を締結した以上は、萬遺憾ながら、日本よりこれを破るわけには最早行くまい。我より破絶するなれば、道義日本の信義を諸外國に失ふことになる。さすれば條約は條約として嚴にこれを守り、一面吾國防の擴充強化を計つて、彼等に對應すると共に、その間に於て蝦夷を墾き、琉球を完全に收め、朝鮮を併合して滿洲を拉き、それより支那を壓し、南洋印度に臨み、かくして進取の勢を張つて退守の基を固め、神功の未だ遂げたまはらざりし所を遂げ、豐公の未だ果さゞりし所を果すべきである。そして綱常名分の維持を以て己が責と爲し、天下後世を以て己が任となすべきであつて、言行一致は仲々至難ではあるが、それが最も肝要大事である……と七月十八日附で左の一文を土屋蕭海を通じて玄瑞に與へてゐられるのである。

久坂玄瑞に復する書

時宗の擧は、これを丑寅（嘉永六年と安政元年）に施すべくして、これを今日に施すべからず、足下の以て施すべしと爲せるは、時勢を察せず、事機を審かにせざるが故である。今の天下は即ち古の天下なり。神功・豐國、古に能く之を爲したり（朝鮮征伐で、海外雄飛のこと）今にして爲すべきなからんや。足下の以てなすべからずと爲すは、大志を棄てゝ雄略を忘るればなり。凡そ英雄豪傑の、事を天下に立て、謀を萬世に貽すや、必ず先づ其志を大にし、その略を雄にし時勢を察し、事機を審かにして、先後緩急、先づ之を內に定め、操縮張弛、徐ろに之を外に應ず。今や德川氏、已に米露と和親したれば、我れより絶つべきに非ず、我れより之を絶たば、われ自らその信義を失ふなり。今の計たる、疆域を謹み條約を嚴にし、その間に乘じて蝦夷を墾き琉球を收め、朝鮮を取り滿洲を拉ぎ、支那を壓し印度に臨みて、以て進取の勢を張り、以て退守の基を固めて、神功の未だ遂げたまはざりし所を遂げ、豐國の未だ果さざりし所を果すに若かざるなり。誠に能くかくの如くならば、米露は唯だ我が驅使する所のまゝにして、即ち前日の無禮の罪は、之を責むるも可であり、之を宥すも可である。何ぞ必ずしも區々たる時宗に倣ひ、以て虜使を斬り、而る後に快を爲さんやである。

然りと雖も、是れ幕府の任なり。諸侯の事なり。吾が徒の能く辨ずる所に非ざるなり。吾が徒にして之を言はゞ、空論虛譚、慷慨を裝ひ、氣節を扮ふの爲のみ、聖賢の辭を修めて誠を立つ

る者とは間あり。足下は一醫生にして、而かも天下の大計を言ふ、以てその常倫に非ざるを觀るに足る。而して僕引いて之を道に進めんと欲す、故に前次反覆すること彼れの如し、足下案せずして、遽かに以てその樽俎を越ゆるを咎むと爲す、殊に僕が望みを足下に有するは、正にその能く越ゆることに在るを知らずして、足下乃ち敢て越えず、徒に坐して之を言ふのみ、是れ僕の大に惜しむ所である。足下の書、滔々千言、亦辨なり、一事として躬行に出づるものなく、一語として空言に非ざるはなし、而もその自ら謂ひて曰く『憤激の餘、之を心に發して之を紙に書す』と、是れ卽ち快々鬱々として、胸迫り心結ぼれ、已むことを得ずして來り告ぐるなり、誠に哀れむべきである。今一たび足下の爲めに、その胸を濶き、その心を廣くし、盡く其空言の病を去り、これを躬行の域に歸せしめんと欲す、足下幸に敬しみて之れを聽け。

夫れ道に汚隆あり、時に否泰（通塞といふに同じ）あり、位に尊卑あり、德に大小あり、大德は尊位に居り、小德卑位に居るときは、卽ち時泰にして道隆なり、否ずんば卽ち否ず、是れ天地の常形、古今の通勢にして、何ぞ深く怪しむに足らん。然れども人、兩間（天地間）に生れて、資性稟氣、萬物と異れば、卽ち當に綱常名分を以て己が責と爲し、天下後世を以て己が任と爲すべし。身より家に達し、國より天下に達す、身より子に傳へ、孫に傳へ、曾玄に傳へ、雲仍に傳ふ、達せざる所なく、傳はらざる所なし。達の廣狹は、行の厚薄を視し、傳の久近は、志の淺深を視す、心を天地に立て、命を生民に立て、往聖を繼いで萬世を開く、足下誠に能く力をこゝに用ひ、食息坐臥、語默動靜、造次もこゝに於てし、顚沛もこゝに於てせば、其れ亦躬行の輕んずべからず、空言の易くすべからざるを知るあらんのみ。孟子曰へるあり『人其言を易くするは、責なきのみ』と、人苟くも自ら責め自ら任せば、則ち其言豈に易くするを得んや、言、行を顧みざる者は、孔孟の得て之を裁せんと欲する所である。足下能く之を言ふ、天下其れ必ず之を裁する者あらんやである。（原漢文）

と滔々數百言、熱情懇篤、松陰先生は心魂力を盡くして玄瑞の精魂に打ち込んでゐられる。これにはさすがの玄瑞も、大分よろめき動搖を覺えたやうであつた。

かうした松陰先生對玄瑞一個の問答もさることながら、この一文に關しては、昭和現代人としても、篤と熟思考究しなければならぬ節々がある。

松陰先生は十七青年玄瑞に對し、天下の大計を以て任ぜんとする世の青年は、先づ大志雄略で

なければならぬと説いてゐられる。松陰先生は曾て士規七則においても、人間たるものは立志が第一だと毅甫（從弟、玉木彦助）の元服の贐（はなむけ）にされてゐる。志が立たなければ、人生は何事も出來るものではない。雄略がなければ國家の大任に當るの勇氣が出て來るものではない。苟くも一世の前途を憂ひ國家興隆進展を念とする青年にあつては、この大志雄略が何よりの先着問題であるとされてゐる。しかし大志雄略が立つても、時勢を察知せず、事機を審にしなければ、徒なる大言壯語となつて、やゝもすれば處士横議の弊に陷り易いものである。かうしたことを考ふる時に、果して昭和非常時日本の現代青年諸士に於いて如何なる感があるであらうか、時世は百年前の幕末維新よりも更に一段と危急が迫つてゐる。國家興亡の岐路は當時よりも一層難境に陷つてゐる。青年は國家興隆の眞生命である。日本の今日、日本の將來はまさにこの青年の大志雄略と時勢事機の審察とにある。松陰先生はこの一條を強く深く玄瑞の魂に打ち込んでゐられるが、これは敢て幕末勤皇青年志士たりし一個の久坂玄瑞の問題のみではあるまい。

更に松陰先生は國家の危急を切り拔け行くには、國内體制の統一急務を説ひて、一億一心一塊の奮起を促してゐられる。この國家一心の總動員體制を以て、先後緩急、操縮張弛、徐ろに臨機應變、外敵に對處すべしと主張されてゐられる。太平洋問題も北方政策も南進論も、みなこの氣合呼吸より出でなければなるまい。この準備、この用意、この覺悟決心、この用機妙策さへあるなれば、何にも今更とやかく立ち騒ぐ必要もあるまい。

これにもまして、松陰先生の『いま既に米露と和親條約を締結した上は、利不利、好不好は別として、日本よりこれを破るわけには行かない、破れば外國に信義を失ふことになる』との一句である。これだけは是非世界列國民に、吾が大和民族のこの嵩高なる道義外交理念を聞き取らせなければならない。何事かあれば、直に日本を目して侵略國家と謂ひ、武斷國家と呼び、恰も國際場裡に於ける不信義不道德な國家のやうに强ひて謂ひなしてゐる。然し吾等の血脈中には先祖傳統の國際信義といふ尊き聖血が流れてゐる。一旦締結した上はこれを恪守すべきなりといふ神聖なる道義感念が嚴存してゐる。吾等の國際和親、吾等の外交々渉には面從腹誹、虚々實々たる懸け引きもなければ、老獪譎詐のたわけた振舞ひはない。信義と道義、その上更に『自ら絶せず』といふ大和男子としての、男同士の義理人情がからまつてゐる。この正しくも尊き日本民族の傳統的國際信義といふものに對し、世界の列强は刮目して再認識を深め是正しなければなるまい。

また更に、松陰先生は烈々たる憂國の至情を披瀝して、我が大陸・南進國是國策ともいふべきものゝ一端を授けてゐられる。蝦夷を開墾基地として北方を睥睨し、大陸的南進的には、朝鮮・滿洲・支那を壓して南進し、印度にまでも臨まんと主張されてゐる。

かの滿洲事變以來の日本の國の歩み、進み動向はまさにこのコースを辿つてゐるではないか。日滿一心、日支一體、いまは佛印駐兵、泰國和親等堂々たる道義國策の巨歩を進めて、早や既にビルマを通じて印度を伏瞰してゐるではないか。これが百年前の幕末尊攘殉國烈士二十七歳の吉田松陰先生の國策である。十七歳青年國士久坂玄瑞が松下村塾入門時に於ける國策問答である。現時の青年否國民諸士、果して以て如何となすべきやである。

然し松陰先生が眞に玄瑞に望まれ、その精魂に打ち込まんとされたところは『常に綱常名分を以て己が責と爲し、天下後世を以て己が任と爲すべし』であつた。『心を天地に立て、命を生民に立て、往聖を繼いで萬世を開く』であつた。そして『聖賢の貴ぶ所は議論に在らず、事業に在り、積誠之を蓄へよ』の至誠殉國道の松陰精神そのものであつた。これにはさすがの玄瑞も胸に手を置いて、ジツト考へさせられたのであつた。

さて、この松陰先生の復書を得た玄瑞は、憤激の情も漸く解けて來た。憤怒がいまや敬信となり、誤解が私淑となり、打たれたことが却つて思慕の情を增して來たやうであつた。こゝに清明なる兩英傑の皎々たる心情がある。然し未だ釋然たらざるものがあつた。それは松陰先生の條約信義論と時宗虜使誅斬反對論とであつた。そこで、玄瑞は七月二十四日附で三度『與二吉田義卿一書』なるものを作つて、松陰先生の諭示を求めたのである。實に松下村塾師弟の烈々熱火の如き眞劍さが思ひやられる。

昨日、土屋氏に行き、十八日附先生の手書を拜見した。縷々八百言、反覆懇切、僕のために胸心を濶かんとされたることは實に感激するの外はないが、自分の疑惑は未だ解けないものがある。敢て議論を好むわけではないが、一言を寄せる、願くは疑惑を氷解して頂きたい。信義を失ふから條約は守り、寧ろ邊疆の防備を充實して、その間に支那印度に臨むがよい。さすれば米露は勢に制せられて自然に退却する。時宗の虜使誅斬などは考ふる要はあるまいとあるが、これが自分の疑惑とするところである。

米露と通商して損益が何れにあるのであらうか、我が損をして彼れが益することはあるまいか。

天下の人々のいふには交易關係は別に憂ふるに足らないが、然しこれがために國民人心が晏然偷安を貪るに至つては、それが危險でたまらない。現に天下の人心は安きを願つてゐる。それでは器械なども得ることが出來ず、國防充實などは思ひもよらぬことである。そして士氣が何れの日に於て伸張するであらうか、さすれば安危存亡も知るべきである。

外夷は遠く本國を離れて日本に來り、交易するのであるから、彼等の利するのは當然である。日本は損をするのみである。それに日本は土地豐富肥沃であつて、金銀米穀、山種海產多量であるから、何も外國から輸入するの必要はない。彼我交商の利害は云はずして明瞭である。

古例によつて交商を復することは無益のことであつて、彼れの使者を斬つて追ひかへすに如くはない。それに交商の際必ず邪教を廣めることであらう。王陽明は『山中の賊は破り易く、心中の賊は難し』といつてゐるが、邪教が一度潛入すれば、その人心の害は實に測り難いのである。神州の衣食も言語も皆夷狄になつてしまうのみである。それでは人心の統一などが出來るものではない。心中の賊とは卽ち是れである。虜使を斬つたなれば、天下の人々は何時彼等が來襲するかも知れないといふであらうが、玆に於て人心が歸一統合し、器機は忽ち備はり、士氣は直に伸び、天下が一洗されて人心が統一されて來る。この時始めて邊備を整へ條約を嚴守するなれば、米露の如きも日本が自主的に引き廻はすことが出來よう。そして其の間に乘じて蝦夷・琉球・鮮・滿・支・印度問題をも解決すべきである。さすれば、今日の時艱を救ふものは、時宗の古例により斬使の外はない。然るに區々時宗に倣はずとあるは、そも如何なる理由であらうか。

是が天下の大計といふものではあるまいか。天下の大計は、僕よく任ずる所にあらずして妄に之を言つた。吾兄が之を空論虛譚、慷慨を裝ふものと云はれたことは、いまとなつては敢て之を拒みはしない。伏して願くは、交商の利害と時機緩急の如何とについて大に疑惑あれば、敢て敎を請ふのである。

と、又々玄瑞は筆端鋭く、松陰先生の論旨を捕へて縱橫に論じ攻めよつてゐるのである。然し今回の論調は始めに比して少しその鋭鋒が挫けてきてゐるやうである。

そこで、松陰先生は最早お前の議論は解つた、お前の精神も能く解つた、お前の志氣には只々感ずるの外はない、大にやつてくれ、大に奮發してくれ、この松陰は決してお前を見殺しにはせ

ぬ、泛言といつたのは俺が悪つた、空虚装扮といつたのは俺の過ちである、恕してくれ、許してくれ、お前の憤激したのも當然であると言つて、松陰先生は、自己の過去の失敗經驗までも談り、すべての心中を打ち明けて、七月廿五日附で、又々、玄瑞に答書してゐられるのである。

三たび貴書を辱うした。捧讀一番、僕、從前の疑は渙然として氷釋したのである。足下、謂ふ所の虜使を斬ること、眞に誠に名ありである。是れは泛言ではない、自分の思慮の足らなかつたことである。足下を以て空虚装扮の徒となせしは僕の過ちである、願くは足下決然として自ら斷じ、今より手を下して虜使を斬るを以て任となすがよい。方今天下、器械未だ缺乏してゐるわけではない。財用未だ困窮してゐるわけではない。人材未だ乏しきわけでもない。足下誠に能く斬使の功を成さば、即ち縱横馳騁であらう。

癸丑・甲寅の交（長崎露船事件と下田米船搭乘事件）僕微力を以て膺懲を謀りたるも、才なく略なく百事瓦解したので、遂に入海航渡の擧を決したのである。已にして風浪舟を誤り、縲紲身に逮び、乃ち盡く舊見を洗ひて更に新策を籌し、心を聖賢の道に潜めて、思を活亂の源に致せること、大略前二書に陳べし所である。而るに足下敢へて以て然りとなさゞるは、是れ自らその才略の以てその事を成すに足るを恃むのであつて、僕輩の及ぶ所ではない。

因つて憶ふに、癸丑の年、僕、東に在りしも、墨使（米使ペルリ）を斬らんことを思はざりしが、その冬、西のかた肥後に至りしに、宮部切に僕の怯懦を責む。僕反つて語るに、その魯使（露使プチャーチン）を斬らざるを以てした。宮部その當に斬るべきなきを陳べ、反覆して屈服しなかつたのである。甲寅の年に及んで、僕宮部と同じく江戸に入り、一日憤然として墨使を斬らんことを謀つたのであるが、已にしてその益なくして害あるを思ひ、遂にその謀を止めたのである。凡そ僕輩の無能なることかくの如くである。足下誠によくその言に酬ひば、實に天下萬世宗社蒼生の福である。豈に特に名を竹帛に垂れ、功を金石に勒せらるゝのみならんやである。若しその言をして酬ひざらしめば、僕輩と何ぞ擇ばんやである。僕益々足下の空虚装扮を責めんとするものである。玄瑞、足下の了見、果して如何。

と、松陰先生は愈々最後の本音を吐露、誠心眞情を披瀝して玄瑞の奮起を促してゐられる。然し尚も此間に於て、玄瑞の短所缺點と見て取られた空虚装扮、大家然たる自負心に對しては、『僕益益足下の空虚装扮を責めんとす、足下尚僕に向ひて之を反詰するや否や』と、またも胸底に徹せ

よと強く深く最後の最後までも、玄瑞の魂に燃ゆる忠言の鐵矢を打ち込んでゐられるのである。久坂に對する指導方法、やり方仕組は、只にこの入門時のみのことではなかつた。いつもかうした扱ひ方のやうであつた。いはゞ獅子が子を千仞の谷に蹴落して勇猛力を鍛錬せしむると同じやうな仕打ちであつた。

嗚呼、松陰先生ほど尊い難有い師匠はあるまい。これ程弟子思ひの師匠があらうか、而かも十七青年玄瑞と廿七師匠松陰先生との眞の魂のすれ合ふ響音が、時世の如何を問はず、後人の魂に喝を入れるかの心地がする。それに、その問答が、かうした大陸・南進國策の時事緊急對策であつた。弟子の血潮を沸き立ちあがらせたのも當然のことである。この火花を散らす師弟一魂の殉國教育が松門三傑（久坂・高杉・入江を三傑と云ひ吉田稔丸を加へて四天王ともいふ）の首位であり、松下村塾の總參謀長でもあつた久坂玄瑞そのものを作り上げたのである。

有レ感　久坂玄瑞

青年何心徒飄然。　鳩車竹馬送二流年一。
秋林木脫貧二梨棗一。　春野風和放二紙鳶一。
十四不幸母就レ木。　詩至二蓼莪一不レ忍レ讀。
十五家兄隨レ父亡。　醫林繼レ職杏花場。
向レ人漫稱醫二天下一。　胸臆不レ蓄療レ人方。
維歲十八爲二何効一。　於レ君未レ忠親未レ孝。
日月如レ馳志難レ償。　百感懷舊夢一覺。
黽勉一記語二荀卿一。　積水成レ淵蛟龍生。

伊藤公と日韓合併

伊藤公の生ひ立ち

伊藤博文公、幼名は利助（先祖に利八郎と助左衛門といふものがあつた、その名前の一字づつを取つたもの）後に俊輔（助・介）春輔、又は舜輔ともいつた。一時は林宇一（本姓が林氏であつて、宇一とは宇宙一との意）と改め、幕末の國事奔走中には二木迂一（二木は林になる）吉村莊藏・越智斧太郎・伊藤彦太夫等と變更し、また慶應三年、藩令を以て長崎に使したる時には、花山春輔とも名乘つてゐた。雅號としては春畝（俊輔より來る）・芳梅・滄浪閣主人等がある。利助は、天保十二年九月二日、周防國熊毛郡束荷村に生まれたのである。父十（重）藏（當時林信吉といふ）は畔頭（庄屋の下役）を勤めてゐたが、天資豪放、それに交際振りなども派手であつたがために、自づと世帶も傾き、遂に弘化三年利助六歳の時に、妻の琴子（秋山氏）と利助とを里方の秋山氏に托し、單身

飄然として萩の城下に出で、若黨奉公などを勤めて自己の運命を開拓せんと幾多の辛苦艱難を嘗めたものである。終に藏元附中間水井家（佐波郡桐畑村の出、名は武右衛門）の中嗣養子（武右衛門幼少のため、その成長まで嗣子の名儀を冒すもの）となる。この水井武右衛門は後に伊藤直右衛門と改名したのであるが、この武右衛門に見込まれてその代役を勤むることゝなり、ために一時は水井十藏と稱し、後に伊藤十藏と云ふに至つたのである。そこで十藏は鄕里熊毛に殘しておいた妻子を呼びよせ、萩城下松本新道（いまの銅像のある保存建物）の宅に、再び溫かなる家庭を營むことになつたのであるが、この時、利助は九歳の（嘉永二年）春であつた。

松陰先生の門に入る

この利助に伊呂波の手ほどきをしたものは、束荷村の三隅勘三郎といふ村の手習師匠であつた。利助が萩に來てからは法光院（萩の新堀金比羅社房、今の圓政寺）の住職惠運といふものが母方の伯父に當つてゐるがために、一時（十一歳の頃一ヶ年間許）この惠運に就て讀書習字を學んだものであるが、その後十一歳の時に玉木文之進の松下村塾の繼承者であつた久保五郎左衛門久成の久保

塾に入ることになつたものである。更にその後に於て來原良藏（くるはらりやうぞう）に見出されて、その薫陶を受け、學修と共に武士の精神を眞に打ち込まれたもので、後年の伊藤公の心身は將にこの時代に於て素養されたものであるといはれてゐる。この間の事情については、公自らも晩年親しく左の如く物語つてゐらるゝのであつて、常に當時を追懷されて切なる思慕の情があつたやうである。

久保（松陰先生の外叔、久保斷三の父、吉田稔丸も幼時またこの塾に學ぶ）は學究にして單に讀書、詩文、習字を教ふるに過ぎざりしも、その熱心なる教授法は、當時長藩子弟の修學に與りて功ありしや論なし、然り而して第三の恩師として、啻に書物を予に授けたるのみならず、讀書と共に武士の精神を予に教へ吳れたるは、今の侯爵木戸孝正の實父來原良藏（長藩江戸有備館教官、横濱異人館燒打事件の責を負ひ、文久二年八月屠腹、年三四、贈從四位。松陰先生曰「志確量宏、將往顯、俊傑之才」）と稱する人なり。彼れ姓は多々良氏、諱は盛吉（後に盛功に改む）と云へり。實家は福原と稱し、來原良右衛門に養はれ其姓を襲げり。福原、來原は共に長藩平侍の家にして、而も近き親戚の關係を有せり、然るに良藏は來原家に入り、嫡子の儘御祐筆又は檢使（會計檢査役の如きもの）を勤め、藩の文學者土屋矢之助、號は蕭海と稱する者の媒介に依り、木戸孝允卽ちその當時の桂小五郎の實姉（和田昌景の娘）と結婚せり。予の來原と相見たるは今より五十四年前、卽ち安政三年丙辰のことなり。當時毛利家は幕府の命に依りて鎌倉より宮田に至る相州沿岸を警護し、藩士は今日の所謂「バラック」の如き板小屋を作りて之に起臥せり。予時に年十六、勤番のため長藩より派遣せられ、同業三十四五人と共に宮田に赴けり。幾何もなく來原宮田に來り、予が萩の久保塾に於て讀書を學べるを聞き、且又予に多少見るべき所ありと思へる乎、熱心親切に勤番小屋中において予に讀書を授け吳れたり。彼れ豪膽にして實に克己心に富み、學識又深遠、眞に文武兩道の達人と稱すべき人にして、また意思の强固なる、予は生來今日に至る迄、未だ曾て彼の如きものを見たることなし。彼は多期毎朝午前四時頃騎馬提灯を携へて予が小屋に來り、熟睡せる予を叩き起し、小脇に抱へて已の小屋に連れ行き、蠟燭の光にて予に詩經書經を教へたり。彼れは啻に文學を授くるのみならず、又武士の精神を予に鼓吹せんと期したるものゝ如く、寒中暑季共に予に草履を穿つを許さず、跣足にて常に海岸山野を跋渉せしめ、且つ曰く「武士は戰場において如何なる困難に遭遇せずとも限らず、若し戰地において草履を得る能はざる時は如何せんとする乎、須らく平常より跣足にて歩行するの習慣をつけざる

べからず」と、又寒中予思はず『寒し』と云へば、彼れ直に之を聞き咎めて曰く、『寒しと云へばとて寒氣の緩む道理なし。然らば初より寒しと云はざるに如かず。武士は何事も飽まで辛抱せざるべからず。愚痴と弱音は武士の禁物なり』と、諄々として予を戒めたり。斯くの如く彼の予に教ふるや、實に懇切を極め、予に一生忘るゝ能はざるの好教育を與へたり。然るに予等の勤番は、一年更代なれば、予は十七歳の秋滿期に達し、歸藩せんとするに當り、來原は尙學問を繼續すべきことを予に懇諭し、自ら吉田松陰に宛てたる紹介狀を裁して予に與へ、萩に歸着せる上は、松陰に就て更に攻究を爲すべしと勸告せり。仍て予は安政四年丁巳九月萩に歸るや、贄を松陰の門に執つて松下村塾に學び、玆に同門幾多の青年と相知り、翌五年戊午六月には藩命を以て、杉山松助・伊藤傳之助・岡仙吉等三人の松陰門下生及山縣小介（後の公爵有朋）総樂悅之助等と共に、形勢視察の爲京都に上り暫くにして再び歸藩せり。（藤公餘影）

この相州宮田の勤番（きんばん）は一年更代であつたから、利助十七歳の秋、その滿期となつたので歸藩することになつたのであるが、その時この來原は尙學問を繼續專修することを諭し、自ら松陰先生に宛てた紹介狀を利助に與へ、萩に歸着の上は、是非松陰先生に就て更に勉學するやうにと勸告したのであつた。

そこで利助は、安政四年九月萩にかへるや、直に松陰先生の門を叩いて愈々松下村塾に學ぶことになり、こゝに始めて、松陰先生の殉國魂を打ち込まるゝと共に同門幾多の憂國熱血青年と交はり、互に切瑳琢磨することになつたのである。

村塾時代の伊藤公

利助はもと〳〵山下新兵衞組下の輕卒であつて、主人持ちの身柄であるから、日中は仕事があつて思ふやうに行くことが出來ない。夜間の手間を利して通塾するのであつた。當時他にもかうした連中は尠なくなかつたやうである。松陰先生はこれ等の者が來れば、たとへ深夜でも直に膝下に呼びよせて書物を授けられたのであつた。實際、先生は村塾に關係せられて以來といふものは、寢床に入つても、ゆつくりと休まるゝといふことは寧ろ稀な方であつて、その代り餘り疲勞された時は、晝でも机に伏せて、一寸假眠さるゝこともあつたと謂はれてゐる。

元來利助は村塾のごく近所に住んで居り、また曾ては久保塾にも通ふてゐたにも拘らず、入門

後半歳以上の間に於ける消息については、松陰先生の文献中にこれと云つて見出すべきものがない、これは定めし日夜孜々として勉學にのみ勤めてゐたのであつたらうと共に、當時餘り秀才として見出さるゝ程のこともなく、先づ普通の塾生位であつたことであらう。それにまた一面輕輩であつたからかも知れない。それでも彼れには村塾に通うて勤學するといふ一種の自負心觀があつたと見えて、當時の狀況を相州で共に勤務してゐた友人河原友之進に次のやうに書き送つてゐるのである。

爰許、當時文學盛にて一人も讀書不レ致者無レ之、松本は至つて盛にて、松下村塾と號する一塾を相建て、晝夜讀書仕候、貴兄にも何卒讀書御學被成候樣奉存候決而御疎も無二御座一候得共、右之段肝要の御事と奉存候、最早御歸國今少しに相成御繁用と奉存候。安政五年一月

と云つてゐる所であつて、實に晝夜兼行の勉學と云つた調子であつて、友人にも學問を進めてゐるところに、少壯利助の氣魄が既に窺はるゝのである。

處で、安政五年六月松陰先生が、久坂に宛てゝ、當時の塾生の勉學狀況を具に語つてゐられる書中に

提山坊主（後の松本鼎）大に進む、利輔亦進む、中々周旋家になりさうな。云々

と謂つてゐらるゝのをみれば、この頃より漸次頭角を顯はして、先生の眼中には將來有爲の秀才青年であると映じ來つたものゝやうである。

果せるかな、翌七月には山縣小介等六名と共に、藩命を以て選拔せられ、京師に上ることになつたのである。これは勿論松陰先生の推擧によるものであつた。元來この長藩が有爲の青年を選んで京師の形勢探索に派遣するといふことは、云ふまでもなく、當時尊皇攘夷の議論が盛に行はれ、稍もすれば志士の直接行動さへ敢行されんとする狀勢となり、幕府は既に鼎の輕重を問はれんとする勢になつて來たので、松陰先生は幽居の身ではありながらも、頻りに天下の風雲を觀望され、殊に　至尊彥根奉遷計畫については、暗に聞知されていたく憂懼せられ、勤皇旗擧げの時機來れかしと、ひそかに覗つてゐられたのであつた。

これより先き、松陰先生は既に門生の高杉晋作・久坂玄瑞等を京師及び江戸の地に送つてゐられる。玆に於て長藩自體に於ても先生の議論もあり、やつぱり有爲能材の士を京師に遣はして、朝廷と幕府との機密を探知するの必要があつたわけであつて、六人の秀才青年に藩旨を銜めて京

師に送ることにしたのである。

そこで、松陰先生は先發の久坂に宛て、後進門生の人物評と共に近狀をよせられ、且又此等京師偵察六人のもの、伊藤利助・伊藤傳之助・山縣小介・杉山松助・國司仙吉・總樂悅之助等のために送叙を作られて『彦根と京師とは相去ること十八里、六七の驛亭がある。その間には武人も居れば俠客もゐる。富者もゐれば智者もゐる。此等と交を結び耳目手足となつて、一旦緩急の場合に備へるがよい。萬々一　至尊彦根奉遷の如き暴擧をしでかすなれば、その時は兒島高德の古事に倣ふがよい』と激勵されてゐるのである。

かやうに、曾て松陰先生が『周旋家になりさうな』と云はれたこの利助は、いまやまさに藩の撰拔を受けて、天下の周旋家となり、京洛の地に尊皇攘夷の風雲を望んで、彼れが飛耳長目の報導が長藩活動の源泉力ともなるが如き重大任務に當り、僅々一ケ年足らずの村塾殉國教育の芽がふき出して、愈々國事奔走の大舞臺に乘り出したわけであつて、實に利助十八歳の夏であつた。

利助は京師に於て同藩同門士間は勿論、當時の大立物たる梁川星巖・梅田雲濱・頼三樹などとも會見し、百方活動、事情探聞の後、その十月に歸萩したのであるが、また〳〵間もなく來原良藏に伴はれて、西洋陣法研究のため長崎直傳習となつて出發する時にも、松陰先生は肥後の同志轟武兵衛に對し『天下時勢の切迫を論じて其奮起を促し』更に利助に關しては『好んで吾徒に從ふて遊ぶ、才劣學弱なるも質直にして華なく、僕頗る之を愛す』と謂つて、自己の信望そのまゝで、他藩同志に賞揚紹介されてゐるのである。思へば利助は早や既に欝然たる一種の材幹を有してゐた長州秀逸國士の一人であつたのである。

處で、松陰先生は、利助が長崎から歸へる約一ケ月前に、江戸死獄檻送の途に上られたのであつて、利助も定めし失望落膽、悲痛憤慨もしたことであつたらう。

また松陰先生の江戸檻送と、殆ど入り違ひである六月の始めに、桂小五郎が江戸から萩に歸つて來たが、その後番手を命ぜられて、九月十五日再び江戸に行くことになつたので、來原は又も利助の人物材能を說き、從者として江戸に伴はんことを勸めたのである。かくして桂と利助とは、安政六年十月十一日江戸に着し、櫻田藩邸に在つて有備館で專ら文武修業をなすことになつたのである。その江戸着後僅に二旬を出でずして、十月二十七日に松陰先生は千秋の恨を呑むで傳馬町の刑場の露と消えられたのであつた。同門生の飯田正伯・尾寺新之允・桂小五郎と共に、百方

獄吏に手を廻はして、その遺骸を貰ひ受け、骨ケ原同向院に埋葬したのであつた。

その後も、利助は先生のことが夢にも忘れ難く、同門同志と會へば必ず先生の一條に言及し、また其遺訓遺書を談ずるを以て、せめての心やりとしてゐたやうであつた。久坂玄瑞が妻の文子への文通の中にも、『先師おん書物、着物等利助見出し申候』と報じてゐるが如く、先生の死後一しほ心を碎いたのであつた。また文久二年世田ケ谷太夫山に松陰先生遺骨改葬の時にも、彼は人一倍の骨を折つたのであつた。

これで利助と松陰先生との現實的關係は終焉したのである。然し顧ふに利助が松陰先生に親しく直接就學したのは、彼れ十七歳の秋たる安政四年の九月より翌五年七月京師偵察出發までの僅僅十一ケ月間位のものであつた。これより後といふものは、京師に長崎に江戸に、殆んど他國にあつて活動したのである。しかし、この僅の間に於いて、後の伊藤博文公、內閣の首班たること四回、韓國統監となつた世界的大政治家が生まれ出たのである。

韓國統監伊藤公の奉告

松門烈士等の尊き崇高なる心血で維新回天の鴻業は成就せられ、黎明新日本の文物制度の基礎は確立されたのであつた。續いて日清・日露の兩役も過ぎて、明治四十一年海牙萬國平和會議の際、韓國密使暗躍事件があり、伊藤公は英斷以て第二次日韓協約を終へられ、その夏歸朝された時、公の船が下關に着くや、伊藤公は出迎人に向ひ、誰れか萩の人は來てゐないかと訊ねられたのであつた。

恰度其時萩の長老瀧口吉良・杉相次郎・下之關市長白上俊一等が居合せられたので、これらに託して、當時萩松本に健在されてゐた松陰先生の實兄杉民治翁に、言をよせられて、松陰先生は、いつもよく朝鮮のことを氣にかけ話してゐられたが、いま伊藤の手によつて漸く難關を突破し、日韓協約を終へ今回歸朝するまでに至りましたから、どうぞ御安心下さるやうにと、先生の神靈に奉告して頂きたい。

次に伊藤の今日あるは全く先生の御蔭でありますから、それもどうぞよろしく御禮を申し上げて下さい。

とのことであつた。この傳言を得られた民治翁は、非常に喜び直に衣服を新め盛へ、社殿に參

拜して、恰も生前の先生に物言はるゝが如く、公の依頼を語られたのであつた。思へば伊藤公は松陰先生死後の神靈に對し、生前の先生に仕ふるが如く敬慕崇拜されたわけである。

處で、この『伊藤の今日あるは松陰先生の御蔭である』とのことは、誰れ人にも直に了解出來るのである。松陰先生が五十年前『周旋家になりさうな』と云はれたいまの伊藤公。『吾等に從遊し僕頗る愛す』と云はれたいまの韓國統監。伊藤公が松陰先生の直弟子であつたことは云ふまでもないと共に、先生の御蔭で今日ありと云はれた、伊藤公のその奥ゆかしい精神が芳光を放つてゐる。後年、伊藤公が松下村塾を訪問されて

道德文章叙二彝倫一。　道德文章、彝倫を叙し
精忠大節感二明神一。　精忠の大節、明神を感ぜしむ
如今廟堂棟梁器。　如今、廟堂、棟梁の器
多是松門受レ教人。　多く是れ、松門、教を受くるの人

と感慨の一詩を賦せられたことも、さてこそと思ひ出されるのである。

さて、『松陰先生はよく朝鮮のことを氣にかけ話してゐられた』との一條である。そして、この『氣にかけ話されてゐた』ことが、五十年後に於いて、その愛弟子伊藤公によつて實行實現され、日韓合併の完成となつたことについては新めて論及しなくてはなるまい。

松陰先生と朝鮮問題

松陰先生は、曾て叔父の玉木文之進に宛て『當時天下一敵とする所は華盛頓（米國をさす）也・鄂羅斯（露西亞をさす）也・英吉利也。知レ彼、知レ己。急務にては無之哉』と云つてゐらるゝが如く、松陰先生の世界政策ともいふべき歐米對策は暫らくおいて別とし、先生の大陸進展國策として、常に朝鮮・滿洲・支那問題を論議されてゐたことは、前の久坂玄瑞入門時に於ける問答にても略知ることが出來るのであつて、松陰先生の論叢文獻や往復文書中に於いても隨所に於て散見することが出來るのである。

元來、松陰先生は日本の國に最も近きものが、先づ日本に害をなすものであるから、これを假裝敵國として國策を決定し對處しなければならぬとされてゐたのである。從つて朝鮮や支那を對象とされてゐたのである。此等の解決後に於いて來るものが、米國と露西亞とであると想定され

てゐたのである。

尤もこれは、嘉永六年に米使ペルリと露使プウチヤーチンとが、各々軍艦を率ゐて來朝したのに刺戟衝動を感ぜられたにもよることであらうが、松陰先生は、前述の『我が國に近きもの其害をなす大なり』との見地よりして

今日防寇の急務は、米國にあらずして露西亞なるを以て、文化年間已降北地に關する文獻を精研して國家百年の長計を樹立しなければならぬ。

と力説されてゐるのである。此等に關しては後に詳悉することにするが、この朝鮮問題に關しては、上古の神功皇后時代に於ける列聖の皇謨雄略を仰慕してゐられたのである。當時朝鮮は日本に朝貢してゐたのであるが、我が國力衰退し國威失墜のため、後年却つて彼れの輕侮を蒙りたるのみならず、支那の威力が朝鮮に加つて、日本がその危險を感ずるが如きに立ち至つたことは實に遺憾である。この離反せる日鮮關係を復古的に整調しなければならぬといふのが松陰先生の根本理念であつて、早くも十七歳前後よりこれを說いてゐられる。從つて豐公の朝鮮役の如きは隨時文獻中に論及されてゐるのである。

いま玆に、その一二を摘錄してみると、松陰先生は十七歳にして既に外夷の東漸をいたく憂懼せられ『方今太平正に久しく、武備漸く弛緩し、而かも西洋賊は日に熾に月に盛に、前年印度を略し、滿淸を侵して來た、從つていつ皇國を覬覦（狙ふこと）することがないと言ひ得ることが出來やうか、さすれば古訓を師とし（我が國上古の海外振威をいふ）逸遊に耽ることなく、戰を忘れずして文敎を起し武備を嚴にして、人心の統一作興を計るべきである』とされてゐるが如く、夙に外夷對策に關しては、深甚の思慮工夫を絕えず練つてゐられたのである。洋夷東進を以て、いまは支那の問題なり位に、對岸の火災視してゐるが、その次に來るべきものは、この神洲日本國であつて、侵略支那を基地として必ずや近く日本に來襲すべしと、感念されてゐたのである。

そして、松陰先生の對外政策の根本義は、國內體制の整備が第一着である。これにより進取的攻勢の下にガツチリと退守的姿勢を整へるといふのであつて

六十六國一塊石となり、萬國の夷輩を勦撫せしめ、五大洲の陋名を除き、天朝の佳名を賜ふ（讀者此言大に味ふべき也八紘一宇はまさにこゝぢや）大禁物は日本國內にて相伐すること誠に恐れ多し（これも現時の社會相に照して大に味ふべきである）魯墨（米・露のこと）講和一定、我より是を破

り信を戎狄に失ふべからず、條約を嚴守し信義を厚ふし、其間に於て國力を養ひ、從へ易き朝鮮・滿洲・支那を切り隨へ、交易にて魯國に失ふ所は、土地にて鮮・滿にて償ふべし（讀者大に味ふべし東亞共榮圏確立の一翼を既に說いてゐられる）長崎に來るものは其事件を審にし、絶つとも勦するとも何ぞ策なきを憂へんやである。

豐太閤の雄才にてさへ、惜哉天下分爭の日に生まれ候て、神州の揆亂に手間取候故、遂に明國に手が入らずして殁せられ候、況や今國內に事起り候ては、外國へ手はのび不レ申、大機を失ひ、洪秀全（天主敎を奉じて廣東に兵を擧げ曾國藩に誅せらる）等が淸國を僞定し、朝鮮も滿洲も隨從しては、彼れより先き、我關を款き候はゞ大遺憾不レ過レ之候。

と論じてゐられる。殊に朝鮮問題に關しては、さすがに松陰先生は歷史家だけあつて、上古列聖の古事を引用し、虛々實々の對策を論じ、而かも武力に伴ふ德化政治を以て日韓合併を說き論じてゐられるのである。

夫れ坤輿の形勢は、合せざる能はざる者あり、合はせざるべからざる者がある。我が奧越（奧羽地方をさす）の如きは、地脈接續し、合せざる能はざるものである。三韓・任那の諸蕃は地脈接續せずと雖も、而も形勢對侍し、吾れ往かずんば則ち彼れ必ず來り、吾れ攻めずんば則ち彼れ必ず襲ひ、將に不測の憂を釀さんとするものであつて、是れは合せざるべからざるものである。而かも之を合せば必ず合するものである。

三韓を治むるに當りては、先ず其對策得失を考へなければならない。神功列朝の威力を藉り、一擧にして新羅を服したまふ。新羅既に服したれば、則ち兵を收めて復た窮追せず、質子（人質のこと）を納れ、貢額を定めて、高麗・百濟をして、風を望んで降らしめたまひしは、得である。已にして勳伯の武內を遣して四海を按察し、以て速に三韓を制せしめたまひしも、得である。然るに讒間これに入り、其任久しからずして則ち之を失ふたが、後、府を任那に置き、以て三韓を驅使せしは、最も得である、雄略の八年、高麗を破りし事を以ても觀るべきである、又其後、太宰府を置き、其任を重うして其權を假し、九國二島の力を以て諸蕃を懾服せしは、其得、武內の事の如し、而して歷世沿うて改めざりしは、則ち最も其得を觀るに足れりと云ふべきである。但だ後世衰弊日に甚だしきに至り、吏を選ぶこと精ならず、而して諸蕃稍僞りて、則ち之れを失へるわけである。

凡そ諸蕃の狀、高麗・新羅は往々倔强にして、隣國を寇擾す、百濟・任那は則ち柔弱にして立たず、常に吾れを恃みて以て難を解く、而して吾れ海を絶り軍を差して、罪を討ち危を救ふには、軍衆からざるを得ず、將軍からざるを得ずである。意ふに當時の議或は其尾大掉はざるを恐るゝものがあつたからであらう。故に諸將も亦朝廷の旨を候ひ、專擅の嫌を慮り、匆々に時局を了、率ね周歲ならずして還り、徒に一時の勝を事とし復た久遠の計なしであつた。故に彼れの我が兵を視ること猶ほ暴雨のごとく、暫く其鋭を避くるのみとみくびつてゐられたのである。（現時の日支事變に思ひ合せ我が國民の最も味ふべき所なり、事變處理の前途かくあつては大變なこと）夫れ徳を以て之を懷け、威を以て畏れしむるは、夷を馭するの常法である。（國民よく此點を考慮すべきである）任那府をして倭武の如き、武内の如き將を置き、其任を重うし、其權を假し、兵を以て衛るに足り、餉以て食するに足り、專ら其民人を愛養し、任那・百濟を懷柔して敢て輕蔑して之に臨まざらしめは、則ち新羅・高麗も、亦將に吾が徳に懷かんとするものである。若し尙迷頑にして命に抗せば、則ち任那・百濟を率ゐて往いて其罪を問ふ、誰れか吾が威を畏れざるものあらんやである。百世の後、豐太閤の韓を征せしは、不世出の才を以て、未曾有の擧を爲せる者といふべきである。然し唯だ能く彼れを畏れしむるありて、徳を以て之を懷くるなく、合はせざるべからずして、之れを合せば必ず合するものを、遂に合せ得なかつたことは實に殘念なことである。悲しい哉。（丙辰幽室文稿外征論〔原漢文〕）

と、條理を盡くし細微に入つて論及されてゐる。實に松陰先生の日韓合併論乃至は大陸政策といふものは、雄大にして嚴然たるものであつた。そしてこれ等政策遂行の根本を武力に併行する徳化政治に置いてゐられることを見逃してはならぬのである。就ても滿洲事變以降日支事變と云ひ佛印駐兵の現時と云ひ、更に米英勢力擊滅の大東亞戰爭と云ひ、この一文を讀む時には强き衝動と深き示唆とを受けずにはゐられない。かうした道義理念、かうした對策措置を、その時代時代によつて、その事案々々によつて、複雜機微の間に不動の決意を以て進めて行く處に、今次戰爭の完遂もあれば、東亞共榮圏の確立もあり、八紘一宇の大理想樹立もあると云はねばなるまい。著者の本書を執筆した所以も、まさに玆にありであつて、各所論に於けるかうした文獻の一字一句を深味し、時代的に活用して國運の進展に寄與したいのみである。

このやうに、前の久坂入門時に於ける大陸南進論と云ひ、また、曾て來原良藏に宛て『蝦夷を

墾し、滿洲を奪ひ、朝鮮を貢し南地を併せて、然る後に、米を拉ぎ、英を折かば、則ち事克たざるはなし（安政二年四月）』と謂つて居られるが如く、更に山田治心氣齋に對しては『滿洲を收めて魯に迫り、朝鮮を貢して清を窺ひ、南洲を取つて印度を襲ふ、これ天下萬世繼ぐべきの業なり』と主張されてゐるが如く、いま先生のかうした主張主義は、機に觸れ時に應じ、常に論議されたものであつて、これが松下村塾に於ける我が國是國策に關する指導精神であつたのである。慷慨時難に身を挺せんとしてゐた門生達が、どうしてこれに感動奮起せざるものがあらうか、熱血有爲の青年門生達が、北の方大陸を睥睨し、南の方海洋諸島を遙に望みて扼腕大志を奮ひ立つたのも當然のことである。伊藤公もまたまさにその雄たるものゝ一人であつたわけである。

顧へば村塾の參謀長久坂玄瑞は、この國策論で入門を許され、この大陸南進國策で魂を鍛へられたのである。從つて村塾學徒達は何れもこの指導精神で驅り立てられたわけである。然し久坂は殘念ながら禁門之變に於いて大志空しく君國に殉じて行つたのであつた。

幼少時代手習の終には、いつもキツト人形を畫いて『これは太閤秀吉ぢや』といつて、自ら秀吉を以て任じてゐたといふ伊藤公は、五十年後に於いて遂にこの松陰先生の大志雄略を繼承して、實行に移し實現に力め、實に日韓合併を完成せめしたのであつた。松陰先生の神靈に心からなる感謝の誠を捧げられたといふのも理ありと云ふべきであつて、今や松陰先生の雄魂神靈は京城博文寺の法頭に、更にまた日韓合併後の大日本帝國國運進展の上に、そして大東亞建設の國策の上靜に守護鎭座されてゐるわけである。

外夷謀略への對策

言へば直に立つて行へ

松陰先生は、曾て王陽明の『傳習錄』を讀んで大いに悟つたと謂つて『知は之れ行的の主意、行は是れ知的の功夫、知は是れ行の初め、行は是れ知の成るなり』と抄錄してゐられる。また未だ學んで行はざる者あらざる也、若し孝を學ぶと言へば、則ち勞に服し養を奉じ、孝道を躬行して而る後之を學ぶと云ふ、豈徒に空口耳講の說に懸はり、之を孝を學ぶと謂ふべきか。などとも書き留めてゐられる。（嘉永三年先生二十一歲）更にかの『幽室文稿』の中に於ては

大凡男子のことを成す、自ら一種眞心實意、肺肝骨髓に凝固して石の如く、結んで解くべからざる者あり、然る後爲すべき也。

とも說述してゐらる。要するに、此等は何れも、知は則ち眞心卽行であつて、行がすべての道德

の基根であるとされたものである。實に松陰先生は知行合一の模範的實行者であつたのである。

從つて當時松陰先生の學問は實學と謂はれてゐた。言へば直に立つて行ふ、その行ふや死の覺悟決心でそれに當るといふ、實に烈々熱火の如き勇猛心であつた。卽ち空論徒說を排し、實踐實行第一主義であつたのである。松陰先生が終生の守護符とされた『至誠』の二文字にあつても『誠とは道を專一眞實に行つて息まざることなり』と謂つてゐられ、また『德』に關しては『道を行ふて心に得ることなり』と述べてゐられるが如く、すべてが實行、しかも身を以て卒先死の覺悟で當るといふのであつた。

そして『自ら死ぬことの出來ぬ者が、どうして人を死なすることが出來やうか』といふのが、先生の信念であり、雄々しい氣魄であつた。『人を燃さんと欲するものは自ら燃えざるべからず』といふのが、先生の熱であり力であり、これが至誠の魂となつたのである。

從つて松陰先生は、その夙志たる海外雄飛の此等の大陸・南進謀策に關しても、空しく拱手傍觀的態度でゐられやう筈がない。外夷の侵襲が急なれば急なるほど、國家の危難が迫まれば迫まるほど、松陰先生の至誠憂國の熱情はいやが上にも燃えあがつて、敢然死を決して捨身で當られ

たのが、この海外雄飛の策謀であつたのである。

十年間の諸國遊學

松陰先生は、宮部鼎藏と亡命同伴し東北遊歴を終へて、嘉永五年四月五日江戸に歸へられて、桶町河岸（今の日本橋）に私塾を開いてゐた安房の儒者鳥山新三郎（確齋）の宅に假宿され、續いて十四日櫻田藩邸に入つて亡命の待罪書を呈せられ、五月十二日萩に歸り謹愼して命を待たれたのであつた。そこで十二月八日亡命の罪を以て士籍を削り世祿を奪はれ、實家杉氏に預けの身柄となられたのであるが、父百合之助としては愛兒がいまり境遇を見るに、よしや犯禁囚居の身の上であるとはいへ、その志は邦家の危難に忠せんとしての眞情より迸り出たものであるから、何んとかして聊かなりとも彼れを慰めてやりたいとの切なる親心があつた上に、先生が平常の志を知つてゐられた藩主（松陰先生は度々御前講義をされ、また藩主は先生の山鹿流兵學の門生であつた）に於ても、いたく先生の志を憐まれ、特に内諭して十ケ年間諸國遊學のことを請はしめられたのであつた。

これが嘉永六年（先生二十四歳）正月十六日に許可になつたので、先生は愈々二十六日朋友知己に別れを告げて萩を出發され、先づ三田尻に出で飯田行藏の宅に寓せられたのである。この時飯田の詩に次韻された中に『一語尚聞古人道。爲レ君爲レ國不レ知レ身』と賦せられて居り、またこゝまで見送つて來た門人で從弟である久保清太郎には

人生得喪一毛輕。　人生の得喪は毛よりも輕く
英雄常要身後名。　英雄、常に要す、身後の名
嗟吾微志或有レ成。　嗟、吾が微志、或は成るあらば
巴城之下尋二舊盟一。　巴城の下、舊盟を尋（舊交を溫むるの意）がん

と言ひ殘してゐらるゝのである。何んたる悲愴の決心であつたらうと共に、また先生の憂國の至情が躍如として迫り來るかの感がある。

そこで二月朔日富海より舟に上り、途中宮島に寄り、六日讃州多度津に渡り、七日琴平に詣で、殊に崇德天皇御陵を拜せられて『登山一日發二悲歌一。曾聞此邦駐二蹕跸一。（天子樣のこと）山陵寂莫今如何云々』と慨嘆のあまり一詩を賦せられ、十日大阪に達し、坂本鉉之助（鼎齋）・後藤春藏（松陰）等を訪ねられたのである。それから大和路に入られたのであるが、此頃先生は少々『體中

帶熱』と謂つてゐらるゝが如く、その不快病軀を以て雨中の難行を續け、十三日五條に至つて森田節齋（名は益、字は謙藏、贈從四位）を訪ね、相當長滯留の上學修に力められたのであつて、當時左の一詩を賦してゐられる。

風雨侵蓑笠。　風雨、蓑笠（みのかみ）を侵し
殘寒粟生肌。　殘寒・粟・肌に生ず
春半和州路。　春は半なり、和州の路
花柳未入詩。　花柳、未だ詩に入らず（春、半なる殘寒のため花柳も未だ芽を出さず、詩情動かずとの意）
獨行況生路。　獨行・況んや生路（始めての旅路）なるをや
墨子數泣岐。　墨子・數々岐に泣く

註　墨子數泣岐　昔楊朱なるものが九條の分れ路に於て、その右せんか左せんかと迷ひ泣きたりといふことあり、松陰先生も大和の初旅に入つて數々路に迷ひたりとの意。

晦日再び大坂に赴き、四月朔日藤澤東暎（名は甫、字は元愛、復古學者）を訪ね、五日更に谷三山（名は昌平、字は子正、號は三山、釋齊、淡庵、無耳山人、勤皇儒者、贈正五位）を八木に尋ね、翌六日五條に至りて堤孝亭の家に宿し、この月中はこゝに滯在し、五月朔日五條を發して再び三山に見え、郡山に至りて藤井禎二（名は貞、字は士幹、號は冬齋、實用の經學を以て郷山藩風を清む）を訪ひ、四日奈良春日神社に詣で、これより加茂・笠置等を過ぎて伊賀路に入り、上野を經て伊勢の津に達し、齋藤拙堂・三島貞一郎（後の文學博士三島毅）・家里新太郎等と會し、また山田に赴いて伊勢の大廟を拜し、足代權大夫（名は弘訓、號は寬居、國學者にして神宮の神官）を訪ねられ、十一日桑名に出で、これより日々好天に惠まれつゝ木曾路を經て二十三日には熊谷を發し、鴻巣・大宮・浦和を經て蕨驛に宿せられたのであつた。翌二十四日には同所を發し板橋を經て白山（今の小石川白山）に至り、中津川驛から同伴された江戸の與力田邊定輔（本姓は村瀨氏、通稱福三郎、字は秀德、號は石處、元尾張の儒者）に別れを告げられ、續いて番町の劍客齋藤彌九郎（篤信齋）の塾を過ぎて桂小五郎（木戸孝允）・村松文祥・赤根宰輔等の郷友同志を訪ねられ、また〳〵桶町の鳥山の宅に泊まられたのであつた。當時鳥山の塾を梁山泊と稱へ、憂國志士が來り集まり、殊に長藩關係同志が多かつたからであつたらう。

その時、恰度新三郎は外出中であつたので、越後三條の一向僧北條秀英なるものと會語せられ、

また一書を作つて長濟邸にゐる瀬能吉次郎・工藤半右衛門・井上壯太郎等に送られたが、吉次郎は早速僕を遣はし、郷里萩より依托されてゐた書狀書籍や衣類等を送り屆けたので、松陰先生も久々振りに父百合之助・兄梅太郎及び宮部鼎藏や妻木彌次郎等父兄同志交友の消息を得て大いに喜ばれたのであつた。夜に入つて新三郎は歸へり、また壯太郎も來り會し、互に談論大いに時事を痛憤して非常に快哉を呼んでゐられる。當時兄梅太郎に

五月廿四日江戸着、桶町河岸寓居仕候處、御屋しきより瀬能氏荷物柳行李一、文庫一、並四月四日之書入手、尊大人並妻木・宮部の書、孰も慥に受取、先以御園族御康寧之御樣子承レ之、大に安心仕候、房吉至、又得レ詳二其情一、大喜々々、今日草々件々に當り候御答は、他日と申上殘候、金の事、御國より瀬能迄御送被レ遣候由、相對之上可レ渡との申分なり、然し大和邊にては多くは知人の處に寓し候故、多くは費不レ申、出足時之金、尚三兩不レ足は裏に在り、御安意奉レ願候。

と喜び、また安堵の情を報じてゐられるのである。

松陰先生は、翌二十五日には鳥山の家を出で、西窪に至つて、大垣藩士竹中圖書の臣長原氏を訪ねられ、少時立談の後、これより品川に出で、川崎・神奈川・保土ケ谷を經て、戸塚驛より道を左に取つて鎌倉に入り、瑞泉寺に竹院和尚を訪ねられてゐるのである。

瑞泉寺は臨濟宗圓覺寺に屬し、高僧疎石が嘉曆二年に開いて錦屏山と號し、觀音堂を建立したのが始めである。この竹院和尚は、名を昌筠と云ひ、村田右中の男で、松陰先生の母瀧子の兄である。始め德隣寺で剃髮し、本山の京都南禪寺で業を積み、後、圓覺寺の淡海和尚に學び、遂に瑞泉寺の住職になつたものであつて『性峻嚴、鎌倉の禪風を興す』とさへ傳へられてゐるほどの謹嚴な人であつた。松陰先生もこの竹院上人の感化を受けられ『修身の工夫、死而後已の說などを聞く』などと云つてゐられ、下田踏海事件の如きも、陰に竹院上人の激勵によるものであつたとさへいはれてゐる程である。

松陰先生が寺を訪問された時に、上人は恰度門前を掃つてゐられたのであるが、先生の來寺を見て大いに喜ばれ、終夜談論互に倦怠を覺えなかつたといはれてゐる。この時、上人は浦賀奉行土岐丹波守頼旨のことを稱揚されたとのことであるが、この頼旨は、天保十四年に書院番頭から下田奉行に任んじ、更に浦賀奉行になり、遂に大目付になつたものであつて、從つて外夷急迫の

時事問題や、下田浦賀あたりの防備關係などの話題で賑つたことでもあつたらう。

松陰先生は、鎌倉名所巡りや、江ノ島見物などをして、六月朔には江戸に歸へられたのであるが、先生は後年萩野山獄に在つて當時の事を追懐され、左の一詩を賦してゐられるが、如何にもよく當時の狀景が偲ばれるのである。

遙憶瑞泉寺上人

山光竹色入レ窓青。　山光竹色、窓に入りて青し
方丈幽深倚二錦屏一。　方丈（寺のこと）幽深・の錦屏に倚る
今我爲レ囚空憶レ昔。　いまわれ、囚と爲りて、空しく昔を憶ふ
月中一夜叩二雲扃一。　月中一夜・雲扃（とざされたる寺の門）を叩く

米艦浦賀に入る

松陰先生は、六月朔日鎌倉を發し、途中再び長原氏を訪ね、鳥山新三郎の宅に歸へられたのであるが、時已に初更（午後八時）であつた。翌二日には長原が來訪し、松陰先生は藩邸に行つて、井上壯太郎・道家龍介・瀬能吉次郎等の鄕友同志と談話されてゐる。三日には佐久間象山を訪ねられて、その門人近澤啓藏（濱田藩士）と時事を論議されてゐる。

この日、未の刻（午後二時三時）に米國水帥提督ペルリが軍艦サスクエハナ・ミシシッピー・ブリマス・サラトガの四隻を率ゐて浦賀灣に入り碇泊したのであつた。浦賀奉行井戸鐵太郎（石見守）は直に部下を遣はしてペルリの來意を問はしめ、且つ國禁の旨を告げて、長崎に廻航すべきことを懇諭したのであるが、ペルリは高慢不遜、傲然として之を聽き容れず、直に江戸に進航して將軍に謁し、自ら大統領の國書を呈上せんことを主張したのであつて、江戸内外の人心は實に恟々然たるものがあつたのである。

長藩邸に於ては、周布政之助が魚商の言で、川越藩の輕舸がその警報を齎らしたといふことを探聞したので、直に密使を靈南坂の川越藩邸に遣はして、その狀況を求むると、米艦の浦賀來航は事實確かであるといふことが解つた。そこで老臣の浦靱負をして藩主に上申せしめたといふのを見ても、如何に當時の狀景が急迫且つ騷しかつたかといふことが思ひやられる。

米人は、飽迄驕傲高慢で威嚇恫愒に出て來てゐる。幕吏は周章狼狽して何等施すべき術策も知

らない、四日には、浦賀奉行組與力香山榮右衞門等が應接しても頑として應ぜざるのみならず、實に傍若無人の態度であつた。

しかるに、松陰先生はこの四日に於いても未だこの米艦浦賀來泊のことは知つてゐられなかつた。渡邊春汀を訪問されたが不在のために又々長原を訪ね、そして麻布の長濱邸に行つて工藤半右衞門や新山忠右衞門等と面語されてゐる。歸つて更に長濱櫻田邸に至つて道家龍介と會見せられた時に、始めて浦賀米艦來航事變を聞知されたのであつた。

さてはと驚かれた松陰先生は、その詳報を得んがために早速佐久間象山の塾（木挽町五丁目）に走られたのであるが、塾中の諸生は皆早朝浦賀に行つて誰れもゐなかつたのである。

やむなく松陰先生は鳥山の宅に歸つて、警報如何と思案しつゝ、客と兵書を講じてゐられた時に、果せるかな、浦賀來航の詳報がやつて來たのであつた。最早猶豫は出來ぬとあつて、そのまま書物を拋つて起ち、袂を振つて浦賀に赴かるゝことになつたのであるが、時は已に初更であつた。

鐵砲洲に至つて小舟を雇はれたが、未だ風が出ないので解纜が出來ない。そこで旅店に入つて休憩し時間待ちをされてゐると、寅の刻（午前四時五時）になつて漸く舵子が乘舟を出し、進航すること一里あまりの所で會津の船に逢はれたのであつた。これは房・總にある會津藩の營舍から外艦渡來の事情を江戸に急報するものであつた。間もなく夜は全く明けたが、風と潮とが逆になつて來たために船は遲々として進まない。巳の刻（午前十時十一時）に至つて漸く品川に達するといつた狀態であつた。松陰先生は時機を失せんことを憂慮され、遂に舟を捨て上陸して西に疾走されたのである。時偶々途中で遙に砲聲を聞いて驚かれたのであるが、これは大森の射擊場における幕臣の演習であると知られてホツト安堵されたやうであつた。これより先生は川崎・神奈川を經て、保土ケ谷から左折して金澤の野島（今の横濱市磯子區野崎）に行かれたのである。當時野島には船舶の會所があつて、海路の往來に便であつたからであらう。こゝでまた舟に乘つて三里餘りも行かれて大津（三浦郡浦賀町管内）に着かれたのである。北方に猿島があつて其影に船燈が列をなしてゐるのが見える。それは外艦の警備船であつた。かくして松陰先生は夜二更（午後十時）浦賀に到着されたのであつたが、浦賀においては別に騷擾しい氣配もなかつたのであつた。

そこで、松陰先生は旅舍で小林鐵五郎なるものと面談され、前日未の刻に來航したといふ米艦

入港當時の狀況などを聞き取られたのであつた。當時象山は門人の中尾定次郎と共に昨夜既に來浦して居り、また米人側においては態度を緩和して幕吏に來意を述べ、決して禍心なきことを說き、警備の船舶を撤去せんことを請ふて來たので、奉行所もこれを容れて警戒を緩めてゐたやうな狀勢でもあつたのである。

松陰先生はその江戸出發の時、藩邸の瀨能に宛て、ぐづ〳〵しては海陸共に交通が遮斷されるかも知れない、心が急くと云つて、次のやうな一書を送つてゐられる。

浦賀へ異船來りたる由に付、私只今より夜船にて參り申候、海陸共に路留にも可二相成一哉之風聞にて、心甚急、如レ飛如レ飛。六月四日

御國へもし飛脚參り候はゞ、此書直接御さしだし奉レ願候、左候得ば、僕壯健にて英氣勃々の樣子も可二相分一候、事急別に手紙を認めること不レ能。

と、いかにも松陰先生の匆々急遽であつた樣子を知ることが出來る。また國元へも知らせと云つてゐられる先生の用意周到さと共に、かねて憂懼痛心されてゐた最惡の場面が到來した。そして英氣勃々素心を果して必ず御奉公いたしますぞと、心中ひそかに固く期してゐられる國を思ひ君を思ひ、親を思はゝ心情が、深く籠つてゐたことをも窺ふことが出來るのである。

六日には早朝起きて鴨居（浦賀町の內）に行かれ、海上の樣子を探見されて

陸を離るゝこと凡そ一里餘の沖合に、米艦四隻が碇泊してゐる。各艦の距離はみな五町位はある。眞中の二隻は蒸汽船であつて、各長さが三十間餘である。その一隻は砲十二門を備へ、その一隻は砲二十門を備へてゐる。他の二隻はフレカット船であつて、各長さが三十五間で砲二十六門を備へ、輕舸八挺を具してゐる。海洋は一望寂然として聲なく、たゞ時報の發砲を耳にするのである。浦賀奉行の管せる浦賀砲臺の壘壁は未完成であり、その砲位も未だ完全してゐない。鳶巢・龜崎・島崎（川越侯松平典則の管領せるもの）は各砲一門宛であつて計三門である。鴨居は會津藩（松平容保）・西浦賀は彥根藩（井伊直弼）が各その水軍を以てこれを守つてゐる。今後一時の午の刻（午前十二時午後一時）に至つても、請ふ所が允可されなければ發砲して應接すといふ米人の恫喝が傳つてゐる。浦賀奉行戸田伊豆守氏榮は塋後の寺院を淸掃して、若し事爲らざれば切腹するといふ決心であるとのことである。また午の刻に、四隻中の黑赤二色を船號とした蒸汽船の一隻が江戸灣に向つて駛走したとも傳へられてゐる。從つて來觀人（佐久間象

山もゐる）には急に江戸に歸つて行つたものも相當にある。その米艦は杉田（いまの横濱市磯子區）に至り、輕舸四隻に導かしめ海水の深淺を測量し、會津藩の兵船が往つて之を止むるも肯じない。遂に彦根・川越・忍（松平下總守忠國）三藩の兵船が之を環繞して進み、申の刻（午後四時五時）に至つて、再び前泊の處に還つたといはれてゐる。

と書き留めてゐられる。さすがに松陰先生は兵學者だけにあつて細微に入り、しかも重點の觀察がハツキリとしてゐる。それにもまして當時上下の騷然たる狀況が手に取るやうである。なほ先生は當時長藩邸の道家龍介に次の一文を報じてゐられる。

此度之事、中々容易に相濟申間敷、孰れ交兵に可レ及か、併し船も砲も不レ敵、勝算甚少く候、御奉行其外下曾根氏なども夷人之手に首を渡し候よりは、切腹可レ仕とて、頻に寺之掃除被二申付一候、佐久間は憤慨し、事斯に及ぶは知れたこと故、先年より船と砲との事、やかましく申たるに不レ聞、今は陸戰にて手詰之勝負の外手段無レ之との事なり、何分太平を賴み、餘り腹つゝみをうちをると事ここに至り、大狼狽之體可レ憐々々、且外夷に對し、失二面目一之事不レ過レ之、併し此にて、日本武士、一へこしめる機會來り申候、可レ賀亦大矣、佐久間より江戸へ飛脚を立候故、此一書相認申候、御國へ別に手紙不二差出一候間、玉木文之進迄、此手紙直接御送可レ被レ下候、私事も、今少し當地に相止り、事之様子落着見屆歸る積なり。

とある。船も砲も不足では到底勝味はない。奉行も下曾根も切腹の覺悟である。象山が常に主張してゐた戰備の擴充强化を輕視してゐたその酬ひが來た。國民が大平に馴れてゐたその天罰だ。しかしこれがために日本人の犢鼻褌（フンドシ）もしまり、人心作興になつて寧ろ賀すべきことでもあらうといつてゐられる。これは、何んだか昭和現代の臨戰體制下における吾が國民への一大警告のやうな感がする、しかも叔父で恩師である玉木にこの大變事を早々知らせてくれろと云つてゐらるゝところに、あの先生の純眞な至情が思はれて、實に奥ゆかしい心地がする。

かくて、松陰先生は九日晩浦賀を發し、十日午時櫻田藩邸に歸着されたのであるが、これよりは佐久間塾において象山を始め、近澤啓藏等の門生達と日々會合し、相共に洋夷に對する對外策を鳩首論議され、幾多の謀策を凝されたのである。

顧へば、松陰先生は曩に嘉永四年六月、浦賀が外艦の渡來する要衝の地であることを察知せられ、相房巡遊と共にこの地方をも視察されたのであるが、いまや親しく米艦來泊の狀景を目擊さ

れては定めて感慨の深いものがあつたことであらう。後に長崎に於て露艦に投じ海外出遊を試みられたことも、また翌安政元年下田において米艦に搭乗して海外雄飛を敢行さるゝに至つたことも、よしやたとへ佐久間象山の慫慂によるものがあつたとはいへ、先生が夙に國家の前途將來を深憂せられ、外夷急迫の荊棘を切り開いて、あの宏志雄略たる大陸南進政策を確立せしめて、祖國神州の地をして世界の柱石たらしめんと念願されてゐた、その誠忠なる英豪賦性の發動振作であつて、松陰先生の八紘一宇の大理想具現たるや、實に根柢の遠く且つ深きものゝあることを見逃してはならないのである。

烈々たる憂國の對策

江戸に歸へられた松陰先生は、米艦來泊以來の世情の推移と人心の動向とを憂懼觀望されつつ、象山塾において近澤等憂國慷慨の徒と日々會合し、幕府の態度を注視してゐられたのである。しかし幕吏は腰をぬかし臆病で覇氣がない。これに反し米人は豪膽で驕傲で恫喝振りを發揮してゐる。これでは遂に國體を失墜する。このまゝ放擲して置くわけには行かないと觀念されつゝ、當時鄕里の兄梅太郎に次の如く報告してゐられる。

浦賀の守備に關しては一昨年宮部と視察した。幕府は天下の人に守備ありと云つてゐたが、これは全く虚僞であることを看破し論じて置いた。果して今日に至つてその虚僞であつた事實を曝露するに至つたのである。そこで始めて天下の人々の目が開けた。九日栗濱に至つて、幕吏の外夷應接の狀を見ると實に情けなく、國體を失墜すること甚大なるものがある。

それは扨置き、吾陣の備方を見ると實に無紀律無節制であつて只々驚くばかりであり、外夷に侮られるのも當然である。九日暮方、夷船は退去の筈であつたが直に内洋に駛入し、暮方より江戸へ向ひ走つたのである。横須賀と云地にて井北（井上壯太郎と北條源藏なるべし）と同道に相成、十日午前櫻田邸に達す。江戸のさわぎ尤も甚し。十五日賊船退帆迄は別邸甚混雜のよし云々。

と、松陰先生は、かねて國防虚僞であつては、この急迫せる國際狀勢に順應することは出來ない、一日も早く邊備の擴充强化を計らねばならぬと自分が主張しておいたことを、漸く今になつて時人がその事實を認識し得るに至つたと報じてゐられ、更に長藩の手配として北條源藏・井上壯太郎が銃隊を司つて奔走し、道家龍介の斡旋で佐久間象山から大砲二門を買得し、長藩武備の

整然たることが江戸でも評判になつてゐると報じてゐられる。

當時松陰先生が日夜最も深憂されてゐたことは、明年（安政元年）幕府が米艦の要求を許容せば、天下の一大變事を惹起するは必然であり、さりとて若し彼れと釁際を生ずるに至れば、太平柔懦の人心の上に防備なき現狀に於て、あの狡獪猖獗な外夷と干戈を交ゆることはあまりにも無謀の暴擧である。戰爭となれば直に敗北することは明瞭である、そこで專ら防禦的國防の整備强化の企畫に苦心焦慮されたのであつて、七月二十八日附で兄梅太郎に送られた書中に

扨も々々天下之事、今日と成來り候はと、且悲且憤のみに御座候、夷人よりの書、一として許允せらるべき箇條無之、天朝幕府にても、天下萬世の爲を思召、此事御許允は斷て有之間敷ければ、是非明春は、一戰に相定申候、我昇平柔懦之士民を以て、彼の猖獗狡獪之賊と戰ふこと、兵未接而勝敗已判然なり、且夷等艦二三十隻も來り、伊豆七島を初め、近海諸島を略し、諸所に上陸侵掠し、海運之船をとゞめ、浦賀港にて一隻も我船の出來ざる如くせば、不出二十日而江戸中鼎沸し、餓莩相臨、盜賊畫行如くなるべし。是時に方り、重ねて浦賀港口に進み、前請を申せば如何がに決すべきや。扨亦江戸之事のみならず、孰れ天下の瓦解遠からざるべし、方今天下疲弊之餘、江戸に大戰始り、諸侯その役に驅使せられば、必不堪命、且又幕府失天下之心、久矣、今般水老公（水戸老公）にて舊態を一洗すべけれども、中々扁蒼の刀圭にても、息の切れたる病人は再生六ケ敷かるべし、於御國も、定めて當今の事情を察し、有志の人々は、夫々心組も可有之候間、定論を承はりほしきなり。

と、鄕土防長二州の防備を憂念しつゝ、彼等が艦船の二三十隻も率ゐ來つて、伊豆七島でも占據することになれば、十日を出でずして江戸市中は鼎沸混亂するのみならず、實に天下の瓦解崩落ともなること遠くはあるまい。よしや水戸の德川齊昭が蹶起して舊態を一洗革新斷行せんとしてみたところで、既に氣息なき病人たる國民は、たとへ支那戰國時代に於ける名醫の扁鵲や、前漢の倉公の如きが出て治療してみたところで、所詮蘇生するものではない。せめて長藩の憂國同士だけなりとも相互に十分覺悟を定めて、この急迫せる國難に對處しなければならないと實に悲愴の決意を示してゐられるのである。

實際、當時に於ける松陰先生の憂國の切情は實に押へ難きものがあつた。重ねて八月八日附で、同じく梅太郎宛に『明春のこと、江戸の光景、如何可有之と御想像あらせられ候や、扨も々々

天下の一大事、今日に立ち至り憂憤仕候のみに御座候』と云つてゐられる、また九月十日附では玉木文之進宛に天下國家危急存亡之際に臨み、平常の言語に暇無レ之候、短方東奔西走、國のための積りにて、眞實は國の益にもならず愧般之至に御座候』と國家のために一身を打ち捨て憂心焦躁、大に奔走苦慮中の旨を報じてゐられる。當時に於ける先生の決意と畫策奔走の狀とが眼前に迫つて來る感がする。

この頃また兄梅太郎に次の詩を送つて『如レ此而死於レ吾足。直諫先着第一槍』と大膽勇敢に言ひ放つてゐられる先生の大志知るべきであつて、先生は實によく彼れを知り己を知つてゐられたのである。然るが故に對外策の第一義を國內體制整備に求めてゐられる。しかも斯樣な急迫せる時代においては、率先して一死身を以て國難に當る底の人心を鼓舞指導しなければならない。この種の憂國先覺者があつて、始めて國內の人心が動き率ひられるものであるとされて、この大役重任に進んで當らんとされたのが松陰先生そのものである。實に松陰先生は眞の至誠憂國、烈々たる殉國忠誠の士といふべきである。

世道日委靡。　世道、日に委靡（衰へること）し

妖夷歲陸梁。　妖夷、歲に陸梁（ほしいまゝに飛び廻ること）す

滔々世上人。　滔々、世上の人

幾個感履霜。　幾個か、履霜（霜をふめば、日ならずして堅氷の來るが如く、大災禍の來ること）を感ず

壯士按レ劍漫自許。　壯士、劍を按じて漫りに自ら許す

馬革裹レ屍男兒常。　馬革、屍を裹む（戰場にて死ぬること）男兒の常

多憂書生閑文章。　多く憂ふ、書生の閑文章

還論事務向廟堂。　還た、事務を論じて、廟堂に向ふ

如レ此而死於レ吾足。　此の如くにして死す、吾に於て足れり

直諫先着第一槍。　直諫して先づ第一槍（一番槍をつけること）を着けむ

將及私言

松陰先生は、浦賀において米人の動勢を詳察せられ、彼の橫暴無禮なる振舞ひにいたく憤激されてゐた。若し明春幕府が彼れの要求を拒絕するなれば、否應なしに必ず一戰を交へ來るべしと

感念されてゐたのである。しかも米艦の約束促進渡來は僅々五六ケ月の後に迫つて來た。たとへこの僅少の間なりと雖も、交戰の外なしとすれば、臥薪嘗膽、上下一心一體、團結して防備に當らなければ、到底あの百練千磨の米人を排擊驅逐することは出來ない。よしや草莽の微臣であつても、かねての持論を盡くして進言しなければ、臣士の分が立たゝないとあつて、『將及私言』と急務條議とを草し、八月これを長藩邸の御直目付役八木甚兵衞へ呈出され、續いてこれが手元役中井次郎右衞門の手に渡り、遂に藩主の覽に及び、當役浦靱負に下さるゝに至つたのである。この建議は相當長文のものであり、有罪脫籍の身分としてはあまりにも大膽なもので、當時かくの如き意見書は上を敬するの念を失する非禮のものであるとして松陰嚴罰すべしとの論さへもあつたのである。松陰先生自らも死に價する決意覺悟のもとに呈上されたものであつて、松陰先生生涯の例の用猛（註　松陰先生は一生の中に國事のために二十一回猛擧をあると云つてゐられる信念的勇猛活動を指す。野山文稿中に二十一回猛士說あり）の一つに數へてゐられる程のものである。松陰先生が國家のため、衷心外夷の禍害を慨憂せられ、日夜苦慮究覈された、やむにやまれぬ慨世苦言の吐露建白書であるから、その大體をこゝに抄錄することにする。昭和現代の國狀と對比して靜思一番、篤と胸に手を置いて考へて見たいものである。

將及私言

謹按、外夷の患所二由來一久し、固非レ始二于今日一也、然今般亞美理駕夷の事、實に目前の急、乃萬世之患也、（註　現時の日米國交の急迫せる現狀を考ふるがよい。この一句實に適切に胸に響くではあるまいか。日本の發展を策する以上は、一度は必ず米國と干戈を交へねばならぬ）六月三日、夷船浦港に來りしより、日夜疾走し、彼地に至り、其狀態を察するに、輕蔑侮慢、實に不レ堪二見聞一事共なり（註　事毎に日本を輕侮して當りちらす米國の態度を見るがよい。近時に於ても移民問題・通商條約破棄・資金凍結令等皆それである。而かもこれは嘉永以來のことであつて、この歷史的輕侮感念を打破しなければ日米國交の改善は出來ない。物には自ら限度がある。日本の眞の國力を彼れに徹底的に知らしむることが日米國交の第一義である。これは日米戰爭の外にはない）然るに戰爭に及ばざるは、幕府の令、夷の輕蔑侮慢を甘んじ、專ら、事穩便を主とせし故也（註　現時の日米外交々渉を見るがよい。滿洲事變以來近衞メセージに至る迄、事皆然りである。これほど媚態交渉はあるまい。これほど退嬰屈辱外交はあるまい。松陰先生は百年前に於て既にかく觀察奪めて居られる。現時廟堂の諸公、果して如何の感

やある。日米開戰はいまの中が日本に有利ぢや）不レ然、今已に戰爭に及ぶこと久からん、然れども往事は姑置く、夷人幕府に上る書を觀るに、和友通商、買二煤炭食物一、請二南境一港一等の事件、一として許允せらるべきものなし、夷等來春には答書を取りに來らんに、到レ願一も無二許允一時は、彼豈徒然として歸らん哉、然れば來春には必發二一戰一に及ぶべし（註　米國はいつも恫喝と戰爭とでやつて來る。いまの海洋自由や太平洋問題もそれである。而かも彼れ果して戰ひ得るや否や、米國々內狀勢を見るがよい。やつてみれば、思つたより樂で勝ち目は十分ぢや）然るに太平の氣習として戰は萬代の後迄もなきことの樣に思ふもの多し、豈非二可レ嘆之甚一哉（註　現代の國民果して如何、僥倖的日米好轉を夢みつゝ。ベン〳〵だら〳〵とひきずられて行きつゝあるではないか、殘念々々）今謹按、來春迄僅に五六月の間なれば、其際に乘じ嘗レ膽坐レ薪の思をなし、君臣上下一體と成て備をなすに非ずんば、我太平連綿の體を以て、彼の百錬千磨の夷と戰ふこと難かるべし（臥藏嘗膽、上下一心の國內體制の急速なる整備を說いてゐられる。現代に於てもまたまさに然りである）若不レ然して安然涉レ日時は、不レ可レ追の悔に及ぶべくと（註　今に於て敢然南進政策を決行するにあらざれば、またまさにこの悔あるべし）窃に爲二國家一奉二痛心一也、故に忌諱を憚らず、要言の罪を避けず（註　現時この種忠諫の士を望むや切なり）當今の急務條を論列する也。

大　義

普天之下莫レ非二王土一。率海之濱莫レ非二王臣一。此大義は聖經の明訓孰か知らざらん（註　現代國民皆よくこの語を考へてくれたまへ。日本の眞の姿はまさにこゝぢや）然るに近時一種の可レ憎俗論あり、云く、江戸は幕府の地なれば、御旗本及御譜代、御家門の諸藩こそ力を盡さるべし、國主の列藩は各其本國を重ずべきことなれば、不二必盡二力於江戸一して可なりと（註　當時日本の國も、こんなものであつたか、實に情けない話である）嗚呼、此輩唯幕府を敬重することを知らざるのみならず、實に天下の大義に暗きものと云ふべし、夫れ本國の重んずべき固なり、然れども天下は天朝の天下にして、乃天下の天下也、幕府の私有に非らず、故に天下の內、何れにても外夷の侮りを受けば、幕府固當レ率二天下諸侯一清二天下恥辱一。以て天朝の宸襟を慰め奉るべし（註　百年前に於ける封建時代の國家觀念・國民思想といふものはこんなものであつたか、實に云ふも恥しい。いまは天朝に忠勤を誓はざるものは一人もない。實に雖有々々、つけても松陰先生の言や實に日月と光を爭ふといふべきである）方二是時一、普天率土の人、如何で可レ不レ盡レ力哉、尙何ぞ本國他國を擇ぶに暇あら

んや、況や、江戸は幕府の所レ在、天下諸侯朝覲會同する所なるをや、此義、明白眼著、固不レ俟レ辨、然れども俗論の吸々、動もすれば人聽を惑するに至る、故不レ得レ已此辨に及ぶなり。

聽　政

古は人君聽政と云へば、平明（よあけがた）に朝堂に出で、群臣を坐前に召し、政事を評議し、又臣民訴訟の筋を聽給ふことなり、是を朝に臨むと云、朝を罷るとは、政事終り、臣下退出し、君にも燕居（閑暇あること）し玉ふことなり、吁食（勤勞しておそく食事すること）など云ふは、朝廷の政事を勤め、食時に後れ玉ふことなり、故に古へは政停滯することなし、後世は不レ然、人君深營中に在りて、朝野には臣下のみ評議し、論定まる上にて、僅に君聽に達す、是を伺ひと云、是より人君賢なりと雖も、假にも吁食などと云ふことなく、權柄を擧て之を權家に授くるに至る（吏僚政治には此の弊多し最も謹しむべきなり）然れども平時は是にて尚可なり、今日に至りては決して如レ此にては議論の成ること難かるべし、故に窃に按ずるに、君公每日辰時より午後に至るまで、御書院へ御出座遊され、大臣以下執政の臣は悉く君前にて官務を處置し、外臣も更番して君前に侍り（註　松陰先生は平時と非常時とを判然と區別してゐられる。そして暗に廟堂の諸公を戒めてゐられる）扨群臣へ上書請對を許され、上書あれば卽君前にて披封し衆議にかけ、然後、大臣に付して是を行はさしむ、或又上書したるものを召出し、坐を賜ひ、其議論を心の儘に陳ずることを得せしむ（註　聖上補弼の重臣たるもの、此句最も意を用ゆべき也）總て大事を擧行時は必ず衆議歸一の所を用ふべし（註　これが松陰先生建白の眼目である）是れ政の先著なり。

納　諫

近來直諫の風掃レ地こと、衰季（衰世といふに同じ）の光景實に可レ嘆の想なり、宜しく急に令を內外の臣に下し、言路を聞き度ことなり、若上言し度事ありと云ふものあれば、深更にても必ず出座遊ばされ、其言を聞玉ふべし、（註　現時尙言語閉塞の弊なしとせず、殊に官僚政治につきものなり。時に言を挾めば獨善的に非國民と呼ばれ、時世を解せざる不忠の臣と罵らる。然れども忠誠直練の言は却つて草莽の野人にあり）然れども直諫は一番鎗よりも難きこと、古より已に然り、況方今直諫掃地の際に當て、如何ばかり、上、直諫を求むるの意切なりとも、尙人々口を箝みて面從すること必せり、故に人君深く玆に致レ思給ふへきことなり。（註　いまや國內體制整備の眼目は統制經濟の完遂にあり。然るに實業界方面に於て未だこの面從の弊なしとせず、爲政者たるもの大に意を用ふべき也）

飭内臣親外臣

内臣外臣固り一體なれば分つべき理なし、然るに太平の弊、内臣は日に益柔媚を以て君側に進み、寵遇を受、外臣は日に疎くして、遂に内外相分れ、外臣は内臣に交はるを恥ぢ、内臣は外臣に交を賤むに至る、實に國家の一大患也（註　當今此の弊なきものゝ如し。然れども廟堂の諸公に於て議論主張左右に分れて往々抗爭あるを聞く。殊に重臣に於て意合はずして議論の統一を缺くと、國家の不幸これより大なるはなし）故に當今の急務、内臣は特に戒飭し、文武の藝を勤勵せしむべし、又外臣にても、文武の藝に長ずる者は、數々引見して、其優劣を比較し、又有レ所レ欲レ言者をは、坐を賜て導き言はしむべし、是れ内外一致にするの道なり。

明四目達四聰

明四目、達四聰は古聖の明訓也、而して其道二あり、天下の賢能に交り、天下の書籍を讀むに過ぎず、然れども、書籍は汗牛充棟にて、固より事務に切要ならざるものあり、何如で人君政務の繁なる、何ぞ悉く是を修むるに暇あらんや、但明國體審君職養土愛民。内。繹近代賢主之政跡。外索妖賊動靜之情狀而已。此六大事を本とせば、他の小節目は自らの

之に從ふべし（註　政治の要諦悉く之に盡く、其一を缺くも善政を布くは至難なり。爲政者たるもの深く勘考すべきなり。殊に統制治下に於て最も然りとなす）窃に按ずるに、挽近人材掃レ地と雖も、天下の士、大半江戸に集り居る故に、長を取り短を略し、以て待レ之時は、絶て其人なきに非ず（註　民間の人材登用を以て然りとなす。殊に戰時治下の非常時に於て最も然りとなす。百年前に於ける松陰先生の言一々適中す。これ松陰先生の生命が永遠に不朽たる所以なり）故に君公自ら尊嚴の體を下し、此輩と朋友の交を締ひ給んこと、實に深く仰ぎ冀ふ所なり、尋常俗吏は目前の流例死法に泥み、古訓に暗きもの故、此事をば異論と云ふべけれども、恐多くも洞春公（毛利元就）は嚴島にては、窃に山本勘助に會面し給ひ、雲州にては、京醫道三に政道の得失を上言せしめ給ひし等傳說を承及べり、有志之君、千古一道、要明レ目達レ聰に歸すると、窃に感嘆し奉る所なり。

砲銃

砲銃は小技藝なり、隊を整へ、陣を張り、分合進退して戰をなすは大術なり、故に小技藝に泥み、大術に暗きは必敗の道なり、本邦の砲術も強て是を却くるには非れども、其術多くは技藝家言にして、未だ兵家の論言を經ざるものなれば、一概に用ひ難し、西洋法に至つては常に是

を實戰に施す故に、一門砲一口銃の論、其精妙を極むるのみならず、戰をなすの大術に至て、大に不レ能レ不レ然ものあり（註　松陰先生は頑迷なる和流者にあらず、大に西洋陣法を取り入るべしとされてゐる。和魂洋術、これが先生の持論である。松陰先生が單なる排外者流にあらざりしを知るに足る）故に大砲小銃共に西洋の器械節制に倣ひ、日々操演をなすべし（註　松陰先生の學問は實學であり、先生はその實行者であつた。砲技が全く一つの熟練であることはいまの策戰術に於ても同樣である）今日の事勢甚急にして猶豫狐疑すべきに非ず、其得失の如きは非二筆紙所一能悉一宜四急召下通二其術一者上試二諸操場一也。

船　艦

船艦の制、西洋に倣ふの便なることは、諸家の說、累々なり、然れども、終未レ有下公然用二其說一者上、或は其志ありて未レ果、或果すも未二公然一、今般切に夷の計何れに出るやと考ふるに、若及二戰爭一時は、先づ第一に伊豆の諸島を乘取り足留とせんことは、猶三英吉利取二清定海縣一なるべし、夷已に諸島をとり、虛隙あれば、我沿海の人畜を掠め、屋舍を燒き、殊に我糧運の船を要遮して、一艘も浦賀港に入ること能はざらしめんか（註　松陰先生は日に海上權の制覇を思つてゐられる）果して然る時は、江戸の騷擾如何ぞや、夷等乘二此時一再び前請を申せば、國家の大體、華夷の名分を知らざるもの、動すれば一時權宜の策に託し、國體を屈し和議をなさん抔いふに可レ及も不レ可レ量、實に可二寒心一事に非ずや（註　松陰先生は百年前に於て既に今日の經濟封鎖に言及せられ、又國民思想の統一、デマの恐るべきこと警告してゐられる。驚くべき識見ではあるまいか）方二此時一堅艦の夷人を制するに足るものを製し、糧運に支りなく、又應援に便ある如くなさずんば、何以爲レ守哉、因て恐多くも窃に念を勞し一策を得たり、當今の勢、如何にも列藩力を協するに非れば、兎角事成らざるべし（註　國內統一を先着としてゐられる）故に仙臺・會津・加（賀）・越（前）・尾（張）・勢（伊）・肥（後）・薩（摩）等の諸藩侯と商議遊され、水府老公・福山閣老（阿部）へ其事を面議遊され、或は蘭人に命じて艦を貢せしめ、又は工匠に命じて新に製造し、並に江戸及び各藩にて、盛に水操を與すことを許允ある如くあり度ことと、上は恐多くも天朝幕府の御爲、下は六十六國生民の爲めに希願の心默止し難く奉レ存候也（註　松陰先生は軍備の擴充、殊に海軍の强化を力說して居られる）然らずんば天下の事如何が結局せんか、未だ知るべからざるなり。

馬法

馬兵の戰に益ある大なり、然れども馬は物に驚き易きものなれば、常に善く是を調練せざれば、徒に無なきのみならず、其害となるも亦甚し、（中略）人馬相親、然後可レ使也と云ふ如き、一々實に其事を行ふべし、西洋諸國、專ら騎兵を用ひ、戰に大利を得ることとみゆ（註　松陰先生は敵の長所を採つて逆用せんと念願されてゐる。現時の戰法に於ても往々新兵器等に於て見る所なり）今眞に是を調練するに至ては、其法亦我に行ふべきもの多かるべし、宜しく其術に長ずるものを撰び大に騎操を興すべし、此の事亦不レ可レ不レ急也。

至誠

窃に嘗て聖經賢傳の大旨を窺ふに、天道も君學も、一の誠の字の外なし、而して誠の一字、中庸尤も明に之を洗發す、謹て其議を考ふるに、三大義あり、一曰實也、二曰一也、三曰久也、前に論列せる數件に就て是を論ずるに、實とは虚の反對にして、卽ち王臣王士の大義に原き、聽レ政。納レ諫。飭二内臣一。親二外臣一。明二四目一。達二四聰一。及砲銃。船艦。馬法等の事を虚文空論となさず、卽ち今日より實に行ふこと也（註　これが松陰先生の眼目である。實心實行が出來なければ凡百の名論卓説も、これ皆悉く虚であつて、三文の價もないとされてゐる。現代の政治果して如何）古人所レ謂以二實心一行二實事一。是也。一とは二三の反對にして、當今の事務、諺に所謂師を見て矢を矯ものにして、僅に五六ケ月計の間に、數百年來昇平に習ひ、干戈を見ざるの士民を調練して、精兵となさんとすることなれば、此事のみに專一にして、造次顚沛も是に於てし、他事を交へざるにあらざれば不可なり、政に聽レ政納レ諫の餘、小暇あれば、或は庭上に出て、臣下の武藝を閲し、或は兵庫に入て器械を檢し、靜夜閑晝には中外の臣を召し、政道兵法を推究し、其他詩酒の宴、花月の會にも、思ひ必ず玆に離れざる如くするを一と云ふべし（註　これ程の誠意熱心がなければ何事も出來るものではない。國家目的に對しては、文句もなければ議論もない。只上下一心一體で勇猛驀進する。そこにすべてのものが速成さるゝわけである。殊に現時の國際狀勢に對應するには、まさにこの外はあるまい）久とは無レ息ことにて、武備は固より至難至大のことなれば、一朝一夕に成就すべきに非ず、故に實と一とを作輟なく、幾久しく行ふこと、是久也（註　これが實と一との結びである。長期聖戰もこれで始めて出來るものである）凡そ事、實ならざれば一ならず、久からず、故に合せて是を誠と云ふ、然れども是を行ふこと更に一工夫あり、易簡是也（註　この二字篤と味ふべ

きなり）昇平の久しき、禮文繁褥に過ぎ（註　百年前松陰先生は現代時勢のあることを豫言されてゐるかの感がある）君臣の間、天淵の隔絶をなし、人君、下を召見し給ひ、又出て臣下に臨み給ふも、夫々繁苛の格式ありて、上情下通し、下情上達（註　現時大政翼賛運動などと云つて騒ぎ立てゐるが、先生は既に論及指針を與へて居られる。松陰先生の議論文獻が千古に不朽不滅の所以も玆にある。また先生は時代の如何を論ぜず新しき指針を與へて居られる）すること甚難し、此弊一洗せされば、誠字未レ可レ行、易繫辭曰、易則易レ知、簡則易レ從、易レ知則有レ親、易レ從則有レ功、有レ親則可レ久、有レ功則可レ大、可レ久則賢人之德可レ大、賢人文業易簡、而天下之理得矣。

右數條所レ論、皆今日手を下す所に就て是を陳ず、臨時の措置、國家の大計の如きは、君相の方寸にあることにて、素より亦一定の論あるべければ、必しも呶々せず、但小智の及ぶ所を以て、窃に其大抵を論ずるに三計あり、夫れ有志の諸侯を糾し、器械操練の諸務を精研し、君公自ら諸侯の先となり、逆夷を掃蕩し玉ふは上計なるべし、力を蓄へ兵を練り、諸侯の戰大利あれば則ち已む、若し諸侯利を失ふ時は、徐に起て是を收復し、諸侯の殿たるは中計なり、進ては諸侯の先たらず、退ては諸侯の殿たらず、一戰利なく、辛くして國に歸り、

然る後、重て義兵を起すは下計たるべし、此三計のもの、天朝幕府の爲めに忠を盡すことは一なれども、功を立ること異同あれば、豫め撰ぶ所を不レ可レ不レ知也、抑亦窃に内外の狀態を熟察するに、天下の事勢、必ず一變するに至るべし、甚だ過慮に似たれども、一變後の措置、亦豫め論定せずんばあるべからず、然れども今未三敢盡レ言也。

と、吾が熱誠默止出來ず、我が微衷君公に達せば死も尙恐るゝ所にあらずとされたる松陰先生の至誠憂國の烈々たる熱情が紙上に溢れ、躍如として人心を動さずには措かないものがある。而かも天下の一大變事が來る、その一變後の措置をも豫め講じておかなければならぬと警告されてゐる。果せるかな、幕末の尊攘倒幕といふ大變事が起つて來た。續いて黎明維新の新日本が出來て來た。遂に世界の昭和日本がいま建設中であるではないか。

思へば、これ等の事案ほど當時適切有效なる時事對策はなかつたことであつたらうと共に、百年後に於ける現時の昭和非常時日本のためにも亦これ以上の國策はないのである。殊に一死覺悟の上で、烈々たるあの熱意、衷心より迸り出でたるあの至誠の一念、諄々と說き來つてゐられる憂國の切情、血涙共に下るが如き警世の諫言、かくの如き痛憤憂國の烈士を得たる幕末日本が幸

なりしが如く、昭和現代に於てもこの種直諫忠誠の士を望むや實に切なるものがある。

更に松陰先生は、この『將及私言』の後に、序言に代へて「感二時事一作」と題して左の一詩を添へてゐられる。

墨奴遞書向レ我期。　墨奴（米人）の遞書（米國の書を送り通商互市を求むること）我に向つて期す
國家安危正是時。　國家の安危、正に是の時
普天率土孰非二臣一與二王土一。　普天率土（普天の下率土の濱）孰か臣と王土とに非ざらんや
協レ力誓當レ卻二狡夷一。　力を協せ、誓つて當に狡夷を卻くべし
如今上下浴二至治一。　如今、上下、至治（聖治太平）に浴し
紀綱稍弛弊沓至。　紀綱稍弛みて、弊（害）沓り至る
第一可レ憂是壅蔽。　第一に憂ふべきは、是れ壅蔽（上下の意志が塞つて通ぜざること）
臨レ朝聽レ政久廢棄。　朝（廷）に臨み、政を聽くこと、久しく廢棄せらる
大臣悠々不レ恤レ事。　大臣は悠々として、事を恤ひず
小臣營々徒謀レ利。　小臣は營々として、徒に利を謀る
外臣含レ憤胸鬱渤。　外臣は憤を含みて、胸鬱渤たり
內臣承レ顏色柔媚。　內臣は顏を承けて（上役の顏色を窺ふこと）色柔媚たり
此弊一洗備始修。　此の弊一洗されて、備始めて修すべく
造レ砲購レ艦非レ無レ謀。　砲を造り艦を購ふこと、謀なきに非らず
洋人陣法稱二絕妙一。　洋人の陣法、絕妙と稱せられ
器械新工絕二匹儔一。　器械の新工、匹儔（比類なし）を絕つ
艦兮砲兮最要物。　艦や砲や最要の物たり
操演但須レ及二此秋一。　操演、但須く此の秋に及ぶべし
古云達二四聰一明二四目一。　古に云ふ、四聰を達し　四目を明にすと
臣是股肱與二心腹一。　臣は是れ股肱と心腹となり
平明視レ朝會二群臣一。　平明（早朝のこと）朝（政）を視て、群臣を會せしめ
都兪吁咈要二輯睦一。　都兪吁咈・輯睦するを要す
不レ然雖二砲利一矣雖二艦堅一。　然らざれば砲利なりと雖も、艦堅しと雖も

皮之不レ存毛安屬。　皮の存せずんば、毛安んぞ屬かんや

君不レ聞碧蹄館下諸侯功。　君聞かずや、碧蹄館下、諸侯の功

佐公軍鋒獨稱レ雄。　佐公の軍鋒、獨り雄なりと稱す

我武當年揚二異域一。　我が武、當年異域（朝鮮をさす）に揚がる

努力君勿レ忝二先公一。　努力して、君、先公を忝しむること勿れ

註　普天之下率土之濱　國土廣く臣民の多きをいふ、詩經に『普天之下、莫レ非二王土一。率土之濱、莫レ非二王臣一。』

四聰四明　君主たるものはよく耳目を開きて天下の賢者と交はり、また天下の書を讀みて民情を明にすること。（書經）

都兪吁咈　都は嘆美する聲、兪は承諾同意を表する詞、吁は驚き怪む聲、咈は否認する詞、即ち君臣互に意見を交へ相議論を盡くして、輯睦し以て政道を明にすること。

毛安屬　皮の存せずして毛のあるべき筋合のなきが如く、本を失へば枝葉の問題は演ずるの價値なきと同樣なりとの意。

佐公云々　豐公朝鮮征伐の際、碧蹄館の役に於て小早川隆景公（官、左衞門佐たりし故にかくはいふ）の武勳を云ひたるもの。

と、かくの如く松陰先生は米國の橫暴を悲憤し、紀綱の弛廢を慨嘆せられ、此際上下一致して舊弊を一洗し、廟堂諸公は四聰四目を明にして諸政に當るべく、國內體制の整備統一と共に軍備の强化を高唱されてゐるのである。

元來松陰先生の持論といふものは、善政を布かんと欲するなれば、先づ第一に天下の賢材を擧げなればならぬ、これには人君たるものが自ら明智達識でなければならぬ、そこで人君たるものは諫言を容るゝは勿論、常に視聽（物を視、人言をよく聞くこと）を廣く深くして衆心民情を察知把握し、下情に通じて民衆の嚮ふところを知ることが大切である、然る後、適材適所に選用すべきであるとされてゐた。そして、それには古聖賢のなせるが如く、『廣く視聽を開きて、賢人を求め、以て自らを輔け、また直言の路を廣む』とか、或は『一饋（一食すること）にして十たび起ち、一沐に三たび髮を握り（食事の時に十たびも立ち、また入浴時に三度も髮をつかみて世人の訴をきく）以て天下の民を勞はれり』といふが如き至誠と熱意とがなければならぬとされてゐた。それに當時

の非常事態に對し即應するには、是非共軍備の擴充强化、殊に海軍力の充溢を計つて擧國一致、外敵に當るの外はないとされてゐたのであつて、この『將及私言』も、要は松陰先生平常の主義主張を素直に陳述されて、その實行實現を期せんとされたものである。

急務條議

松陰先生は、米使ペルリ來航以來、彼等の恫喝脅迫によつて、和親通商を强要されては、それは國權を傷けるものであり、國家の體面を失するものであるとして、日夜痛心悲憤されてゐたのであるが、さりとて徒に憂憤苦慮してゐたとて仕方がない。そこで先生は曰く『一身のことは不レ及レ申、父祖累代國家之御厚恩を奉レ蒙たる事に御座候得ば、たとへ御家人被二召放一候とも、責而一二條なり共御爲筋に可二相成一儀申出度存念』で、罪死覺悟の上で『將及私言』を呈上されたものである。玆に松陰先生の純眞な至誠が溢れてゐる。あのやむにやまれぬ大和男子らしい氣魄が躍つてゐる。而し先生は尙これだけでは氣がすまない、何んとかして一刻も早く戰備を整へなければならぬとして『將及私言』の主旨要目に基き、急速に實行言現が必要なりとされて、その具體的着手事項を逐次列記されたものが、即ちその『急務條議』である。松陰先生は飽迄純眞で眞面目であつた。そして熱意と勇氣と至誠とで眞心實踐へと、細々に具體的實行案とも云ふべきものを添へてゐられる。政治論や建白書などといふものは、往々にして大體論となり、無責任な放論となり勝ちなものである。而るに松陰先生は徹底的實行可能と信ぜられた、その具體案を示してゐられるのである。かうした處にも松陰先生の至誠精神がよく光を放つてゐるのであつて、翼贊政治を絶叫してゐる昭和現代人のまさに師表ともいふべきものである。

急務條議（要旨）

一、君侯の德川齊昭（水戸）に交はり、其臣藤田虎之助（東湖）・戸田銀次郎（蓬軒）・原田兵介（環翠）・山國喜八郎（止戈堂）等の有志に長藩執政の深く結納すること。

二、君侯は固より、諸臣もまた態本藩主細川越中守慶順と互に其交りを厚くすること。

三、長藩執政のものは、廣く四方の士に交はつて、天下の事に通ずること。佐久間修理（象山）藤森恭助（弘庵）・羽倉外記（簡堂）・古賀彌一郎（茶溪）は皆名家であつて、これと共に櫻任藏（眞金）・齋藤彌九郎（篤信齋）・松浦竹四郎（北海）等に交はつて其益がある。安井仲平（息軒）

鹽谷甲藏（宕陰）・杉田成卿（梅里）は各一家をなし、其他にも求むれば名士は多々あるのである。

四、長藩士の員數に應じて、野戰砲と海岸砲とを備ふること。

五、長藩士の元氣あるものを選びて、佐久間修理・下曾根金三郎等につかしめ、其西洋砲銃の術を學ばしむること。

六、長藩足輕以下のものに、すべて洋式の步兵操練をなさしむること。

七、江戸長藩邸の諸士を精選し、老幼衰弱のものを悉く歸國せしめ、其他はみな步兵隊に入らしむること。

九、騎馬の調習が最も急務である。君侯以下の騎馬が大砲の音を聞いて駭愕し、また軍隊を見て奔逸することなからしむること。

十、臺場の築造を精研し、足輕・中間にも、その技を敎ゆべきである。野戰にも往々急速に臺場を築造することがあるからである。

十一、西洋製造の軍艦二隻を速に購求すべきである。

十二、品川海にて、速に士卒に水練をなさしむべきこと。漁船・荷船なども、兵員に應じて之を準備すべきこと。

十三、麻布・葛飾の長藩兩邸にて、硝子（硝酸鹽）の製造を開始すべきこと。長藩には硝子の貯蓄多量なるやうに聞く、江戸には常に之が不足なるを以て、餘りあれば國許より輸送して賣却するは、皇國の强みとなり益あることである。

と記し、これに『呉れ〳〵も平生の心事此外に無之事』と書き加へられ、一介書生の身分を以て、廟堂へ向つて事務を論議し、直諫の先着をした次第であるが、若しこれで死を得るなれば本懷であるとされてゐるのであつて、松陰先生の覺悟雄志のほど知るべきである。

海戰策・急務策・急務則

已にして安政元年正月十四日米艦は復び來り、前年要求の回答を求め、事態は全く急迫を告げて最惡の場合となつて來た。松陰先生は威風堂々並列淀泊してゐる米船を親しく目睹されて憤懣の情堪へ難きものがあつた。都下人心の動搖不甲斐なさをも慨嘆されたのである。

當時武器兵備は未だ整つてをらない。士卒の調練もまだ十分には出來てをらない。然しこの場合、逡巡遲疑はして居られない。窮すれば爲すべき對策は自ら出來て來る。かくなる上は最早肉彈で行くの外はないと感念されたやうであつた。

亞墨奴が歐羅と約し來るとも備のあらば何か恐れん。

備とは艦と礮（大砲）との謂ならず吾敷島の大和魂。

で、必ず勝つてみせると論述され、來島又兵衛とも謀つて、御直目付役林主税を經て、藩主に上書參考に供せられたものが、即ちこの海戰策である。

今般、亞墨利加夷の軍艦七隻江戸近海に繫泊す、其情固より狡黠にして、其狀亦頗る猖獗也、理、宜しく天下の大義を伸べて、逆夷の罪を征討すべし、然るに、議者往々器械未だ備らず、士卒未だ練れざるを以て辭とし、因循苟且、一日の安を偷まんと欲す、何ぞ其惑へるや、凡今日の事、中國夷狄の大義を論ずる外、他は言ふに足らず、然れども兵法は先勝而後求レ戰といへば、大義の在る所にても、勝算なくして妄に戰ふは、猪武者のなす所にして、兵隊の貴ぶ所に非ず、但今日の事、大義の當さに戰ふべきのみにあらず、兵家の勝算も亦顯然たり、何を憚りて戰はざるや、夫れ器械の備らざる、士卒の練れざる、固より用兵の大害なり、然れとも用兵に最も關係するものは地形にしくはなし、今、地形は吾其利を得たり、假令器械未だ備らず、士卒未だ練れずとも、何ぞ憂ふるに足ん、況や兵械日を追て備るべく、士卒日を追て練るべし、試に今の地形に依り、今の士卒に今の器械を授けて、百戰百勝する術を論ぜん、今の戰法は、之を先ずるに海戰を以てし、之を終ふるに陸戰を以てするに若くはなし、海戰の法は相模・上總・安房等の海濱にて、漁船中の最も堅實快疾なるもの五十隻計に、竟意の舸子を合せ雇ひ、士卒に各々小銃一口を授けて、每船十名計を乘せ、就中大砲を善する者を撰み、砲一門に打手五名を添へ、船に乘込ませ、夜陰に乘じて進擊する（中略）陸戰の法は安に海濱に兵を布列せず、海より五六町十町も退き、山林を右背にし田澤を前左にし、高きを負ひ低きに臨むの好所に於て、敵を引ひよせ擊破する。云々（要旨）。

そして夜陰に乘じ夷船に近づき小銃大砲を亂射し、また火を放ち更に拔刀切り込むと云ふ、實に壯烈勇敢なものであつて、大義を振りかざさしての肉彈戰であり、魂の戰ひである『坐ながら敗亡の邦となり、臭を千歲の後に傳んと痛恨の至りに堪ゆることなし』といつて居らるゝが如

く、一國城を枕に討死の覺悟で乘り込むといふのであつた。進歩的科學的な夷船に對し、假裝漁船で對戰せんとするが如きは、如何にも無謀の仕打であつて、今より云へば兒戲に類するが如きやうではあるが、外夷の進歩科學的威力に對し、魂の力で飛びかゝり碎けて行くといつた、この壯烈無比の大和魂こそ實に祖國日本の寶であり、これを鞭打つて抗戰せんとされたところに、松陰先生の兵學者としての識見があり、憂國志士としての雄々しい魂が躍つてゐる。

更に天下の首領たる京師の守護の完整を論じ、上國と江戸との防備さへ完全せしめ得るなれば、區々たる海寇の如きは別に恐るるに足らず、且つ畿内諸藩に陸戰を訓練せしめ、攝海若狹の海防を嚴にし、これを機會に、皇道を明にし、國體を確立せんことの急務を論じられたものが『急務策一則』であつて

草莽の愚夫、窃に古今を達觀し、恭しく惟ふに、皇朝古より民を以て基を建て、四夷百蠻をして懾服馴擾せしむること、其國體固より然り、然るに中世以還、武臣權を偷み、皇道明ならず、國體建たず、近時に至り、區々の海賊の爲めに輕蔑侮慢を受くること、是れ何事ぞや、今夏、浦賀の事、實に開闢已來未曾有の國辱なるに、更に又長崎の事起れり、凡そ皇國に生れたる者、何如にもして皇朝の武、古に復することを思べきことならずや（註　これが松陰先生海外雄飛の根本理念であり先生の殉國精神もまさに玆にある）夫れ皇國は四面皆海にして、所として賊衝とならざるはなし、就中江戸は征夷府の在る所にして、賊の最も目を付くべけれども、天下の諸侯の幕下に往屬したれば、姑く措く、第一、恐多く思はるゝは上國なり（註　松陰先生が天朝の宸襟を安め奉らむとされたのも全く玆にある。先生が血泣して天朝に身を捧げんとされたのも全くこゝぢや）夫れ京師は天下の首領なれば、其近國の警衛たるべき諸國を考ふるに、紀伊の國は南海に斗出し、海岸も甚手廣きに、其國不幸にして内亂あり、恃むに足らず、若狹の國は北海の衞たれども、小諸侯なれば武備のこと覺束なし、特に慮るべきは大坂なり、淡島と和泉、紀伊の國、狹しと雖も、本邦の大船自由に通行すれば、異船の闖入も亦難かるまじ、且和泉の地は甚平坦にて、夷の野戰砲車も自由に運搬すべければ、紀泉の境より賊一隊を上陸せしめ、水陸並に進まば、無人の境に入る如くにて、直に岸和田に達すべし、吾曾て岸和田に於て、其士夫に交るに、彼藩の輿論には、異船決して此内海には入らず、海防の事は講ずるに及ばず、大砲小銃は習はすことを用ひずとのことなれば、何如で岸和田の一城を以て水陸並進の逆賊を禦くことを得んや、岸和田既に陷

らば、一舉にして大坂城を奪んこと、一二日の間にあり、又淡路島を奪ひ、城を築き砲を安んじ、然る後大坂の財穀に因て、直に天朝を上犯せば、天下の大本動搖せんこと、由々敷一大事にて（註、松陰先生は常にかうした經濟封鎖乃至は兵糧問題を論議されてゐることを忘れてはならぬ）天地も之が爲に晦冥否塞し、四海廣しと雖も、億兆の民庶何れの所に足を立つることを得んや、次には中國四國西國の諸侯、江戸に在るもの中路を絶たれ、何如すべきや、因て思ふに、和泉・紀伊・淡路・若狭に檄を傳へ、海防を嚴にし、畿内の諸藩には陸戰の略を演習せしめ、又其人材を網羅して、相共に心を合せ力を協へ、聲勢連絡せしめ、且中國・四國・西國の諸侯は士卒一隊宛大坂に備へしめ、上は　天朝を守護し、下は江戸に一戰の模樣に應じ助救せしむべし、此等の事件、上國目前の急務なるべし（中略）夫れ上國と江戸との武備完全せば、四方の諸藩も漸次に相尋で備を成し、區々海賊を懲創するに於て、何の難きことあらん、推て是を進めば、皇道を明にし、國體を建て、皇朝の民、古に復するに至ん、是吾が仰で在位の君子に望むなり。

とあり、象山さへも『議論剴切、足レ見敏妙之材』と賞賛してゐるのである。その後、松陰先生は下田事件に失敗されて、安政元年九月江戸を發し、萩への檻送途上、露船が攝海に入つたといふ報を得られて痛心感慨のあまり

去年策二急務一。　去年急務を策し
于レ今不レ見レ收。　今に收められず
忽聞道上語。　忽ち聞く、道上の語
驚嘆不レ堪レ憂。　驚嘆す、憂に堪へず

と憂國の血涙を袖にしてゐられるやうな次第である。

續いてまた松陰先生は、伊勢の山田と尾張の熱田とは神器のある所であつて、外夷に窺覦されては相ならぬ聖地である。京師に次いで武備を嚴にしなければならぬ。そこで兩國の神官等を訓練して隊伍を整へ、防備の任に當らしむべきであると論じてゐられるのが『急務則一則』であつて

伊勢の山田は尾張の熱田と共に、神器の在る所にして、京師に次で嚴に武備を設くべきの地なり、然れども熱田は大藩尾州の守衛あるべく、且海灣の凹所にあたる、姑く論ぜず、山田は然らず、其地南海に張出し賊衝に當る、奉行あれども小祿なれば、武備を談ずるに足らず、其近

國島羽領あり、然ども小藩なれば深く賴むに足らず、獨り津藩あるのみ、然れども津より一門の砲一名の兵を、彼地に鎭戍することを聞ず、津より山田に至るまで行程十里、急を聞て馳赴く、事に及ばざること必せり、全體客兵の損、土兵の得は古今の通論なれば、津も鳥羽も強て賴むべきにあらず、去年十一月廿日彼地の奉行山口丹州令を下して云、兩宮神職の輩劍術等修行苦しからずと、蓋し亦土兵を用ゆるに見あるなり（中略）願くは此人に命じ、此地の神職を仰して、此地を防禦せしめたきことなり、兩宮の神職五百人ばかりあるべく、之に砲銃槍刀の技をおしへ、隊伍節制の事をも心得させて置けば、神職は浮屠など丶同日の論にあらず、且神器を守護する爲の神職なれば、守護することは叶ふべし。

伊勢尾張の地は未だ賊の來泊せし例なけれども、海濱の地は所として賊衝ならざるはなし、且浦賀の守備堅固にして敗るべからざれば、賊等直に攻口を轉じて、彼地に取掛るべきは自然の形勢なり、賊の計若し此に出づるとも、他は憂ふるに足らず、但山田熱田の神器、萬々言ふべからざることあるは、神州の神州たる所以を失ひ、天地の晦冥否塞將に是を如何すべきや。

これ等が當時に於ける松陰先生の非常時局對策の一端であり、時難收終の對案の一節であつた。現代人より考へれば、とかくの批判や議論のあるのは勿論免かれないことであらう。然し百年前に於ける幕末日本の當時の文化科學を念頭に畫いて靜に考へて見るがよい。恐らくこれ程敏妙の對策はなかつたことであつたらう。それに大體論や大まかな策論ではなくして、必ず一々具體的實行案を添附されてゐる。如何にも兵家者として、憂國士として、至誠漢として、實行實踐家としての松陰先生の眞面目が躍如として迫り來りの感がある。而かも松陰先生は京都と伊勢と熱田とを中心眼目としてゐられる。そして魂の力での體當り戰術で行くとされてゐる。こゝに尊攘殉國烈士たる松陰先生の精神が末代までの日本人を動かす神秘の靈魂力が輝いてゐる。

更に松陰先生は對外國策の基調を人心の歸一統合と國內體制の整備とを先決問題とされ、これと關連して軍備殊に海軍の擴充强化を主張されてゐる。のみならず、常に糧道の開塞、換言すれば食糧の確保より延て日常生活の安定等に關しては特に留意されてゐるのである。これは、わが國海外進展の基調を、國內體制の完備と軍備の擴張とに求められ、そしてこれを大和魂で押し進めて行くといふのであつて、大東亞共榮圈確立を重大使命として、いまや聖戰五年の荊棘の道を踏みつゝ進む昭和現代人として、松陰先生所論の一字一句自然に頭の下るを覺ゆると共に、また

湧然として神州男子たるの魂の力が勃起するのを覺ゆるのである。

要するに、松陰先生のかうした上書になつたのも、當時に於ける外交政策が拙劣無恥で、無氣力なるために、獨立國家としての自尊自立を喪失して米國の威壓に屈服しての開國をいたく悲憤されたからである。從つて武力なき外交は到底賴むに足らずとして

癸丑甲寅の際に至りては、已むを得ざるに迫られて之を爲す、固より變通の略ありしに非ざるなり、砲を畏れ、艦を畏るゝの心を以て通信通市の計に出で、顧つて、之を神聖の峻しきを平かにし、狹きを廣くし、遠きを懷くるの大典に附す、是れ僕の扼腕切齒する所以なり、善く戰て而して後に和すべく、善く攻めて而して後に守るべし、今戰ふこと能はずして和を言ひ、攻むること能はずして守を言ふ、章程嚴なりと雖も、約束謹なりと雖も、吾れ滿清と一轍に歸して後已まんのみ。

と云つてゐられる。上古に於ける我が大陸國策に形は似てゐても、その精神氣魄は全く異つてゐる。どうしても早く武備を完成し邊疆の護りを固めて、彼等の屈辱的仕打ちに當らなければならぬと云ふのが根本信念であつた。

海外雄飛の策謀

長崎に於ける露艦搭乘事件

松陰先生は、佐久間象山等同志と共に、日々外夷防禦の對策を討究されてゐた。たま〳〵露國の使節プウチヤーチンが軍艦四隻を率ひて長崎に來り、和親通商を求むるの報が江戸に達したのであつた。彼れが長崎入港は七月十八日（嘉永六年）であつて、その報の江戸に達したのは同月二十八日であつた。幕府はその措置を商議し、八月三日長崎奉行大澤豐後守安宅に命じ、露西亞の國書を受領して速に退去せしめたのであつた。この報を得られたあの一徹熱情な松陰先生としては、最早ジツト默考してゐられよう筈がない。憤然蹶起、海外雄飛の大志を決せられ、窃にこの露艦に投乘して海外出遊を圖策されたのであつた。象山も之を慫慂し、莫逆の交友鳥山新三郎・永島三平（肥後人、名は秀實、號は歸山、志士村松大成の弟）・桂小五郎等もこれに贊したのであつた。

そこで暗に訣別の意を含みて、鎌倉瑞泉寺竹院和尚を訪ね、二日滯在し、九月十五日に江戸に歸へられたのである。

松陰先生は旅行萬端の準備を整へられ、十八日朝桶町の鳥山新三郎の寓居を發せられ、途中象山を訪ねて別れを告げ、品川驛に出で愈々長崎行の壯途に上られたのであるが、その時左の一詩を諸友に示してゐられる。

將二西遊一示二知心諸友一　將に西遊せんとして知心諸友に示す。

名利無レ心二世上一求。　名利、世上に求むるの心なし
一生不レ顧被二人尤一。　一生顧みず、人の尤めを被(蒙)るを
獨悲駑駘酬レ恩計。　獨り悲む、駑駘(にぶき馬の如く才能なきこと)恩に酬ゆるの計
詭遇常爲二君父憂一。　詭遇(常道をふまざること)して常に君父の憂を爲すを

と、今更、別に世上に名利を求むる心はない、他人の誹謗を意に介することもないと、松陰先生は非常な覺悟決心を示してゐられる。然し毎度事志と違ひ、君父の恩義に酬ゆることもなし得ずして、また〳〵君父に憂苦をかけるかと思へば、それのみが氣にかゝつてならないと云つてゐられる至忠至孝の松陰先生の心情、まことに察すべきであると共に、またこの行『嘗、發二江戸一、將二西遊一、是行、有二深密之謀、遠大之略一』といつてゐられる。この深密遠大の謀略想ふべきである。當時、永鳥は

わが友は心ある人よよ津の海の
海の神々守り給へよ

と別れの一首を贈つて、旅程前途の安全を祈つてゐるのである。

當時外夷の傲然たる驕慢を義憤し、これが膺懲と共に邊疆の防備を說き、身を以てこの國難に當らんと論議せるものは敢て象山塾の同志のみではなかつた。苟くも國士有志を以て任ずる憂國慨世の志士に於て、これを口にしないものはなかつた狀態であつた。しかし海外出航の遠大なる謀略を單身實行に移して、一死報國の至誠を致さんと乘り出したものは實に松陰先生只一人であり、群士の先驅であり、當時世人の夢想だもしなかつたところである。玆に松陰猛士の先生たる所以の存する點があつて、この勇猛實行の松陰先生を忘れてはならぬのである。

これより松陰先生は神奈川を過ぎ、箱根を越え、遠江荒井驛（今の新居町）で、肥後の津田山三

郎・河瀬典次に邂逅されて、鎭西方面の狀況を聞知され、また自らは江戸の近狀を報導せられ、二十八日桑名を經て二十九日草津に泊まられたのである。そして十月朔日草津を發し琵琶湖を渡つて大津に達し、京都に入つて梁川星巖を訪ねられたのであつた。

星巖は、かつて江戸に於て佐久間象山と親交を結び、詞壇に於て互に時事を論じてゐたのであるが、當時京都に移り、鴨川畔に住んでゐたのである。そして松陰先生は二日の早朝二條城を拜して、內憂外患交々臻れる當時の國狀に鑑み、皇室の御宸憂と共にその畏れ多き御衰微の御有樣とを思ひめぐらせられて、血涙潸然として左の一詩を賦してゐられるのである。

奉レ拜二鳳闕一。

山河襟帶自然城。　山河襟帶・自然の城
東來無レ不二日憶二神京一。　東來、日として神京を憶はざるはなし
今朝盥嗽拜二鳳闕一。　今朝、盥嗽して、鳳闕を拜し
野人悲泣不レ能レ行。　野人、悲泣して行くこと能はず
上林零落非二復昔一。　上林零落・復た昔に非ず
空有二山河無二變更一。　空しく山河の變更なき有り
聞說今皇聖明德。　聞說く、今皇、聖明の德
敬レ天憐レ民發二至誠一。　天を敬ひ、民を憐み（給ふこと）至誠より發す
鷄鳴乃起親齋戒。　鷄鳴、乃ち起きて親ら齋戒し
祈下掃二妖氛一致二太平一。　妖氛を掃ひて、太平を致さんことを祈り（給ふ）
從來英皇不二世出一。　從來、英皇、世に出で（給は）ず
悠々失レ機今公卿。　悠々、機を失す、今の公卿
安得天詔勅二六師一。　安んぞ天詔を六師に勅して
坐使二皇威被二八紘一。　坐なかり、皇威をして八紘に被らしむるを得ん
人生若レ萍無二定在一。　人生は萍の若く、定在なし
何日重拜二天日明一。　何れの日にか、重ねて天日の明なるを拜せん

と、松陰先生は肅然として無限の感慨を賦してゐられる。京の東山一帶を襟とし、鴨川の流れを帶となし、京師の地は自然の雄大なる城廓をなしてゐる。自分は東上以來（嘉永六年五月江戸着以

來）一日としてこの神京の御樣子を憶はざることはない。今日再び盥で手を洗ひ口をすゝぎて鳳闕（宮域）を拜し奉るを得ては、感極り涙を催して立ち去ることも出來ず、野人悲泣行く能はずである。仰げば上林（宮苑）は荒れ果てゝ復た昔日の俤もなく、無心の山河のみが舊態を存してゐるばかりである。さて仄かに伺ひ奉るに、天子樣には聖明の御德極めて隆く在せられ、天を敬ひ民を憐み給ふこと悉く至誠の御心より出で、毎朝鷄鳴と共に御起床遊されて、御親ら御齋戒に相成り、妖氛（外夷）を打ち掃つて、天下の太平を致さんことを、天神地祇に御祈願遊ばされてゐると承るのである。かゝる英明なる天子樣が、いつの世にも御出でになることは洵に難い所であるのに、今の公卿達は因循姑息何等の爲すこともなく、空しく、悠然と機會を逸しゐるとは、そも何事であらうか、かくの如き狀態であつて、どうして天詔を六師（天子樣の軍隊）に勅し、坐ながらに、皇威をして八紘（四方四隅即ち全世界のこと）に蒙らしむることが出來樣か、人生は萍の如く、定在のあるものではない、さすれば何れの日に於てか歸朝し、再び聖明なる天子樣の御盛德の明なることを拜し得ることが出來樣かと、無量の感慨を悲淚に包みて賦せられたものである。思へば單身海外出遊途上にあられた松陰先生としては、實に萬斛の熱淚に胸も張り裂けんばかりのことであつたらう。（拙著吉田松陰殉國詩歌集詳悉）

これより浪華に下り、難波邦五郎の宅に宿まられ、八日まで舟待ちをして、九日安治川を下つて天保山のもとに泊せられたのである。

泊二浪華一

狂夫未二必不一思レ家。　狂夫（松陰先生）未だ必ずしも、家を思はずんばあらず
爲レ國忘レ家何用レ嗟。　國のために家を忘る、何ぞ嗟を用ひん
中霄夢斷家安在。　中霄夢は斷じ、家いづくにかある
夜雨短蓬泊二浪華一。　夜雨短蓬、浪華に泊す

と切々絶えざる懷鄕の至情と、やみ難き憂國の至誠とを賦してゐられる。これより瀨戸內海を西に高砂（播州）・鞆（備後）・御手洗（安藝）・室津（周防）の諸港を經て、十月十六日、硫黃洋を航して豐後の鶴崎（大分縣鶴崎町）に上陸せられ、これより古武田を經て坂梨（肥後）に宿せられ、十九日熊本に達し坪井（熊本市の東、坪井町）に宿せられたのである。

その時、かねて深交ある宮部鼎藏が訪問して來た。鼎藏は先生を伴ふて橫井平四郎を尋ね、荻

角兵衛がまた來會した。角兵衛は陽明學者である。松陰先生は、この夜は鼎藏の宅に留宿せられ、翌二十一日には矢島源助・莊村助右衛門・國友半右衛門・丸山運介・佐々淳二郎等が先生を訪問して時事を談論してゐる。中にも國友は鼎藏の門人であつて、同門の末松孫太郎等と共に劍術修業のため、是年三月二十七日萩に來て、四月五日に去つたことがある。かくの如く松陰先生は熊本に於て約三周間滯留の上、鼎藏・平四郎等と會晤談論せられ、二十五日午後熊本を發して尾島に出られたが、舟が發しない、二十六日の曉に舟が發し、熊本藩の伴九右衛門・加來傳兵衛等と同乘して島原に至られたのである。

續いて松陰先生は二十七日長崎に達し、濱町に宿まられたのであるが、露艦は既に此月二十三日に揚碇出帆して長崎を去つてゐたのであつた。松陰先生の大志雄略もいまとなつては何等の施すべき手段術策もない。定めし先生も無念やるかたなく、一時は失望落膽されたことであつたらう。僅に三日間滯在して露艦碇泊中の當時の樣子などを聞知されたまでゞあつた。然し一旦決意された以上は、些々たる瑳跌位で喪心屈繞さるゝが如き松陰先生ではなかつた。必ずや潛に思ひを深めて一段と覺悟を固め、捲土重來の勇猛心を振ひ起して來るべき次の機會を思念されたことであつたらう。

此日中村仲亮・高見杏庵等を訪問されたが、何れも不在であつた。仲亮は熊本の人で、杏庵は鼎藏の友人で町醫である。三日滯留の後、十一月朔日に中村と別れて、千々波に宿せられ、二日大湊に宿つてゐられる。二日三日も大湊であつて、この夜佐々と丸山とが來り、五日坪井に歸り六日には熊本同志と面談せられ、更に鼎藏と共に有吉藩老を訪ねてゐられる。八日朝一同と別れて柳川に宿まられ、九日には松崎、十日は青柳、十一日に赤馬關に歸つて伊藤靜齋の宅に宿まられ、十三日萩に歸着されてゐる。當時先生は

一身踪跡幾變更。　一身の踪跡（行動の變轉多きこと）幾變更
難レ免不忠不孝名。　免れ難し、不忠不孝の名
膝下欠レ歡又幾歲。　膝下、歡を欠く、また幾歲
報國微衷何日成。　報國の微衷、何れの日にか成らん
客夜遙々眠不レ得。　客夜、遙々、眠り得ず
孤燈照レ愁滅又明。　孤燈、愁を照して、滅しまた明なり

と賦してゐられる。これが松陰先生のほんとの心情であつたらう。旅窓夜半の夢も結び得らず、免れ難き不忠不孝の名と報國の微衷、何れの日にか成らんやと思ひ亂れてゐられる悲愁を孤燈は定めし明滅照したことであつたらう。

松陰先生は、恰度江戸に赴かんとしてゐた宮部鼎藏と野口直之允とを同伴して萩に歸へられ、數日間滯留の上、二十三日萩を發し、二十六日富海から乘船航行して、十二月三日浪華に着いて大久保要と會見せられ、四日には京都に入つて、梁川星巖・森田節齋・梅田雲濱・鵜飼吉左衞門等と時事を談議して、廿七日江戸に達し鳥山新三郎の宅に重ねて投宿されたのであつた。

米使斬るべし

江戸着後、松陰先生は僅に數日を經て、安政元年の新春元旦を迎へられたのであつた。當時江戸には先生の鄕友知己である來原良藏・坪井竹槌・中村百合藏等が居り、肥後人では宮部鼎藏・轟武兵衞・魚住源次兵衞・末松孫太郎等がゐた。先生は日々彼等と相會し共に時事を論議されてゐたのである。

そこへ、元旦に實兄の梅太郎が江戸に着いたとの報を藩邸の瀨能吉次郎からよこして來たのであつた。梅太郎は去年十一月十四日長藩が幕府から相州警備を命ぜられたので、その地の都合役筆者として出張を命ぜられ、十二月十五日萩を發して江戸に來たのであつた。

しかるに、松陰先生は江戸着後、未た藩邸には入られないで、元旦には松浦武四郎（伊勢の人、名は弘、字は子重、號は北海・柳湖・雲川、蝦夷開拓防備論者）の許に宿つてゐられたが、先生は早速書狀を認めて喜びの辭を述べられ『委細拜眉ならでは申盡し難く奉存候』と云つてゐらるゝが如く、先生の心中には既に固く深く期せられたるものゝあるかの如く、而かも周邊の事情は忙匆且餘程急迫してゐた樣子であつた。

當時松陰先生は毎日同志知友の間を往來して時事を論究さるゝと共に、深略なる祕策を錬つてゐられたやうである。七日には永島三平や宮部鼎藏等と共に相州にまでも出かけて、實地調査をやつてゐられるが如き狀態であつたのである。

そこへ十四日に米使ペルリが前年の約に從つて重ねて來航し、軍艦六隻（後に一隻を加ふ）を率ひて江戸灣に闖入して測量をなし、十六日には本牧までも進んで來たのであるが、また退いて神

奈川沖に碇泊したのであつた。幕府はこのために應接館を横濱に設けて之に應對し、頗る厚遇を與へて媚態外交この上なしと云つた屈辱狀態を示してゐたのであつた。

當時松陰先生は、いま恫喝されて屈辱的に和親互市の條約を締結しては到底國權の維持は出來ない。一旦使節を速に退去せしめ、然る上に於て、互に禮讓を敷いて正々堂々對等の地位に於いて交渉を進むべきであるとの主張であつた。從つて米使の驕慢不遜の態度と、幕府不甲斐なき媚態交渉とに、いたく忿圭されて、切齒扼腕さるゝのみであつたのである、正月廿七日附で鄉里の父百合之助に送られた書狀に

可レ言事如レ山、百忙中百一も難レ盡、期二後便一候

正月廿七日奉レ一書一候、先は新春御滿堂樣御康寧奉二大賀一候、大兄（兄梅太郎）並私共於二爰許一無異送日仕候。十四日已來異船一條にて、東奔西走仕候へども○○難レ奏、天下の○○○○今日に窮まり申候、去三江戸一十二里、金澤沖に居、然○○夷船七隻碇を並べ居り候狀態、實に不レ堪二切齒一、旦日を逐ひて猖獗の形を顯はし、測量上陸言語同斷の趣に御座候、穩便々々之聲滿二天下一、人心土崩瓦解皆々太平を樂み居る中にも、有志之輩は相對して悲泣する耳に御座候、邸中も夫れに準じ、一統氣方は宴安の中に陷入り候、所レ願は　君上御英氣日々御盛の由、蔭ながら難レ有奉レ存候、侍御史の八木（甚兵衞）・政府の周布・浦の內秋良（敦之助）・其他來嶋又兵衞・來原良藏輩頻に周旋、不レ辱二國體一と天地に誓ひ居り申候、郡覺（郡司覺之進）も甚感心の趣に御座候。

肥後長岡監物、今日出府、柳河立花壹岐出府、監物も甚難レ行事情、千幸萬苦の由

大砲も此節に至り、始めて鑄造の議、決着、晩し々々

十五ドイム長　ホウイツヽル　六門

十二封度野戰砲二門

六ポンド同　二門

とあるのを見ても、當時の急迫せる事態と共に松陰先生の憂情意氣とを知ることが出來る。

かくなつては、最早實力なき幕府を賴りにすることは出來ない。縮み上つてゐる幕府では到底國權の維持など出來るものではない。それに三百年來太平の迷夢未だ覺めない三百諸侯に於いては尙更何等爲すべき術策もない。可憐な國民は天下の狀勢も知らずして、只東西に奔走騷ぎ廻つて

ゐるのみであるのみならず、所謂憂國志士といふ連中に於いても、唯攘夷々々と口にするのみであつて、一死以てこれが解決に乗り出さんとするが如き、熱血殉國兒は一人も見當らない。最早このままではゐられない。よし先鞭を着けて『米使斬るべし』と最後の斷に突進されたのであつた。

米使を斬つて日本帝國の武威を示してやる。米人を屠つて大和男の氣魄意氣を示してやる。さすれば米國の非禮不遜極まる脅迫外交も、少しは、反省後退することであらう。それにもまして六十餘州の人心は必ずや緊張振作することであらう。一切に目を外夷にまはして敵愾心を振ひ起すことであらう。こゝで國内人心の統合奮起が出來て、對外策も自づと確立さるゝことであらう。いまとなつては、これより外に仕方がない。これを措いて他には術策がない。この爆彈投下にこの一身を供するのが、この松陰であると觀念されたものゝやうである。

後年（安政二年）久坂玄瑞が入門時に（前詳）與へられたる書中に

癸丑の年（嘉永六年）僕東に在りしも、墨使（米使ペルリ）を斬らんことを思はざりしが、其冬（長崎碇泊の露使プチャーチン）西のかた長崎に至りしに、宮部切に僕の怯懦を責む、僕反つて詰るに、其魯使を斬らざるを以てす、（これ松陰先生と宮部との論爭なり）宮部其當に斬るべきなきを陳べ、反覆して屈せず、甲寅（安政元年）の年に及んで、僕宮部と同じく東す、一日憤然として墨使（米使）を斬らんと欲す、已にして其益なくして害あるを思ひ、遂に其謀をとめたり、凡そ僕輩の無能なることかくの如し　云々

と、謂つてゐらるゝのを見れば、この夷使誅斬問題に關しては、夙に宮部との間に於て相當討議されてゐたものゝやうである。嗚呼失墜せんとする國威を如何せん『斬らんかな斬らんかな』嗚呼この社稷を如何にせんとの憂心勃々たる論爭を重ねてゐられたやうである。

而かも、いまは江戸城下の盟をよぎなくされ、國威國權を失せんとするが如き急場となつては、最早寸時も猶豫は出來ない。『宜しく米人斬るべし』と最後の覺悟を定められたものである。しかし、飜つて考へて見るに、いまの軍備、いまの人心、いまの國力では到底勝ち味はない。勝ち味のない戰ひは禁物である。いま日米間に葛籐を生ぜしむるは、『益なくして害あるのみ』だ。遂に思ひ止つて、それよりも一度親しく海外に航し實地調査研究の上、適切有效なる國家百年の大計を樹立すべきであるとされたのが、あの下田米艦搭乘事件となつて現はれたものである。松陰先生は『遂に其謀を思ひ止まつた。これは僕輩の無能なるか故であつた』と、久坂に告白してゐら

れるのである。

下田に於ける米艦搭乘事件

佐久間象山の贈詩

之子有二靈骨一。　之の子（松陰先生）靈骨有り
久厭二蹩躠群一。　久しく蹩躠（あしなへの如くぐず〳〵すること）の群を厭ふ
振レ衣萬里道。　衣を振ふ、萬里の道
心事未レ語レ人。　心事、未だ人に語らず
雖二則未一レ語レ人。　則ち未だ人に語らずと雖も
忖度或有レ因。　忖度す、或は因る有り
相送出二郭門一。　相送つて、郭門を出づれば
孤鶴横二秋旻一。　孤鶴、秋旻に横はる
環海何茫々。　環海、何ぞ茫々たる
五洲自爲レ隣。　五洲、自ら隣を爲す
周流究二形勢一。　周流、形勢を究めよ
一見超二百聞一。　一見は百聞に超ゆ
智者貴レ投レ機。　智者は機（時機）に投ずるを貴ぶ
來歸須レ及レ辰。　來歸、須らく辰に及ぶべし
不レ立二非常功一。　非常の功を立てずんば
身後誰能賓。　身後、誰れか能く賓せん

これは松陰先生が長崎に赴き、露船に投ぜんとされた時に、旅金四圓を添へて佐久間象山が先生に贈つた送別激勵の一詩である。象山は松陰先生海外雄飛に對する蔭の力であつた。この長崎露艦事件が米人誅斬論となり、この延長が下田米艦搭乘事件となり、この下田踏海の壯擧が、松陰先生の大陸・南進政策具現の第一歩への踏み出しとなつたのである。

『米人誅斬すべし』の謀策を思ひ止まられて以來といふものは、日夜同志の間を奔走して、我が對米交渉に關し、百方苦慮謀略をめぐらしてゐられたのであるが、幕吏米使數次會見交渉の結果、

遂に安政元年三月に至り日米通商和親條約十二ケ條を締結して調印するに至つたのである。

松陰先生が前年來の苦心努力も、いまは全く水泡に歸し、百方の奔走も何等酬ひらるゝ處はなかつた。最早事ここに至つた以上は、心氣を一轉し、感念を新にし、先生が素志であつた海外雄飛の決意を定められ、この機會に窃に米艦に投じて一度海外に航し、世界の現勢と實情とを實地に探究して防寇對策に資すると共に、封建日本の舊殼を打破し、明治新日本百年の建設大計を樹立せんと企圖さるゝに至つたのである。

松陰先生は既に萬里鵬程の雄圖を心中深く決せられたのであつた。獨り澁木松太郎のみに、その衷情秘策を語つて、他の同志には一切秘してこれを告げられなかつたのである。この松太郎、本名は金子重之輔、名は貞吉、萩在澁木材商佑茂左衛門の男であつた。夙に土屋矢之助に學を受け、後に足輕となつて江戸に出で、鳥山新三郎の宅に寓してゐたのであるが、松陰先生と相見するに及び、いたく先生の說に服し、遂に俱にこの下田踏海の壯擧に畫策するに至つたのである。

雨の瑞泉寺

この下田米艦搭乘事件に關しては、もと〳〵松陰先生は兄梅太郎に心配をかけてはならぬとあつて、暫らく鎌倉に隱遁し、竹院和尙に付て禪學なりとも學ばんと云つて誤間化してゐれたのであるが、實は『丈夫有レ所レ見。決レ意爲レ之。富岳雖レ崩。刀水雖レ渴。亦誰移二易之一哉』と、非常な決意を以て江戸を出發せられ、その夜は保土ケ谷に宿し、六日には横濱で象山に會せられ、當時碇泊中の夷船に近寄つて事情を探知せんとされたのであるが、事志と違ひ同夜は象山の許に宿まられてゐる。七日には象山の添書を持つて浦賀の同心吉村一郎が恰度神奈川に出役してゐたので、これを賴つて薪水積み込みの官舟に乘り、夷船の樣子を探らんとされたのであるが、これ亦失敗に歸したのであつた。

八日は本牧に往き地形海勢などを見聞して再び保土ケ谷に歸へり、もとの宿屋に投じてゐられる。九日には夷人が横濱に上陸してゐるとの報を得られたので、早速これに一書を附せんと決心されて、横濱に出かけられた時には夷人は既に去つてゐた時であつた。いかにも殘念、今夜はたとへ小舟を盜んでも是非乘り出し、夷船に近寄らんと海濱を徘徊して小舟を發見されたので、喜んで一應保土ケ谷の宿屋に歸へり、用意を整へて夜分に行つてみられると、これまた漁人が既に乘り去